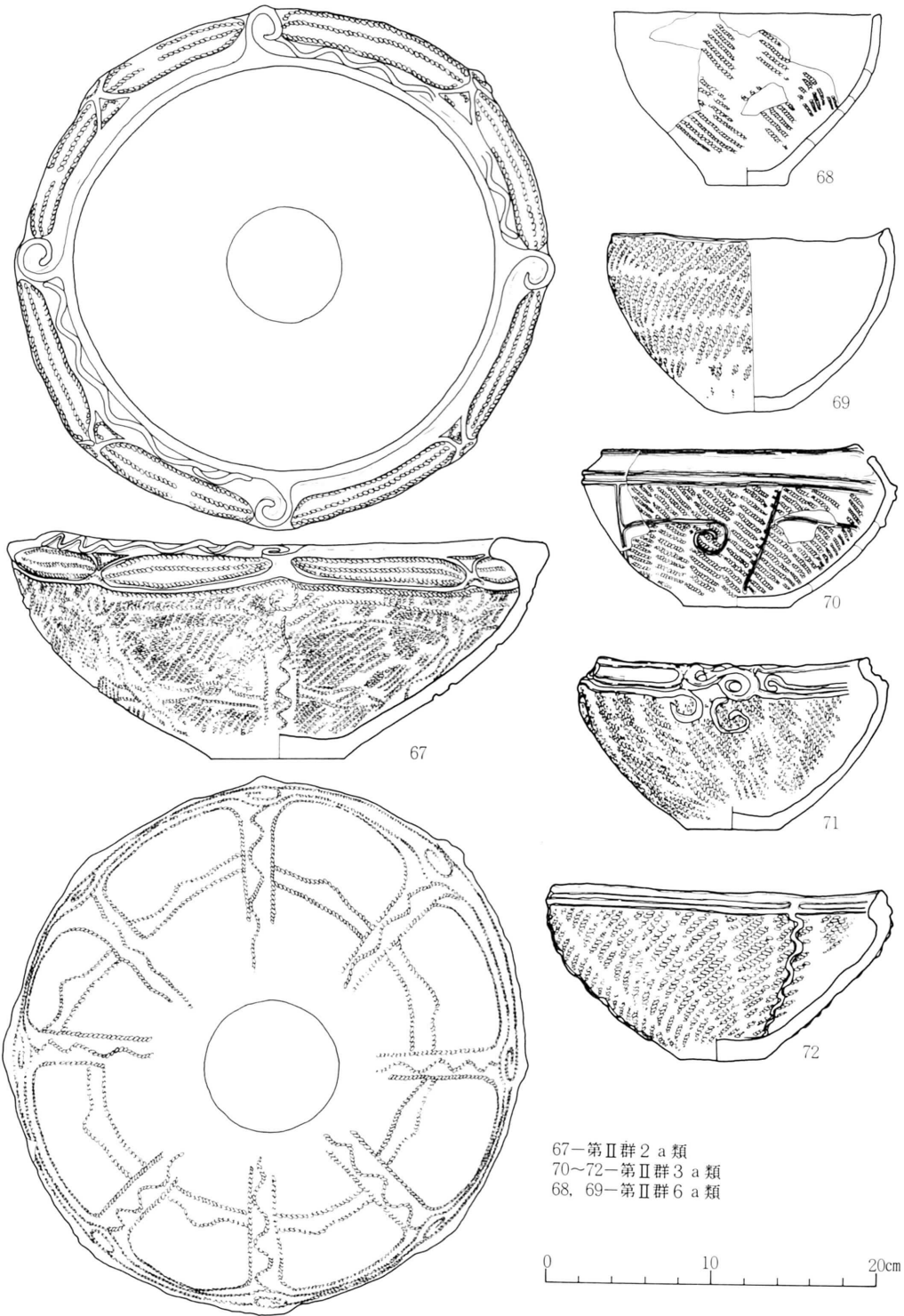


61, 62第Ⅱ群4 d類
他第Ⅱ群3 i類

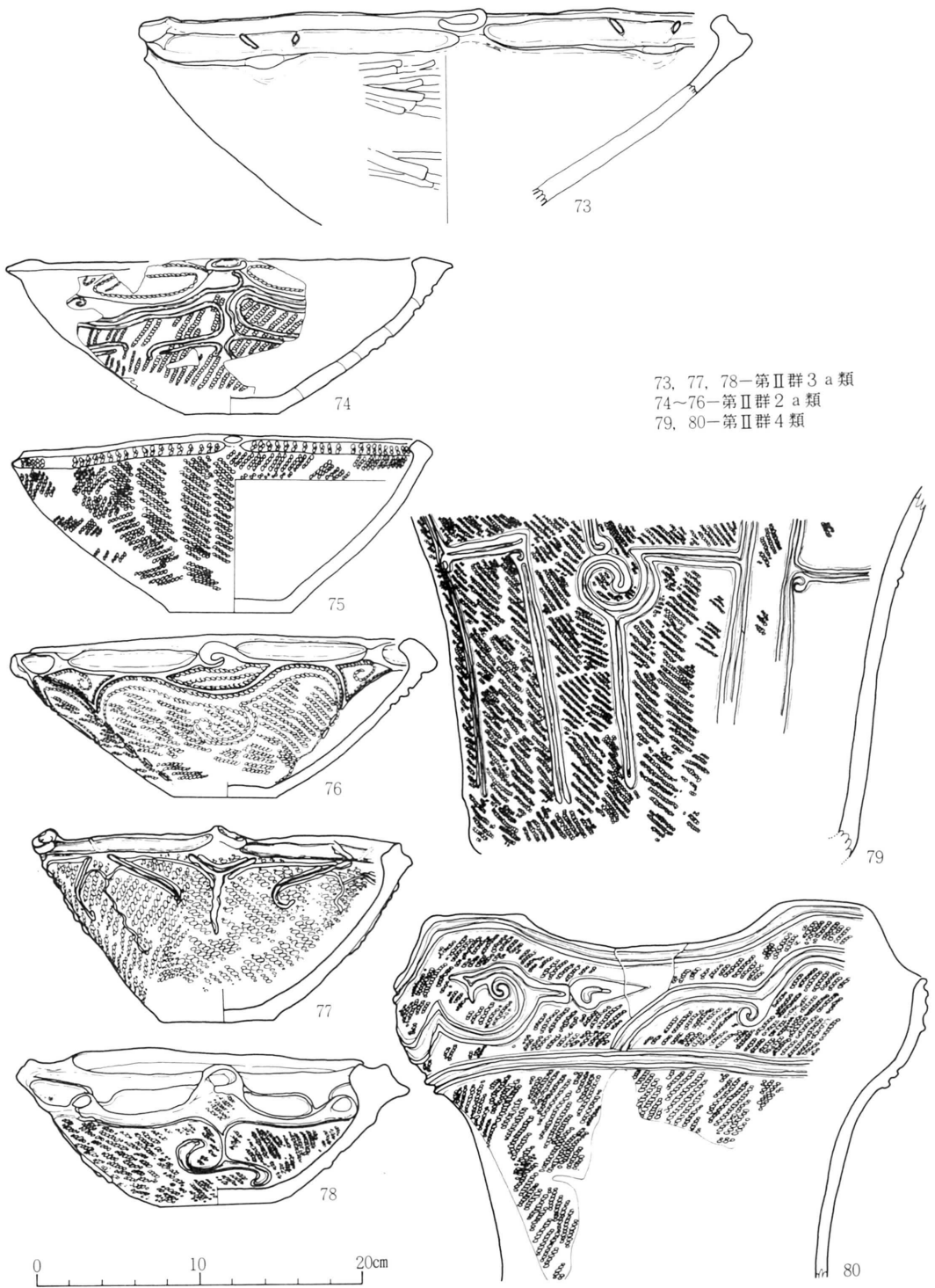
0 10 20cm

第147圖 土器実測図



第148図 土器実測図

— 西田遺跡 —



第149図 土器実測図

2 土偶 (第 150 図)

5 個体出土しているが、遺構内出土品は少なく、150 図 1.4 の下半分がそれぞれ住居跡、フラスコ型ピットから出土している。すべて欠損品である。

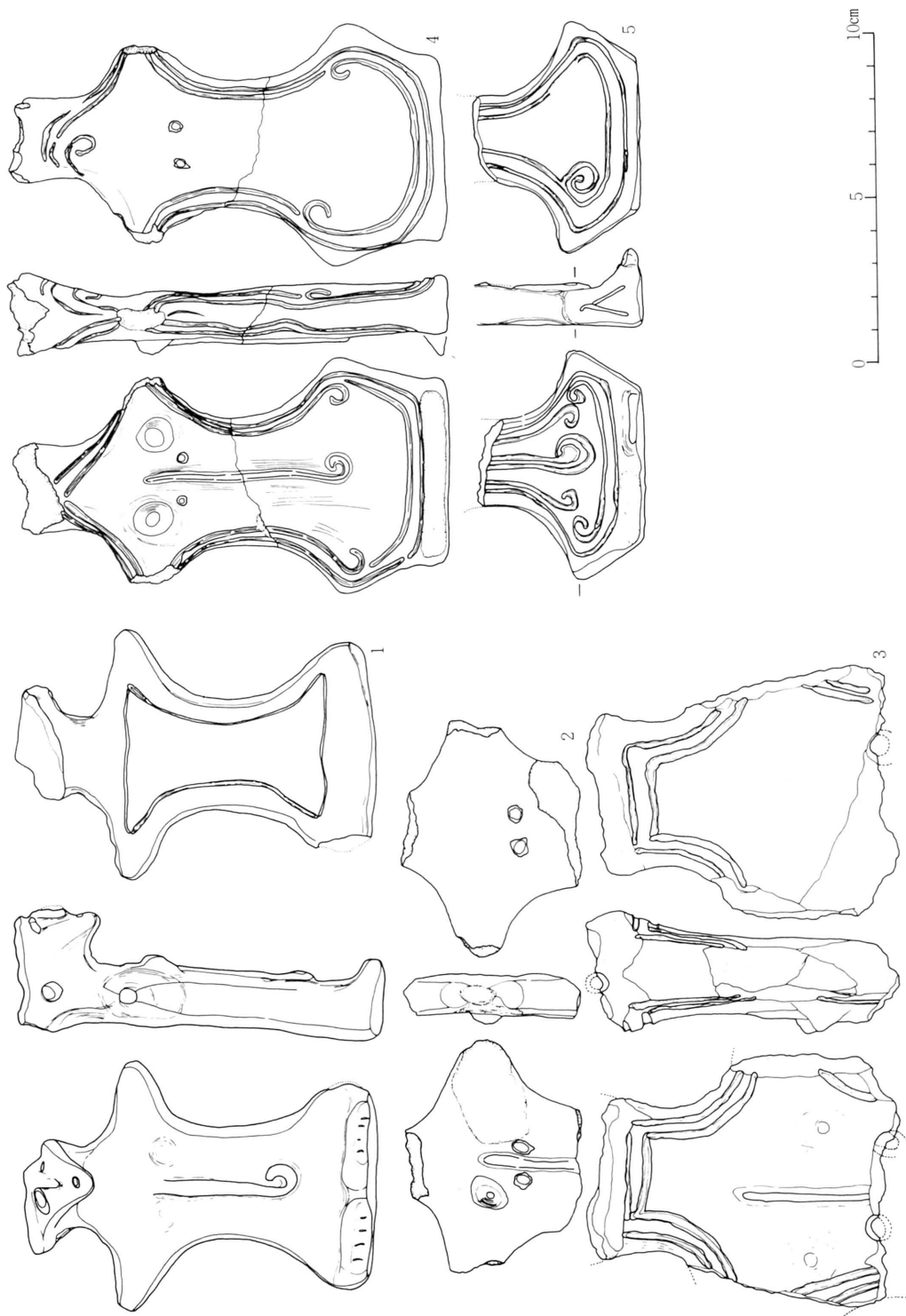
5 個体いずれもほぼ同様の形状を呈し、板状の胴体に横に広げた短い両手と、前に小さく張り出した両足とが見られる。1 は片耳部分を除いてほぼ完形品であるが、頭部は挿鉢型に広がっており、その前面に顔が形作られた者である。顔は隆起した鼻筋と、小さく掘られた目鼻とによって表わされているが、表現はかなり稚拙といえる。挿鉢状の頭部の両側には貫通孔が見られる。耳を表現したものであろう。体部正面には、丸く脹らんだ2つの乳房があり、乳房間から腰部付近にかけて走る隆起線が見られる。隆起線は腹部付近で渦巻文を描く。足は体部下端の正面に張りついた形で作られているが、両足の前面に小さな刻み目が見られることから、指を表わしたものと考えられる。体部背面には一本の沈線文が描かれている。以下は模様の有無や形態の相異などに若干の相異点はあるものの基本的な形態は1に類似するものと思われる。2は体部の正背面共に沈線文などの模様は見られないもので、胸部下に2個の貫通孔が見られる。この貫通孔は3、4共に共通するものである。3は比較的大型の土偶である。欠損品であるが頭部は1同様に挿鉢形を呈しているものと思われ、両側面の耳部分にやはり貫通孔が見られる。体部の正背面には2本の沈線がめぐっている。4は胎土、焼成、模様共に最も精製された土偶である。両耳、両胸部下の貫通孔は3に類似する。体部正背面の模様は一部渦巻文を描く沈線によっている。5は4に類似するものであるが、腰部下の両側面にやはり沈線文が描かれている。

3 土製品 (第 151 図)

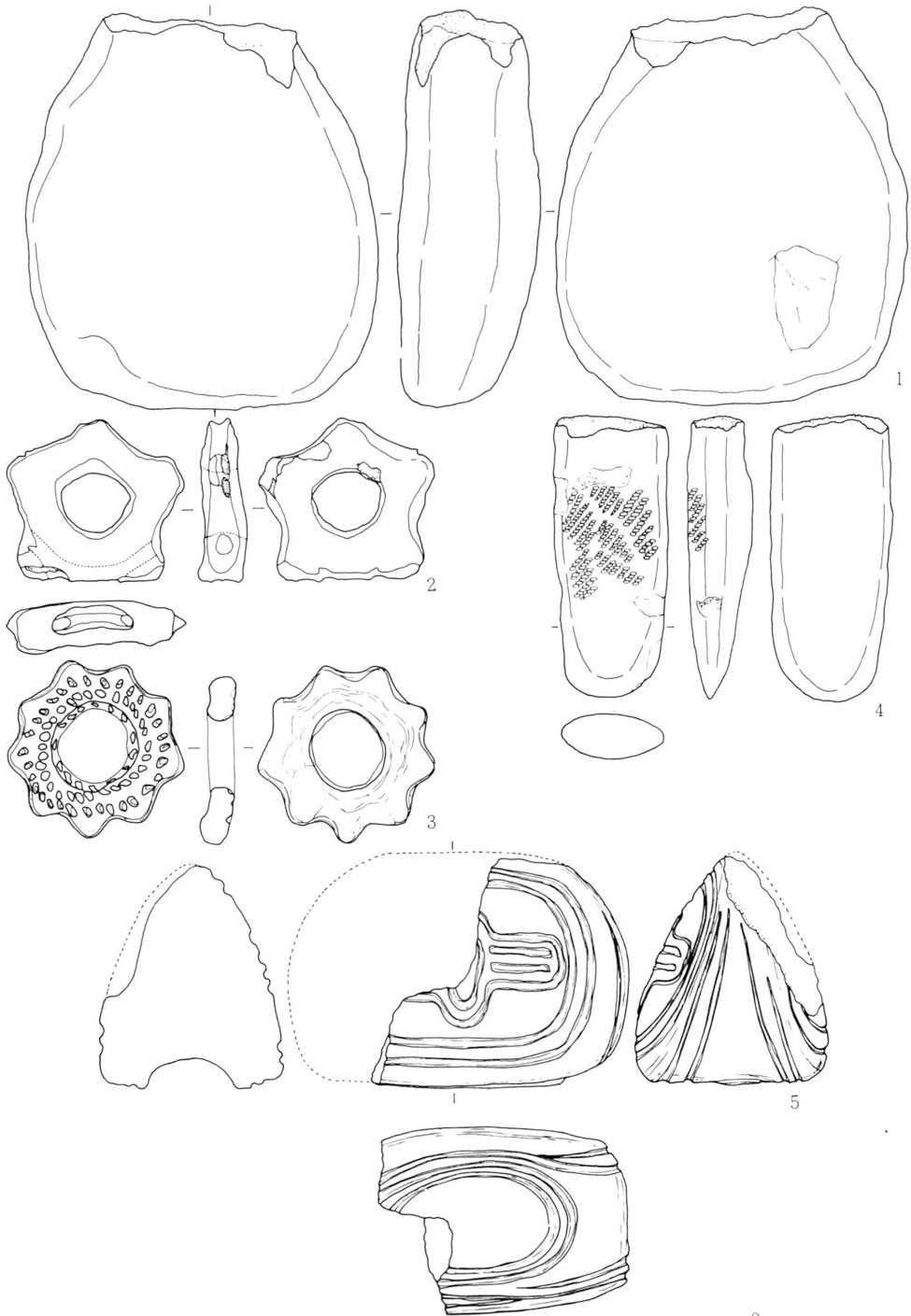
土製品は種々のタイプを含めて6点出土している。

1は手捏ねで作られた土製品である。特に施文もなく、表面は整形時の指の跡が残る粗悪な作りである。上部が欠損しているが、ツマミ状のものが取り付く可能性が強い。下部は平坦に作られており、基部と機能部とを意図した可能性が考えられるが、実用品であるか否か、またその用途などについては不明である。4は磨製石斧の形態に似るいわゆる斧状土製品の『刃部』である。『刃部』は比較的鋭利につくられている。表面には $R < \frac{1}{2}$ の地文が施されている。

2、3は中央に孔が作られた土製品である。2は5つの突起を有し、図中下端の2つの突起には左右から穿たれた貫通孔が見られる。また上部3つの突起は中央部が横方向に窪んでおり、下端の貫通孔を通して土製品の外周を回る様に紐をかけたものと思われる。貫通孔周辺、窪みの部分ともに使用による摩耗が著しい。3は2に類似した形態だが、貫通孔などは見られない。外周の突起は9つあり、特に使用による損耗は見られない。正面、内周面に刺突文が見られる。



第150図 土偶実測図



第151図 土製品実測図

0 5cm

5は断面三角形の土製品である。約半分が欠損しており、現存長は7.2cmを測るが、推定最大長は約10cm、最大幅5.4cm、高さ約7cmで断面形が二等辺三角形を呈す。正面、背面共に沈線による模様が描かれ、側面から底面にかけても沈線がめぐる。底面中央には楕円形の窪みが作られている。用途等については不明であるが、形態は186図269の石製品に似ていることから、あるいは模倣品とも考えられる。

4 石器 (第152～185図)

石器は北部地区の縄文期集落跡全体で約300を超える点数が出土している。その他後述の石製品も出土しているが、利器あるいは工具その他の日常の道具である石器と、石製品と区分するメルクマールが判然としないため、本遺跡では石製装身具など特殊な遺物のみを石製品として取り扱った。各遺物の出土地点や観察、計測事項は一括して表記した。

第1類 尖頭器

1—A類 石鏃(152図1～19)出土数は非常に少ないが形態は一様ではなく、次のグループに区分される。

○無茎のもの

- ① 正三角形を呈し、基部に抉入が見られる。非常に小型で薄手のもの(1)。
- ② 二等辺三角形を呈し、側縁がほぼ直状であるもの。基部は抉入がある(2～7)。このうち2、3は幾分小型で、やや正三角形に近いものである。また、4は基部の抉入が浅い。
- ③ 形態的には2に似るが、側縁が外側に張り出す形となっているもの(9)。8はやや不整形であるがこの種類に含めた。基部の抉入は浅い。
- ④ 二等辺三角形を呈し、基部が平坦なもの(10～12)。このうち10は基部が幾分えぐれ気味であり、11、12は幾分外側に脹らむものである。側縁はほぼ直状を呈す。
- ⑤ 側縁が僅かに脹らむ棒状のもので、最も薄手に入念な加工が施されているもの(13、14、17)。このうち13は基部にえぐり込みがあり、17は平坦となっている。3点ともに尖頭部は欠損している。
- ⑥ 細身で棒状を呈し、基部もやや尖頭形をなしているもの(18)。小型で、入念な加工が行われている。

⑦ 基部が半円形をなすもの(19)。側縁は直状を呈し、薄手である。

○有茎のもの

2点のみ出土した。

- ⑧ 小型で短い茎部を有するもの(16)。二次加工は側縁にのみ集中して行われている。
- ⑨ 茎部にさらに抉入があり二股になっているもの(15)。

1-B類 石槍（第152図26）

確実に断定でき得るものは26の1点に限られる。尖頭部は欠損しているが、両側縁、基部ともに入念に加工されている。基部は緩く抉り込みされている。

1-C類 その他のポイント（第152図20～25）

図中には未製品、欠損品も含まれているが、加工の状態が1、2類とは明確に異って粗製のもので、尖頭部使用の可能性が考えられる石器類を集めた。尖頭部の開き角は1類に比べてかなり鈍角である。用途は1、2類に含められるものであろう。20、23、24は加工の状態が粗く、未製品か？

21は表、裏面共に二次加工が行われたもので、尖頭部開き角は鈍角である。22、23は加工が尖頭部と側縁にのみ集中するもので、片面に自然面を、片面に一次剥離面を残している。基部の加工は甘い。

第2類 石錐（152図27～29）

三点のみ出土した。次の2種に分けられる。

a ツマミ状の基部を有するもの（27）。基部、先端部共に欠損している。断面形状はほぼ菱形を呈する、加工は粗い。

b 上記のツマミを有さず棒状のもの（28、29）。

28は比較的短かいもので、加工が粗く先端部は鈍い。28、29ともに上面にはプラットフォームが残る。29は細長く入念に加工されているが、使用による摩耗はほとんど見られない。

第3類 ツマミを有する切削器類、いわゆる石ヒである。（第153図30～56）。

形態、刃部の加工状態等から次の様にグルーピングできた。

a 刃部の位置がツマミの方向に対してほぼ平行する位置にあるもので、刃部の加工が片面に集中するもの、又は刃部の状態が片刃様になっているもの（153図30～37、39）。

① 小型で薄手、形状は楕円形を呈しているもの（31）。肉薄の剥片素材を使用し、側縁に僅かな刃部加工を施したもので、刃部角は極めて薄い。

② 刃部加工はツマミ方向にほぼ平行して行われ、直状を呈しているもの（30、33）。断面形は台形に近いが、刃部角は一方がやや薄く、他方が厚めである。

③ 両側縁が弧状にカーブした刃部となっているもの（32、34、35）。32、34は両側縁、先端部共に刃部角大で、3辺に使用によると思われる小剥離が見られる。先端部も含めて刃部機能を有したものとわれ、先端部は特に剥搔の機能が考えられる。

④ 両側縁・先端部がほぼ直状の刃部を形成しているもの（36）。刃部の加工は側縁のみ集中しているが、先端部も僅かな加工痕と共に使用によると思われる微小剥離が見られるもので、3辺ともに刃部角は薄い。形態の相異はあるが、37、39もこのグループに含められるものと思われ

る。3点は共通して他のグループに比して石器の調整、加工の甘いものである。

b 刃部の位置がツマミの方向に対して平行に近い位置にあるもので、刃部加工が両面に行われているもの(40~45)。

① ツマミと平行する両側縁に直状の刃部が加工されているもの(38)。両面加工により刃部角は大である。また、先端部は二次加工が施されていないが、歯こぼれ状の細かな剥離が見られる所から、3辺の使用が考えられる。

② 全体として三角形に形作られた石器類で、一側縁がツマミの方向に平行し他側縁が斜方向となっているもので、先端部は幾分尖頭形を呈する(40、41、44)。刃部は両側縁に両面加工により形成されている。

③ ツマミの方向に対して両側縁の方向が斜方向に向いているもの(43)。先端部は半円形を呈する。刃部加工は三方に行われているが、左側縁は片面加工となっており、裏面に歯こぼれ状の小剥離が見られる。42は先端部が欠損しているが43に類似するものであろう。

④ 刃部が丸くカーブした両側縁に認められるもの(45)。

c 全体が円形のもので、周縁全体に二次加工が行われているもの(46)。かなり広範な部分が刃部として機能したと思われるが、刃部の加工状態は一様ではなく、片面加工されて刃部の薄い部分と両面加工によった刃部角大の部分とが見られる。用途に応じて使い分けられたものと考えられる。

d 刃部の位置が、ツマミの方向と直交、またはそれに近い位置にあるもので、刃部加工が片面加工によるもの(第152図47~53)。

① ツマミの方向と刃部の位置が斜方向にあるもの(47~49)。一様に肉薄の剥片を素材として、比較的簡単な刃部加工が行われたものであり、刃部角は小である。

② 刃部がツマミの方向とほぼ直交するもの(50~53)。ツマミの位置は左右いずれかの位置に偏っている。50は肉薄の剥片を使用したもので、刃部角は小である。50~53は丁寧な二次加工が施されている。

e 刃部の位置がツマミの方向と直交するもので、両面加工により刃部が形成されているもの(第154図54、第155図55)。

① 形状は**d**②類に似るが、刃部は表裏両面からの加工によって直角に近いものとなっているもの(54)。

② 形状は左右対象形となっており、刃部は①同様のぶ厚い刃部となっている(55)。

第3類の石器類はツマミの作成により一括したが、刃部の位置や加工状態、刃部角によって種々にグルーピングされる。これに準じてやはり個々の石器の持つ機能も異っていることが考えられた。

第4類 いわゆる筥状石器である（155図57～83）

4類に包括した石器類は、形態や刃部加工にも差異があり個々の石器の機能する所も異っているものと思われるが、長方形に近い形態で、主として下端に刃部を意図しているもの、また調整剥離のされ方などから次の5類の石器類とは分離したものである。主に切削、剥搔機能を有する石器類と考えられる。

a 細身で棒状の石器類（第155図57～60）

57は一部欠損しており刃部の在り方が不明瞭であるが57～59ともに両面加工による両刃様の刃部を有するものである。59については刃部加工の状態は77、78に似る。60は裏面に一次剥離面を残した片面加工であるが、先端及びサイドに刃部を有するものと思われる。

b 刃部加工が片面に集中する石器類（61～66）。

① 横長剥片を使用し、裏面にポジティブな一次剥離面を残す石器類（61、63）。刃部は先端部とともに側縁使用の可能性もある。63の裏面はバルブが剥離によって除去されており、先端部、側縁ともに使用によりかなり摩耗している。

② 65は縦長剥片を使用し片面にのみ調整剥離、刃部加工を施したものである。裏面のバルブは除去されている。

③ 表裏面ともに調整剥離により形作られているものの、刃部加工は表面にのみ施されている石器類である（62、64、65）。このうち62、64は調整剥離により裏面はほぼ平坦に作り出されている。形状は最大幅が刃部付近にある二等辺三角形状となっている。65は左側の加工は両面に及んでいるものの先端にある刃部の加工が片面にのみ行われ、刃部が片刃様となっているものである。

④ 72は先端部がやや尖頭形を呈するもので、尖頭部を中心に片面加工による肉厚の刃部が作られたものである。全体は調整剥離により両面を整形されているが加工部分は片面に集中する。側縁は刃潰し状の小剥離が見られる。剥搔器と考えられるものである。

c 刃部加工が両面に及ぶ石器（67～71、77～80）。

① 表裏面ともに入念な調整剥離と刃部加工が行われた石器類で形状はほぼ短冊型に近いもの（67～70、80）。側縁には刃潰し状の小剥離が見られる。67は刃部が使用により摩耗している。80については後述の打製石斧との関連性も考えられるが、石質、加工の状態が類似することからこのグループにまとめた。着柄痕は観察できず、あるいは手斧の可能性も考えられる。

② 71は形態的には67に似るが、側縁、刃部とも両面加工である。側縁部は特に刃潰れの痕跡が著しい。

③ 細身の短冊型の石器類である。77は周縁すべてが両面から二次加工が行われている。78は表面に自然面を残して調整剥離され肉厚で、裏面はほぼ平坦に作り出されている。上体は片寄り

があるが刃部は両面加工により、両刃様となっているものである。

④ 82は短かい撥形の石器で、側縁と先端部に両面より細かい二次加工が行われている。完形品。第158図81も加工の状態はこれに似る。

第5類 (158図84～123)

Utilized-flake を含めて各種のスクレーパー類を包括した。形態、刃部の在り方共に一様ではなく不定といえるが、幾分定形化の見られる石器類については小グルーピングして記述する。

a 方形あるいは台形状の剥片の一端に方面加工の刃部を有するもの(85、86)。85は上部に自然面を残したもので、表面にバルバースカーが見られる。側縁の一端にも刃部を意図した加工が見られる。84はaのタイプに似るが刃部加工はほとんど行われず、先端部と一方の側縁に刃こぼれ状の小剥離を残す U-flake である。

b 88は離面に自然面を残した細長い剥片で、先端部に半円形の刃部を加工したもの。89は肉薄の剥片の端辺に押圧剥離による加工を施したもの。左側縁にも僅かな刃こぼれ痕がみらる。

c 不定形の横長剥片の長辺に刃部加工を施したもの。または刃こぼれ状の使用痕が見られるもの(90～99)。形態、刃部加工にもあまり斉一性は見られない。99は刃部角が大きく、搔器様を呈している。

d 円形または不整形の一辺に使用痕が見られるもの(100～103、102～112)。刃部加工、石器の機能等は **c** 類と大差はないものと思われるが、素材の形態等に **d** 類とする斉一性があるものである。100は両面からの細かい刃部加工が行われている。

e 縦長剥片の側縁に刃部加工が施されているもので、形状は一様に尖頭形かやや半弓形を呈するタイプ(106～108、113～114)。刃部加工は両側縁に行われているものも見られるが(107)、主として弧状を描く側縁に見られる。いずれも一部に自然面を残した剥片を使用。刃部角は薄く、サイドスクレーパー、又はナイフとして良好な刃部である。また刃こぼれ状の使用痕が見られる。

f 縦長剥片を素材とし、側縁に直状の刃部加工が行われているもの(116、117)。**e** 類に比べて刃部角は大である。また116は下端辺に117は上端辺にも僅かな加工が見られる。

g Notched Sclaper (123)。不定形の大型剥片を使用、二辺にコンケーブした刃部作り出しが見られる。二辺ともに両面加工により、ぶ厚い刃部をとっている。122も側縁部はこの類か？

118～121は欠損品及び未製品である。

第6類 磨製石斧 (第162図124～150)

合計30点程出土しているが、破損品が多い。破損の状況は上下に横に折損した例が19点見られ、縦に折損した例は3点である。

製作方法は擦切石斧(**a**類)が1点、他は一般的な磨製石斧(**b**類)である。163図130は一

方の側縁に擦切の段差を大きく残すもので、頭部も削った痕跡をそのまま残している。全面に調整の擦痕が明瞭に残り、刃部は使用痕が顕著である。また頭部付近に着柄時のものと思われる磨耗痕が見られるものが多く、132、135、137、140、146等はそれが顕著である。刃部の形態は蛤刃型に開くもの(133、144)、緩い弧を描くもの(132、134、136等)、半円形の弧状を呈するもの(136、151)が見られる。また裏面がほぼ平坦で、刃部が幾分一方に片寄るタイプ(131)も見られるが大概刃部の作り出しは両刃様である。

この他、調整擦痕等が不明瞭で、磨製石斧とする認定の難しい石器類に139、143、145がある。石質は安山岩系統を使用して、作りの粗悪なものであるが、磨製石斧に類似した頭部と刃部との作りが見られることから磨製石斧c類と分類した。

また、磨製石斧類の中に二次的使用のための再生が行われた石器類が見られる。これらは破損品のみならず、ほぼ完形品と見られるものにも、見うけられるものである(166図148～167図152)。148は刃部破損の後二次加工が加えられ、敲打具として再生されたものと思われる。この痕跡は頭部にも見られる。二次的な機能としては9類石器に似る。149は頭部、刃部にやはり敲打痕が見られ、刃部はすでに石斧としての機能を失っている。また両側面には一次的な調整面とは異った磨面が見られ少数の小剝離を伴っている。この側面の磨面が二次的使用面(例えば磨石として)か否かについては判然としない。この例は151、152にも見うけられるもので、151は周縁すべてに二次的剝離が見られる。頭部の剝離はかなり磨耗し、両側面は剝離の後使用による磨面が形成されている。再生後10-c類の石器に準じた使用をうけたものであろう。152は頭、刃部共に敲打痕が見られ、両側面に二次的磨面が見られる。150は完形の磨製石斧であり刃部も完全に遺存しているが一方の側縁に細かい剝離が加えられ、刃潰れの痕跡が顕著である。やはり再生され、敲打に使用されたものと考えられる。

第7類 小型磨製石斧 (第167図153～159)

形状、製作方法は磨製石斧に似るが、極めて小型のもので、用途は特殊のものがあると考えられる石器類である。実際には18類石器に似る石器も含められた。

153～155は全く磨製石斧b類に似る。丁寧な調整擦痕が見られ、刃部には刃こぼれの痕跡がある。159は棒状を呈し頭部は平坦に作られている。刃部にはやはり使用痕が見られる。156、158は側縁に剝離を伴っており、18類の石器類に類似しているが、いずれとも不明瞭なものである。158は下端に刃部の作り出しが見られる。157は自然石を使用。僅かな研磨調整によって磨製石斧の形状に似せたものである。自然面が大きく残る。

第8類 打製石斧 (第168図160～168)

a 全体を粗く調整剝離したもので、着柄部と考えられる挟り込みが一方側縁に見られるものである(150、161)。共に千枚岩を使用。調整剝離は板状に行われている。頭部、刃部共に欠損

しているため詳細は不明瞭である。160は片面に自然面を残す。

b 短冊型を呈する打製石斧である（162、163）。163は一部自然面を残すが、周縁を剥離させ形作っている。全体が磨耗している。162は小型であるが、このグループに含めた。

c 裏面及び一方の側面に自然面を残すもの（164～168）。図の他に1点出土。いずれも凝灰岩類を使用している。表面は二次剥離により形状を作り出しているが、大概この種類に含められるものと思われる。163、165は両面の一部に自然面を残している所から、素材は扁平な石を使用したものであろう。特に着柄を意図した作り出しは認められず、また着柄による磨耗の痕跡も見受けられない所から、手斧である可能性が考えられる。

第9類 （第170図169）

自然石を利用し、上下の端部を敲打、磨石として使用したものである。上下とも僅かな剥離によって形状を整えたものと思われる。下端は敲打の後、磨り潰し具として使用されたものか磨面が形成されている。上端は敲打に使用されたと思われ、刃遣れが顕著である。二次的使用例としては6類石器の再生例がある。

第10類 敲打、磨石類 （第170図170～222）

機能としては上記の9類に準ずるが、形態が一様に横長、扁平の石を使用し、その一側面または両側面を使用している点で大概共通する石器類である。本遺跡の石器類中では最も出土頻度が高く、総数約80点を越える。本類の石器類中にはいわゆる磨石・敲打類、また半円形扁平打製石器と呼ばれる石器類も含まれるが、素材となる石の定形化と、それらの石器類に見られる機能が重複する例も多く、分離できないものとして、本類にすべて含めた。

a 長辺の一側面に使用による磨面が形成されているタイプ（170～189）。磨面の幅は約0.5cm～3cmとばらつきがあり、素材となる自然礫の大きさ・形状も様様ではない。188、189は磨面の側面に僅かな小剥離が見られるが、整形あるいは加工のための剥離とは異なり、使用時の破損と思われる。

① 長辺の一側面にのみ使用による磨面が形成されているタイプ。

② 長辺の二側面に使用による磨面が形成されているタイプ（181、184）。184は断面三角形を呈するもので、二つの稜にあたる側面に磨面が形成されている。また181は扁平な礫の両側面に幅約0.3cmの磨面が形成されているものである。

③ 長辺にあたる側面に磨面が形成され、短辺に敲打痕が見られるタイプ（176、181）。

b 磨面に側して小剥離が見られるタイプ（190～202、207）。

① 剥離の一端はすべて使用時に磨耗しており、剥離後使用され磨面が形成されたことが窺われる。故にこれらの剥離は使用時の損耗ではなく、形を整えるための加工であると考えた。恐らくは長楕円形の自然礫の一側面に一定の直状面を得るために行われたものであろう。結果的には

10—b類石器も一方に楕円形の自然形状を残し、一方が直状磨面となり半円形の形状を呈する石器が多かった。磨面の幅は0.5cm～2.5cmとやはりばらつきがある。

② 一側面に剝離を伴う磨面が形成され、他側面にさらに使用面が見られるものである(201、209、214)。201例は一方が剝離を伴うb類磨面であるのに対し、他方はこれを伴わないa類磨面となっている。214は平行する二側面が共にb類磨面には到っていない。後述の敲打痕とは明瞭に区分できないものであった。また平面中央の表裏同一部分に二個所の浅い損耗部分が見られる。この損耗痕は数点の石器に見られたが、明瞭なものはこの1点に限られ、性格を言及するには到らなかった。209は一側面に良好なb類磨面を形成し、他側面にも剝離の見られる石器であるが、この面の剝離はc類の弧状側面作り出しとは異なり、b類剝離に似る。しかし側面の使用は磨面形成は行われておらず、むしろ敲打面と考えられるものである。

③ 一側面に剝離を伴う磨面が形成され、端部を敲打に使用しているタイプ(198、201、207)。198は磨面の幅2.4cmと幅広く、磨面加工の剝離がかなりの磨耗を受けたもので、よく使いこまれた状態を呈している。また両端はいわゆる敲打石として使用による磨耗が著しい。

c 一側面に剝離を伴う直状の磨面を形状し、あるいは弧状の周縁に剝離を行ったタイプ(208～213、327)。直状の磨面に伴う剝離痕はa類石器の観察に準じてよいが、弧状の周縁に伴う剝離には次の特長が見られる。

○ 弧状の形態を作り出す加工の意図が強いものであること。顕著な例は215に於いて見られる。215は使用痕の見られない未使用の石器である。素材は隅丸方形に近い形と思われ、一方の側面は僅かな剝離のみではぼ平坦な自然を残し、周縁は弧状に加工されている。直状面を磨面として使用する意図と考えられ、この例から明らかに半円形の形態を作り出す意図が窺われた。未使用例は図示した他に一点見られた。

○ 弧状周縁部は磨耗の状態に差異が見られること。213、218では側縁が稜をなし、ほとんど磨耗していないものであり、205、208、211では周縁の稜が完全な刃潰れを起している(212も一部それが見られる)。208は端部付近が特に著しく、敲打されたものと思われる。また375は周縁すべてが剝離痕が潰れた面を形成している。これは弧状周縁形成後に使用により形成された機能面と思われる。これが210では一部完全な磨面となっており、また一部は小凹凸の見られる敲打面となっている。

この結果、c類石器は扁平礫を使用し、その長辺の一辺に直状磨面を形成、周縁に剝離を加えて弧状の形態を整えたものである。加工された弧状周縁部は使用により刃潰れ、あるいは磨耗したものが多く見られ、石器として機能を果しているものが多い。この機能については『磨る』という機能を考え得るが、稜が残り、刃潰れをおこしている類については『敲く』『(力により)切断する』という行為が考えられる。やはり弧状周縁の形成

は多くの場合一種の刃部加工であろうと思われた。

d 平面形状は a ~ c に似るものであり、加工の状態もそれらに準ずるものであるが、より扁平な素材を用い（扁平な素材を得るために素材を半截し）、幅の狭い機能部を有するタイプである（217、219 ~ 222）。直状側面は使用されているが、使用面に小凹凸も見られ、a ~ c 石器類程に顕著な磨面には発達していないものである。これについては使用の頻度によるものか、機能の相異（敲打・切断、あるいは単に潰す等の行為）によるものか、断言できないものが多かった。同様のことは 181、209 の一方側面、206 などの使用面にも言えることである。

本類の石器類は縦に半折した破損品が多く、この点もまた石器の持つ機能に因る所かと思われるが、この折損品の中に二次使用痕のある石器類が見られた（202、212）。折損面の一部を磨面として再生したものである。

第11類 石錘（第176図 223 ~ 232）

自然礫の両端を打ちかいて錘としたもの。礫の短軸を打ちかいたもの（224、226、228等）と長軸を打ちかいたものとの別がある。重量は約50gから約200gまでのばらつきが見られる。

第12類 （第177図 233 ~ 234）

溶岩塊を使用し、ツマミ部分を作り出した錘状の石器である。233は頭部のツマミ状の一部分の他に下部にも左右段違いに抉りが見られる。234は大型のもので、丸いツマミ状の部分と丸く扁平な部分とに作られている。ツマミの基部には磨耗痕が見られ、紐をかけたものと考えられる。用途は不明であるが、やはり紐をかけて錘として使用した可能性が考えられる。

第13類 凹み石（第178図）

図示した石器類の他約15点出土しているが、安山岩質の溶岩塊が最も多い。

凹みは表裏両面に作られているものが多く、また一面に数箇所連続して作られたものが多い。238は断面三角形の石の二面に凹みが作られている。235は平面三角形を呈した表裏両面に2箇所ずつ凹みが作られ、一方の側面には粗い擦痕が走る。図中上端部は剝離を受け、敲打された痕跡が見られるものである。凹みの状況は皿状の浅いもの（243）から円錐形の深いもの（236、241）まで様ではない。242は粘板岩を使用、図中下端を欠損、また裏面剝落している。欠損部分を含めて縦に7箇所連続して凹みが作られている。凹みは円錐形に近いものが多く、凹みの周囲には使用時のものと思われる粗い擦痕が走る。また一方の側面にも凹み状のキズが見受けられる。

第14類

加工法、形態は異なるが扁平で円盤状に作られた石器が6点出土した。

245は扁平な石の周縁（一部を残して）を打ちかいたものである。剝離の方向は表裏から行われている。246は表面に自然面を残し裏面と周縁を打ちかいたもの。247はやや厚めの石の一方の周

縁を剝離し、他方の周縁と表裏面とを擦って調整しているものである。248は薄い石を使用し周縁を剝離しているが、縁辺は稜となっているものである。用途はいずれも不明である。

第15類

柱状の石製品である。表面に擦痕が走り、面を作り出した形跡が見られる。石棒の欠損品とも考えられるが、不明である。

第16・17類 砥石、石皿（第179図250～260）

第16類に砥石類を、17類に石皿類をまとめたが、両者の機能が混在するものが多く、本項では一括して記述する。砥石・石皿類は合計30点程出土しているが、各種のパターンを抽出して図示した。石材は安山岩溶岩塊を使用したものが多く、次いで砂岩、安山岩質の角礫岩など、軟質のものが多し。

179図250は安山岩溶岩塊を使用。図中上部が半円形に窪んでいる。使用により磨耗したものであると思われる。砥石か？251、258、259は周縁を持たない石皿類で一部を砥石として使用された石器類である。251は上面が浅い皿状に窪み、下面・側面にやはり小さな窪みが見られる。また一方の側面には斜方向の粗い擦痕（沈線状）が走る。使用による擦痕と思われる。258は砂岩使用の極めて軟質のものであり、小片に破損していた。上面には2本の沈線が走る。沈線は使用によるもので断面は半円状をとる。上、下面とも磨耗し、欠損部では約1cmの厚さとなっている。259は上下両面が使用により緩く凹んでいるもので、器面には多数の使用擦痕が見られる。また上面の側面近くと裏面には鋭利に入りこんだ沈線が走る。この断面はほぼ三角形状となる。鋭利な道具の研ぎに使用されたものであろう。

252～255は周縁を持つ石皿類である。このうち252は周縁を作り出す整形痕が明瞭に観察される。また下面には不明瞭ながら擦痕が観察される。よく使い込まれており、折損部付近では厚さ1cm弱とすり減っている。253、254は共に平面長楕円形を呈する石皿片である。下面には使用痕は見られない。255は直径35cmの大型石皿である。上面は浅く円形皿状に窪み、周縁、凹み部を作り出す整形痕が観察される。下面には多数の粗い使用擦痕と沈線状の凹みとが見られる。上面を石皿に、下面を砥石として併用したものであろう。

256は長径43cmと大型のもので上・下面ともに粗い使用擦痕と沈線状の窪みとが見られる。また上面（図左）は中央部付近がほぼ平坦な使用磨面となっており、石皿に準じて使用された可能性が考えられる。257は擦痕などの使用痕は不明瞭であるが、上面の平坦面は幾分凹んでおり、一種の石皿であろうと考えられる。一方の端部はツマミ状になっているが個意に作り出しが行われたものか不明瞭である。

第18類 石剣・石刀・石棒（第184図260～267）

欠損品が多く全容は不明瞭であるが、細長い刀身を持ち、側縁に刃部を意図した加工が行われ

た石器類と同様の形状でありながら刃部加工の意図が見られない石器類がある。材質は粘板岩、千枚岩が多く使用されている。

260は基部欠損、裏面の一部が剥落したものである。表裏面ともに整形時の擦痕が見られ、側縁は剥離の後擦って形態を整えたものか、斜方向の擦痕が走る。また側縁には歯こぼれ状の微小剥離が観察される。刃部に幾分反りがあることから石刀にあたと考えた。261は側縁がほぼ直状のもので、基部、先端部は欠損している。調整擦痕は見られず、剥離によって形態を整えたものである。刃部加工は両側縁に集中し、刃潰れ状の使用痕跡が見られる。262～264は類似した石器類の破片である。遺存する表面に細かな調整擦痕が見られるが、側縁には使用の痕跡は見られない。265、267はやはり同様の石器片である。剥落が著しく、ほとんど原形をとどめないが、265は表裏面ともに細かな調整擦痕が見られる。265、267共に側縁に小剥離が見られる。266は基部、先端部共に欠損品。全面に粗い調整擦痕が走り、側縁の一部に剥離痕があるが、二次的には凹み石、あるいは切断具として使用されたものであろう。

第19類（第185図268）

基部が楕円形を呈し細長い機能部の作り出しのある石器で、全体に薄く扁平なものである。形状は剥離により作り出されているが、側縁と先端部とは擦痕が見られる。先端部は片面がヘラ状に作り出されていて使用による磨耗が著しい。

5 石製品

A：三角形石製品（第186図269）

断面三角形を呈する石製品である。全体に細かな調整擦痕が走る。三角形の両側面には山形の沈線文が見られる。また底面にあたる部分には楕円形に近い窪みが作られ、窪みの一端から三角形の側面に向けて貫通孔が穿たれている。作りは精巧なもので、よく研磨されている。石冠の一種と思われるが用途は不明。底面の窪み部分に見られる調整擦痕が幾分磨耗している所から、この部分を石皿として使用した可能性（粉末あるいは液を貫通孔から流す？）と非実用品としての可能性とが考えられた。

B：刻線を有する石製品（第186図270、271）

270は軟質の石質凝灰岩を使用。欠損品で、全容は不明である。全面に調整痕と思われる粗い擦痕が見られ、表裏面に彫りの深い刻線が描かれている。擦って形状を整えている点、刻線が曲線を描いている点から実用的な砥石とは一応分離させたものである。271は砥石同様に安山岩溶岩塊を使用。不明瞭ながら一部に調整擦痕が見られ、表裏側面ともに形状が整えられた可能性がある。半折しているため詳細は不明だが、一面に山形の刻線、他面に平行する二本の刻線が見られる。

C：装飾品類（第187図272～282）

272 は柱穴状ビット埋土からの出土品。平面形は三角形を呈し、正面に人面を描いた石製品である。中央部に眉、鼻筋を表わす隆起線が走り、目・口は円形の凹みにより表現されている。またほおを表わす両側面の上部は幾分張り出しており、耳を意図したものかと思われる。三方の頂点には貫通孔が穿たれている。穿孔は正・背面より行われたものである。上側面には一本の刻線が描かれているが、髪を表わしたものか？

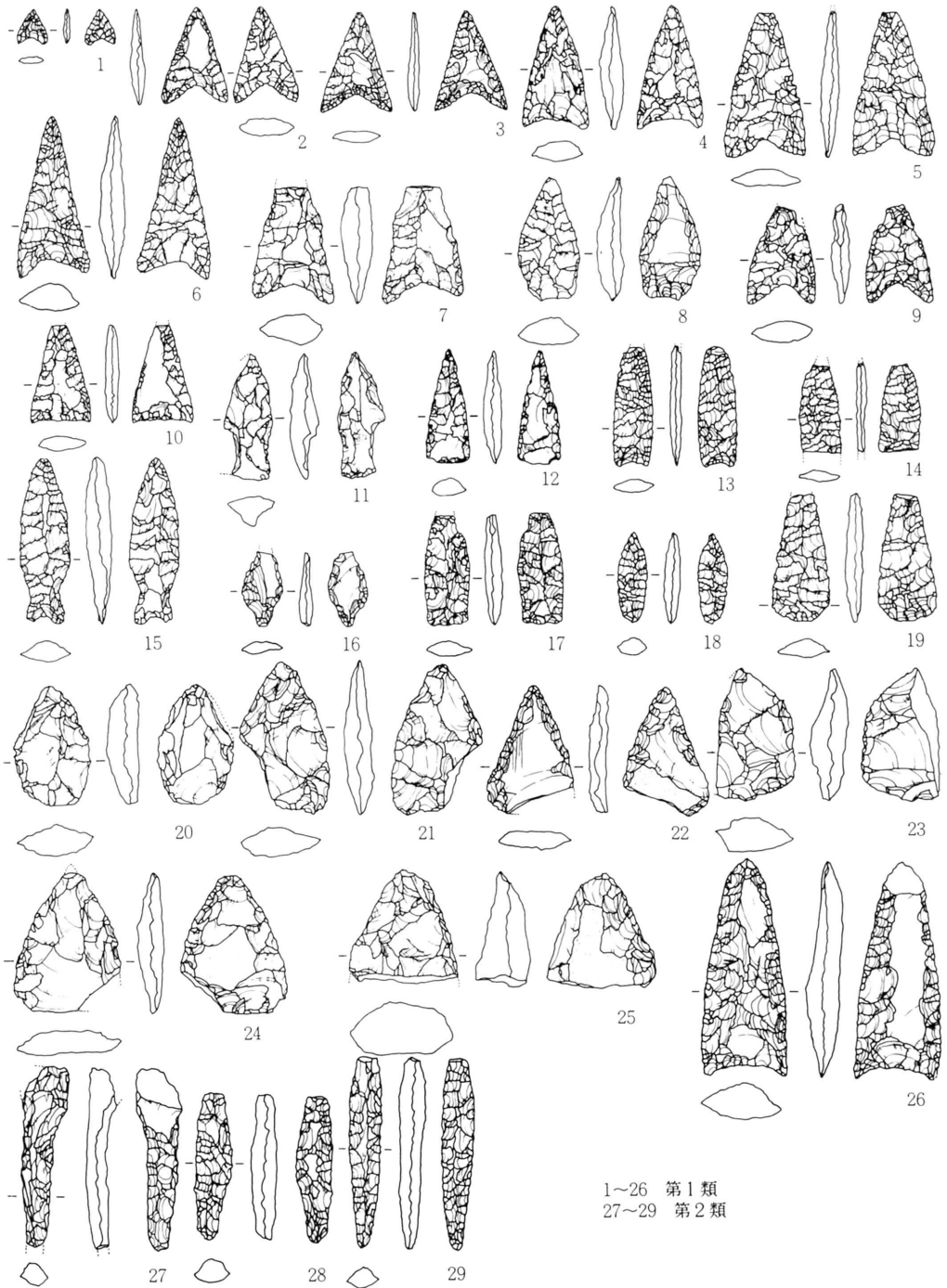
273 はGF 561 墓壙からの出土品で副葬品と考えられるものである。最大長4.8cm、小形の櫛節型を呈したいわゆる硬玉製大珠である。色調は緑色を呈するが白色部分が多く混入し、硬玉としては粗悪なものである。貫通孔の穿孔は表裏に径の大小がほとんど見られず、他の有孔石製品とは穿孔方法に相異が認められる。

274 は下半部欠損品であるが、両側面が弧状を成すもので、一端に貫通孔の見られる石製品である。穿孔は表裏面から行われたもの。表裏面とも中心に一本の刻線が見られる。装身具の一部か？

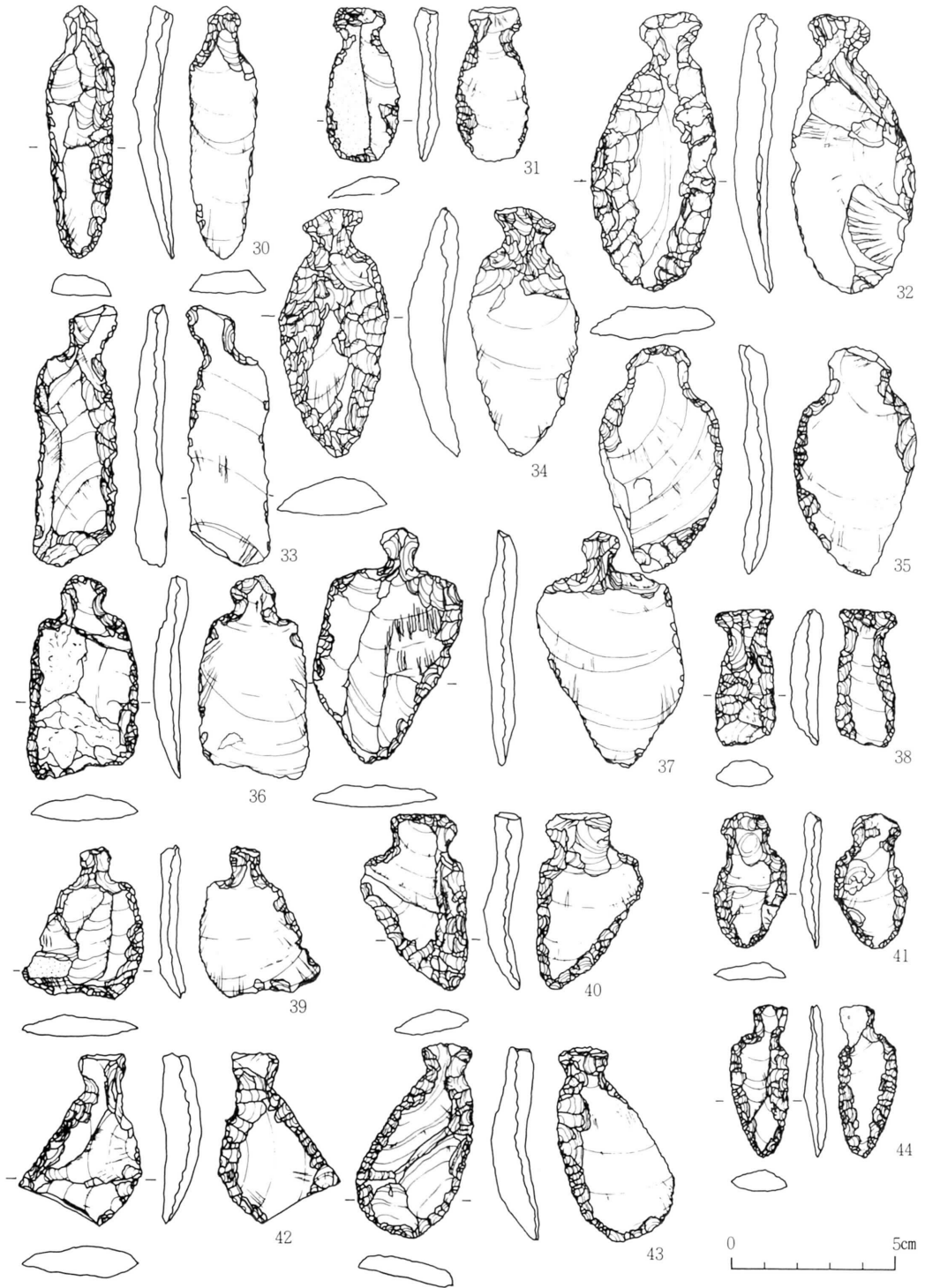
276、277 は玦状耳飾である。275は約 $\frac{1}{2}$ の欠損品。二点ともに調整の擦痕が見られる。

275、278 は有孔の円形石製品である。275は直径1.9cm、厚さ0.5cmの小形のもので中央の貫通孔は両面より穿孔されたもの。278は直径4.9cm、裏面は剝落している。貫通孔は一方方向からの穿孔か？周縁には一本の刻線が走る。279 は自然礫使用の石製品である。形態を整えた擦痕は見当らず、自然礫の一端に両面よりの貫通孔を穿ったものである。281 も同様に自然礫であるが、孔の部分は錐状の工具を回転させた穿孔ではなく、ノミ状工具で抉り開けた向きがある。一方の側面の抉入部も同様の痕跡が見られる。280、282 もやはり自然礫であるが、最大長14.2cm、13.6cmと大きめである。穿孔は281に似るが、人工の手に適うものか断定し難いものである。

— 西田遺跡 —



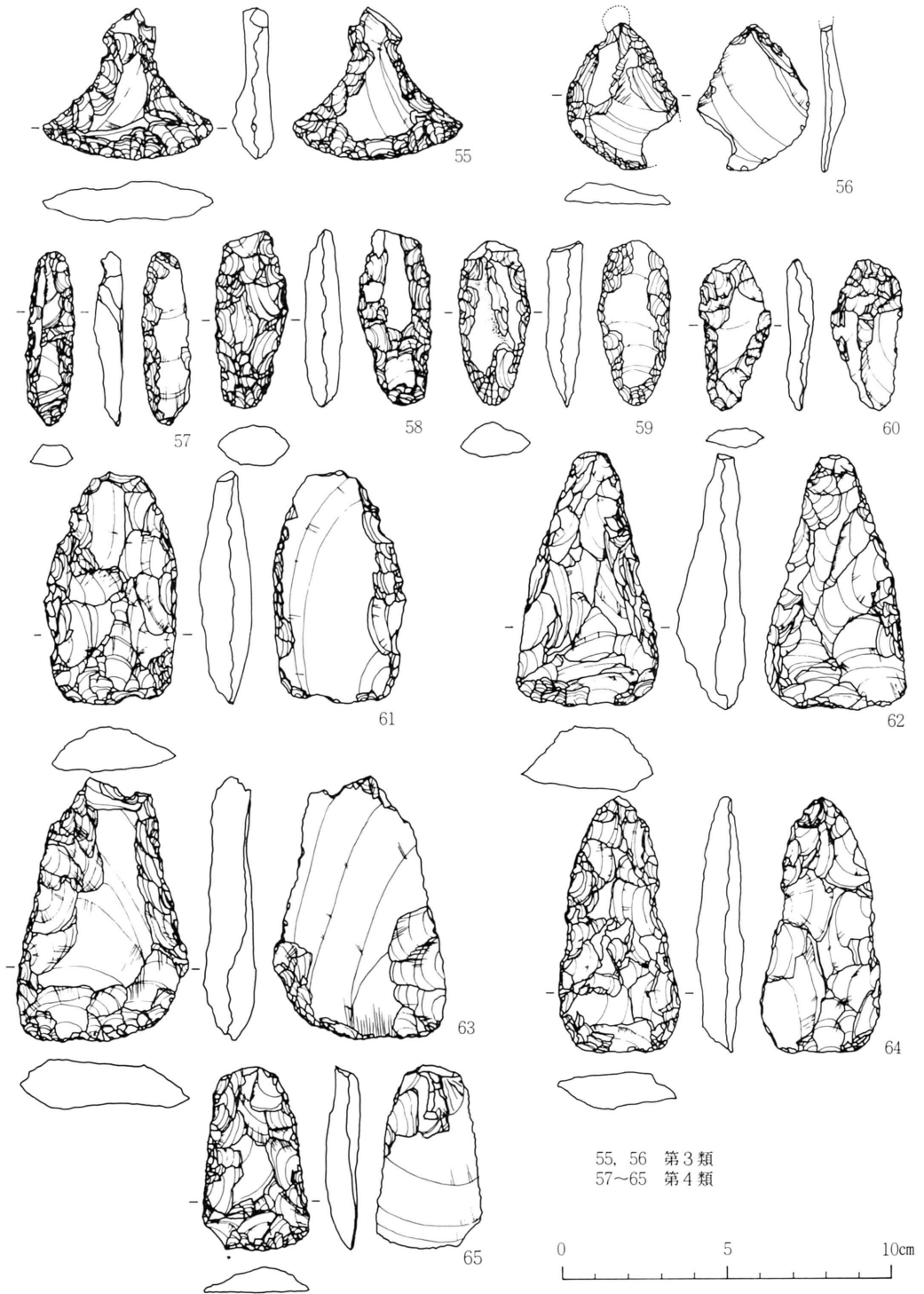
第152図 石器実測図



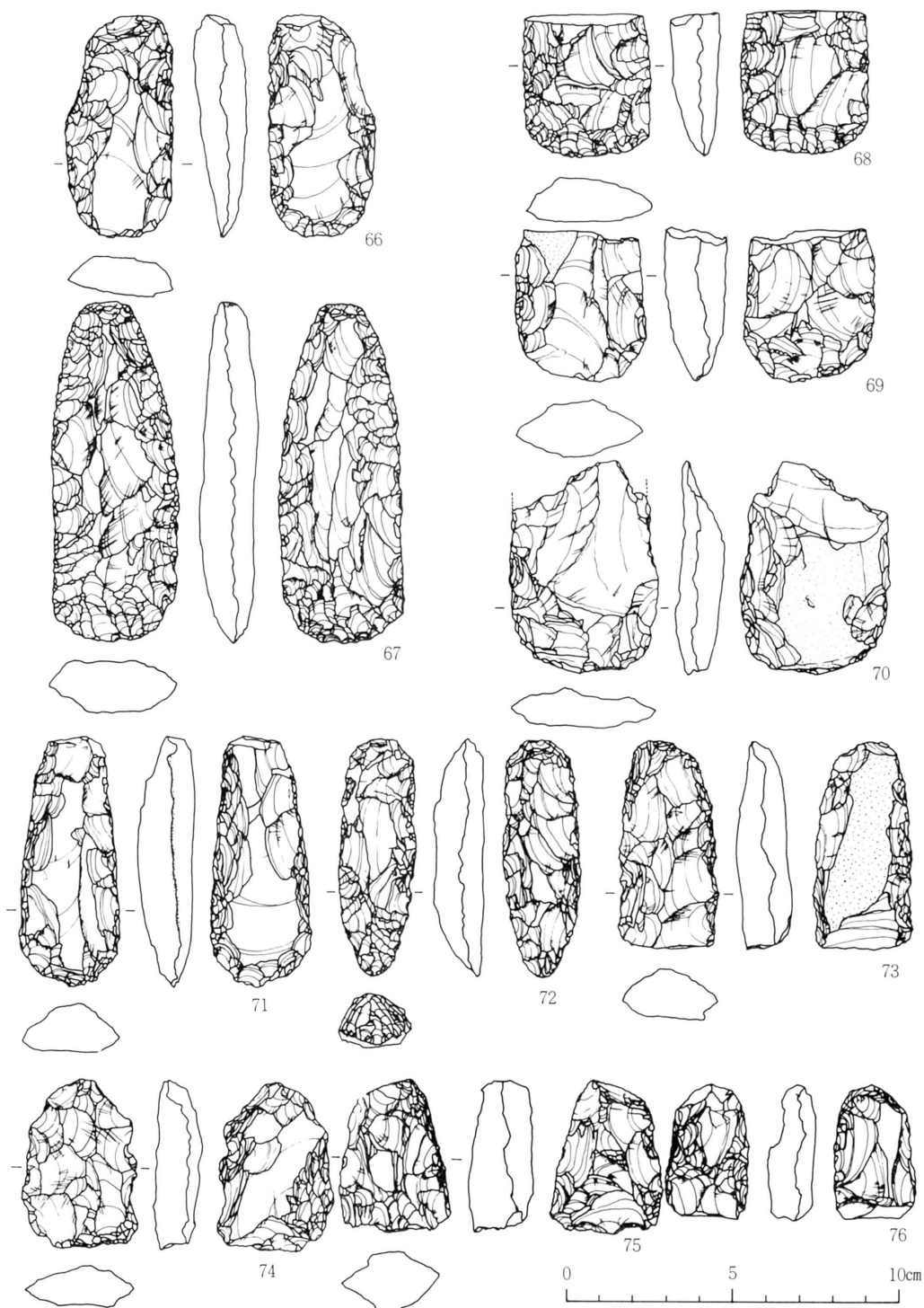
第153図 石器実測図 (第3類)



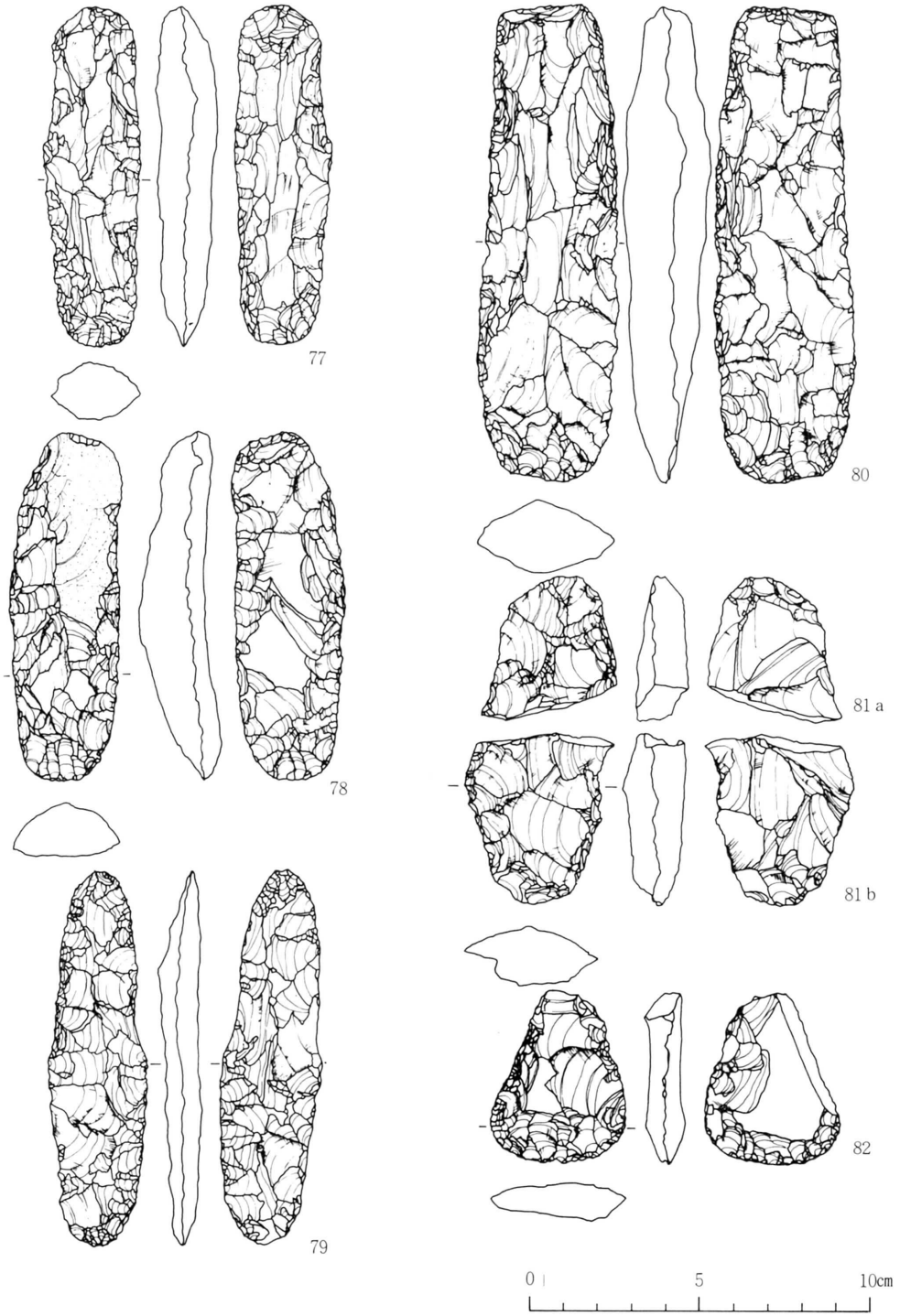
第154図 石器実測図 (第3類)



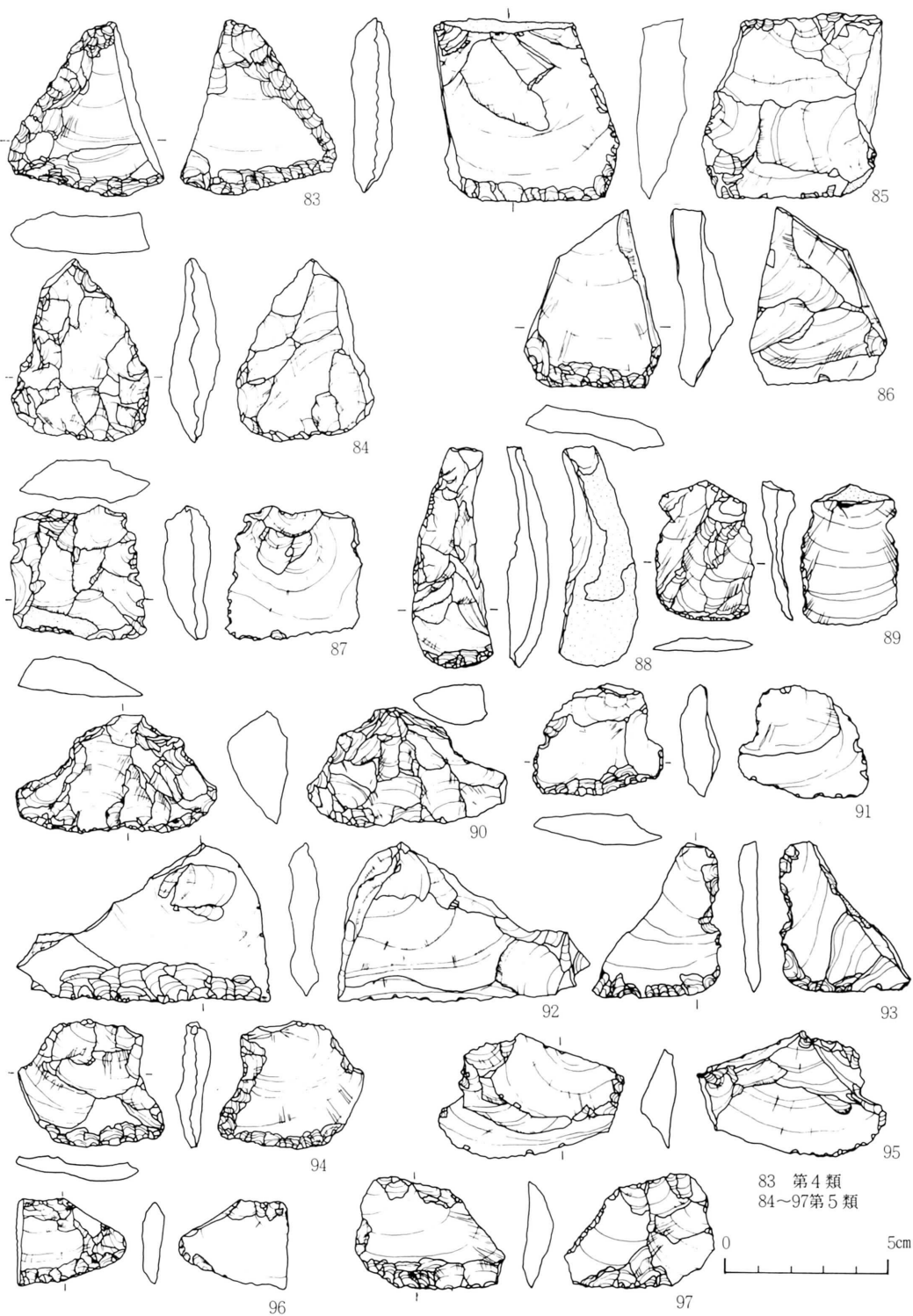
第155図 石器実測図



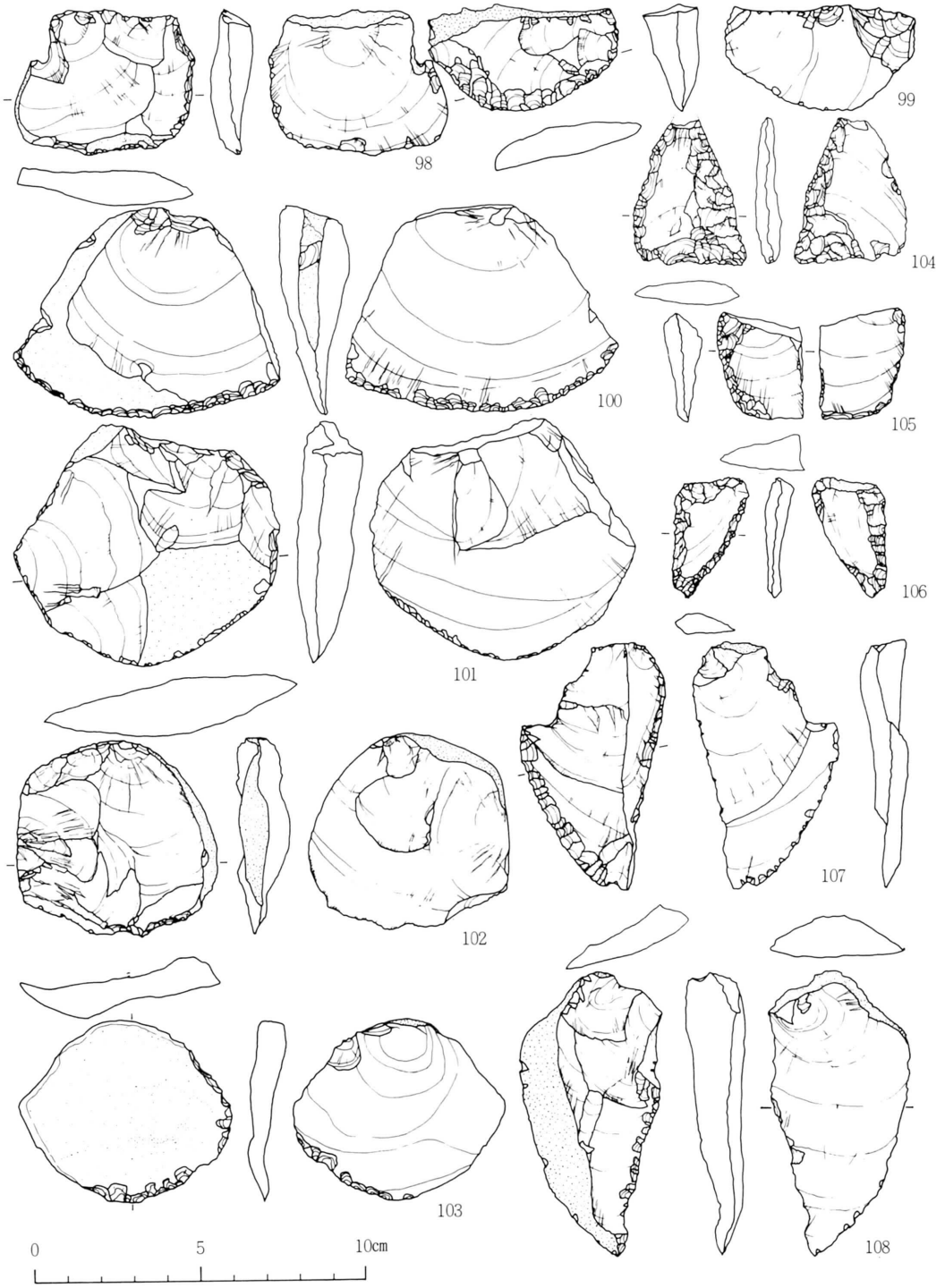
第156図 石器実測図 (第4類)



第157図 石器実測図 (第4類)

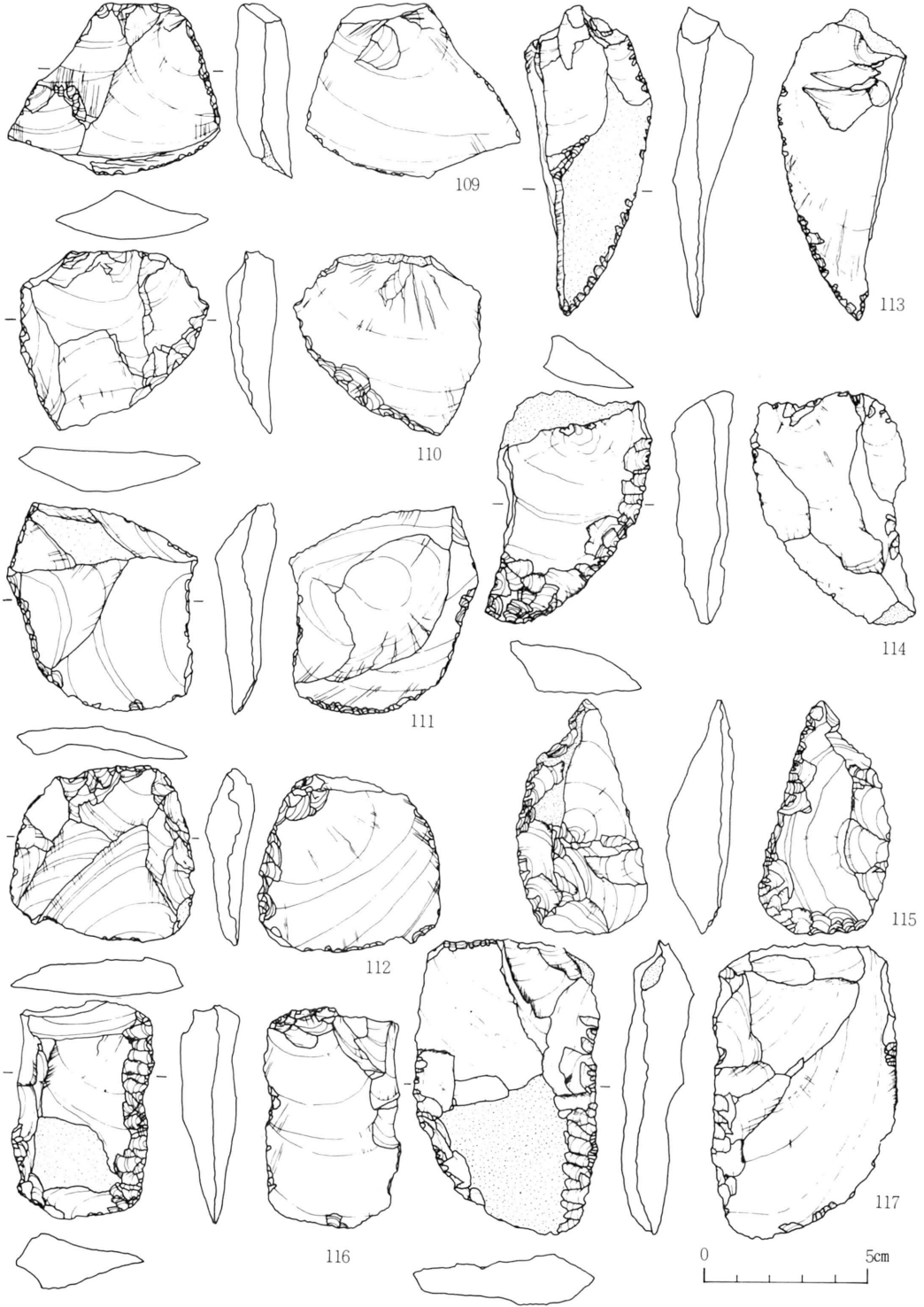


第158図 石器実測図

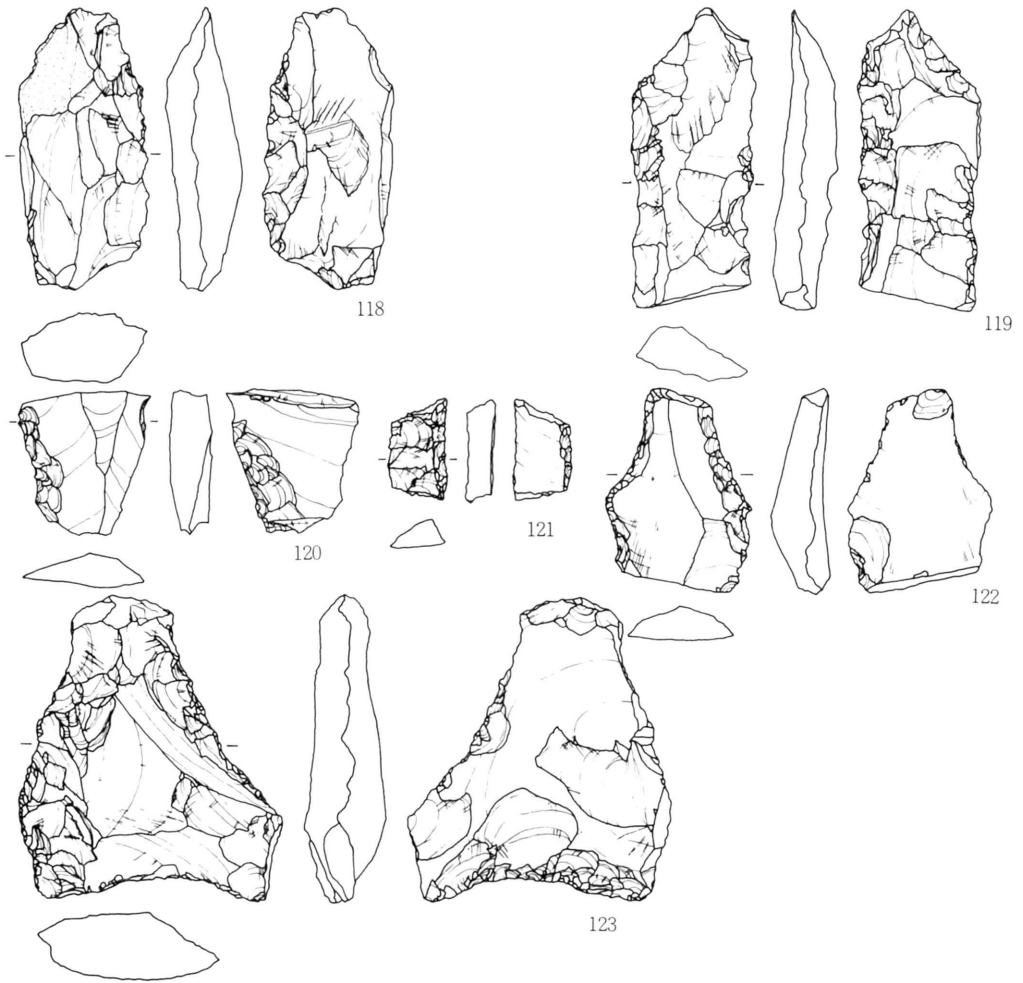


第159図 石器実測図 (第5類)

— 西田遺跡 —

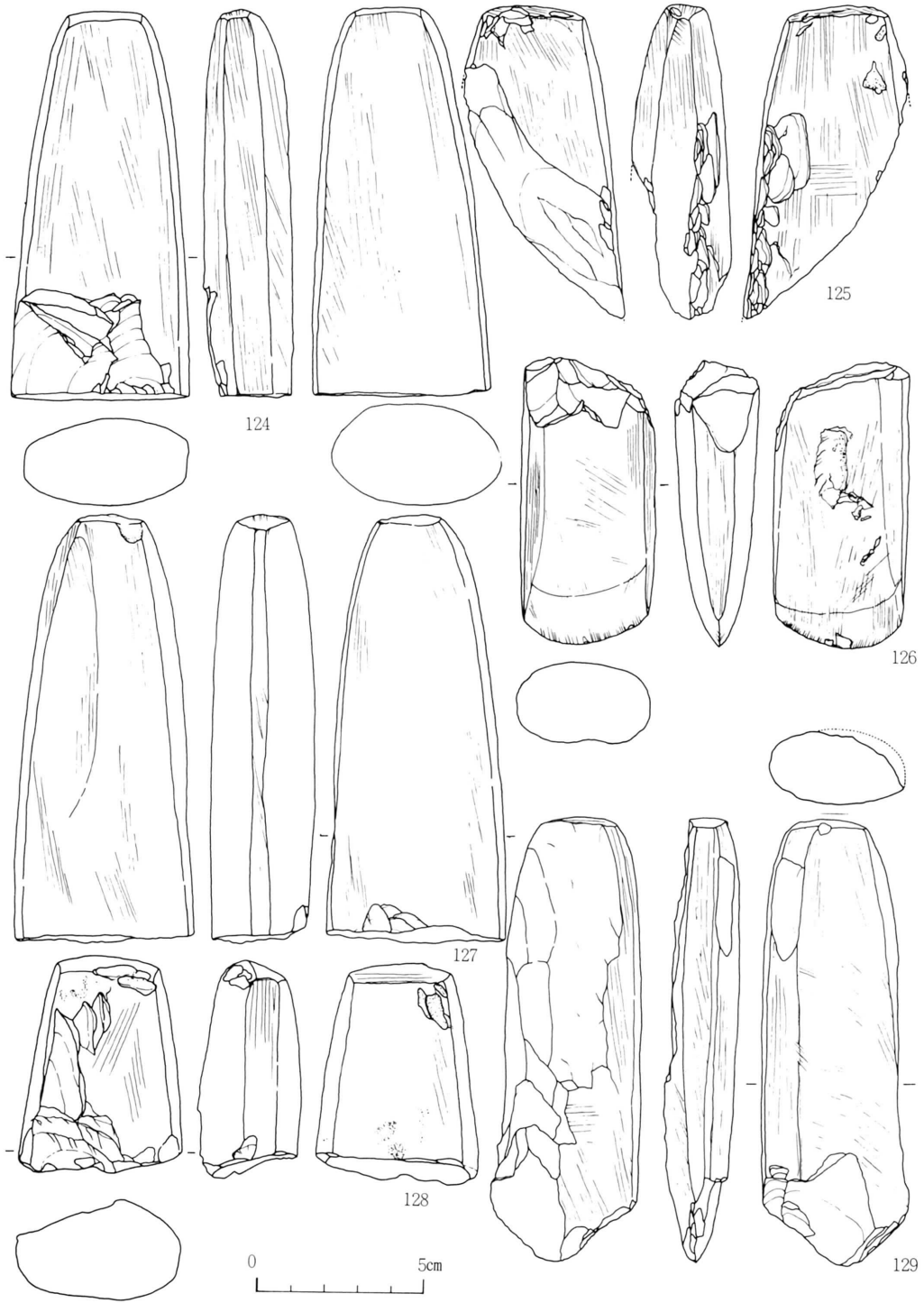


第160図 石器実測図 (第5類)

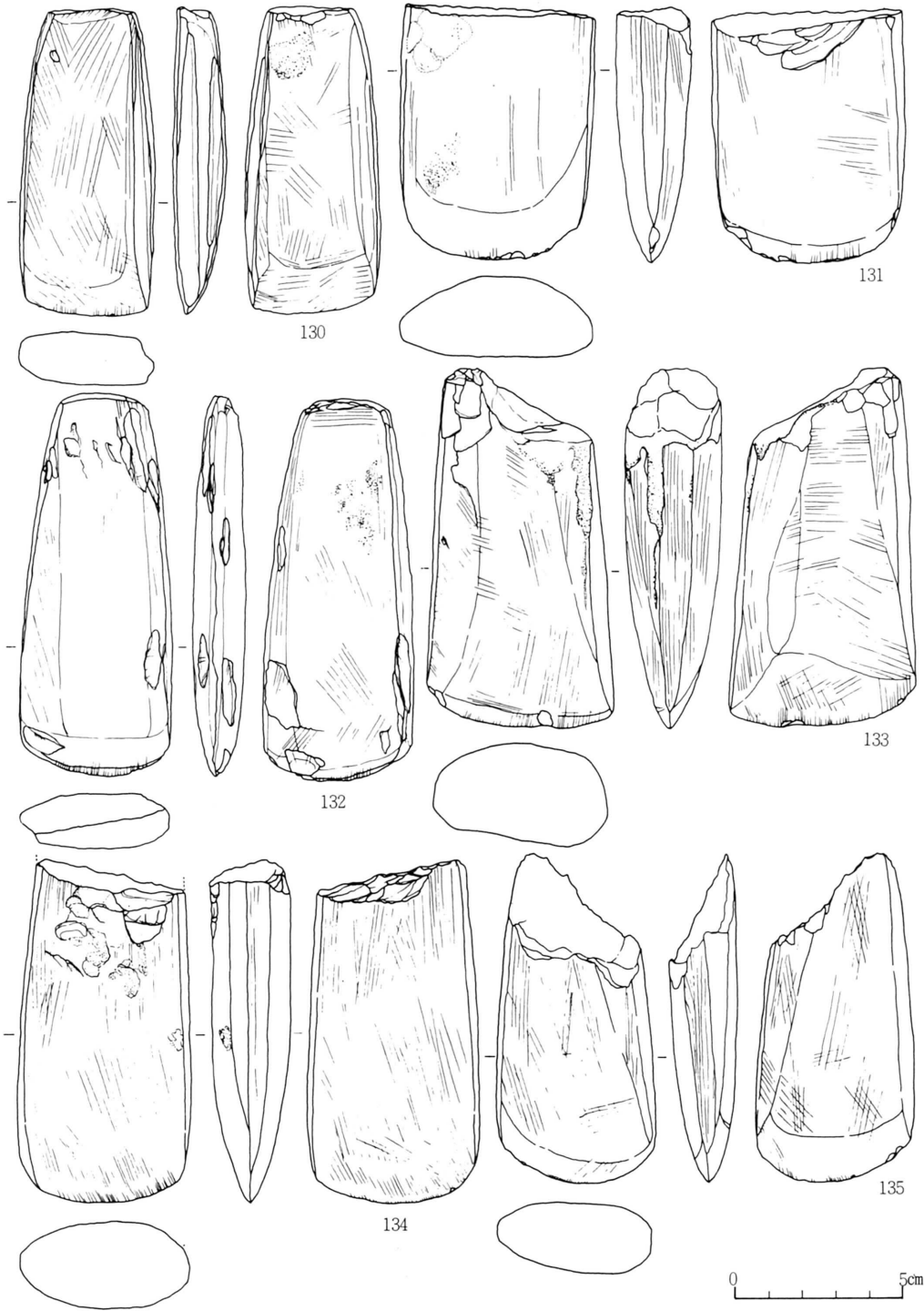


118~123 第5類

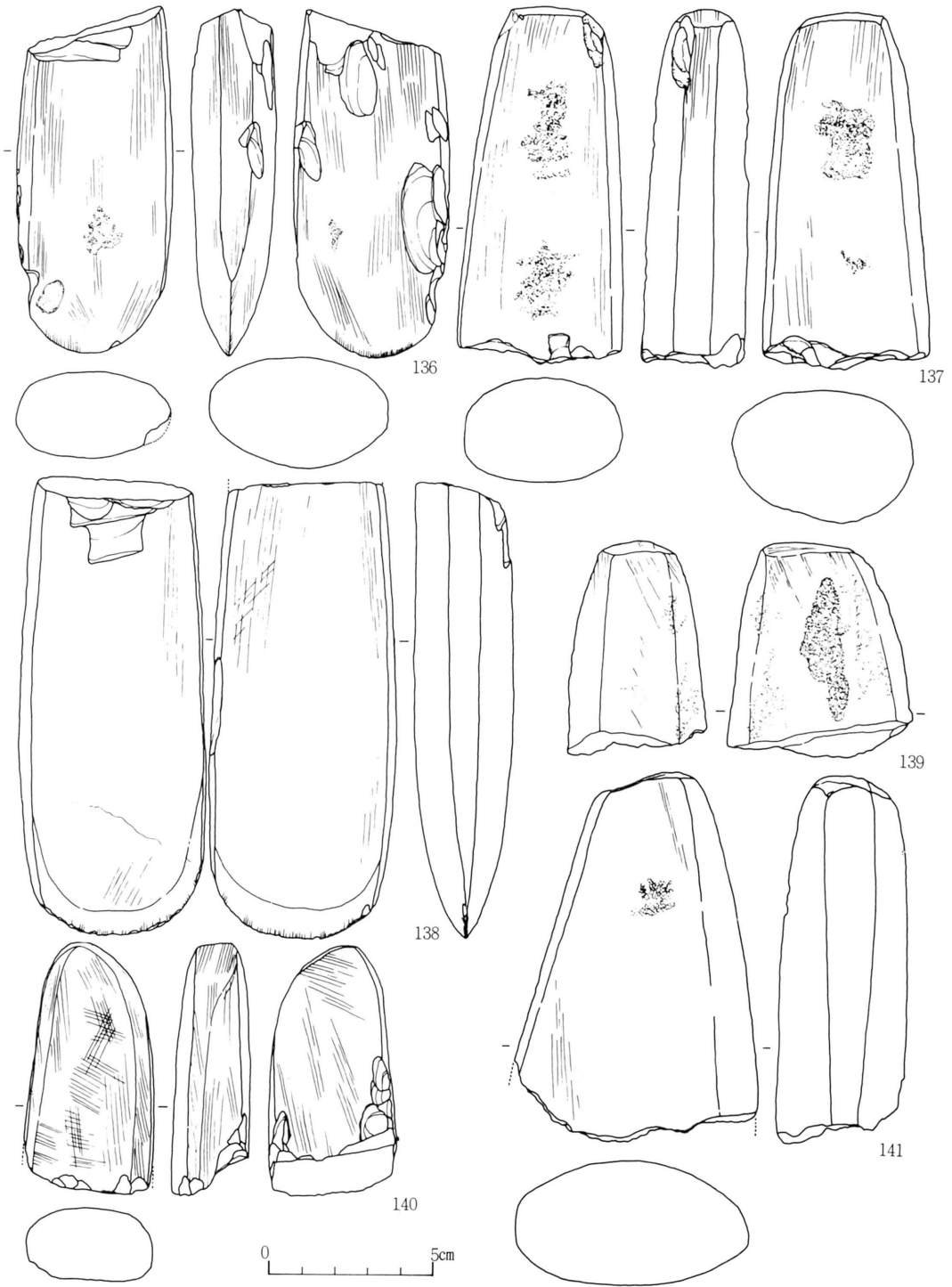
第161図 石器実測図



第162図 石器実測図 (第6類)



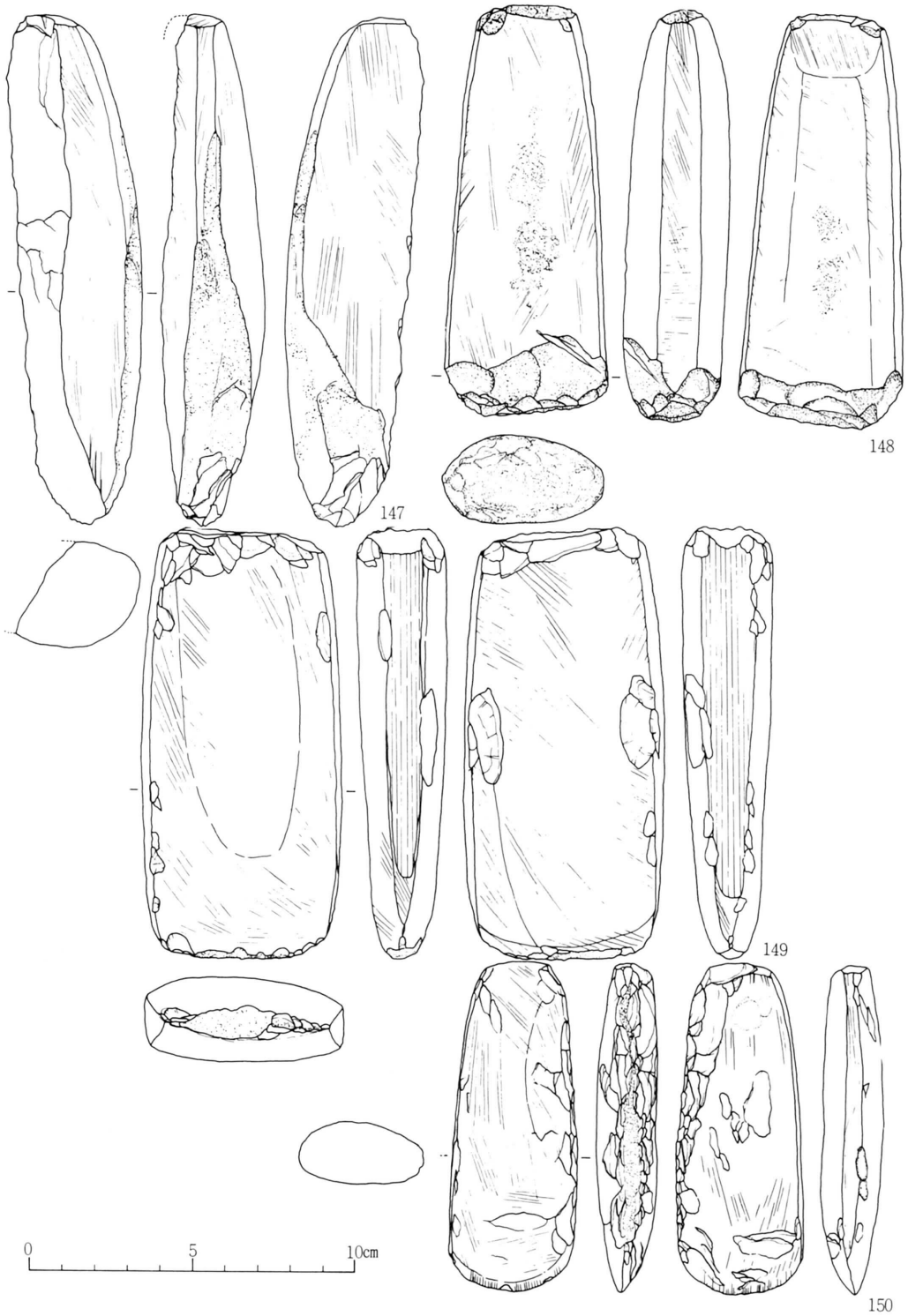
第163図 石器実測図 (第6類)



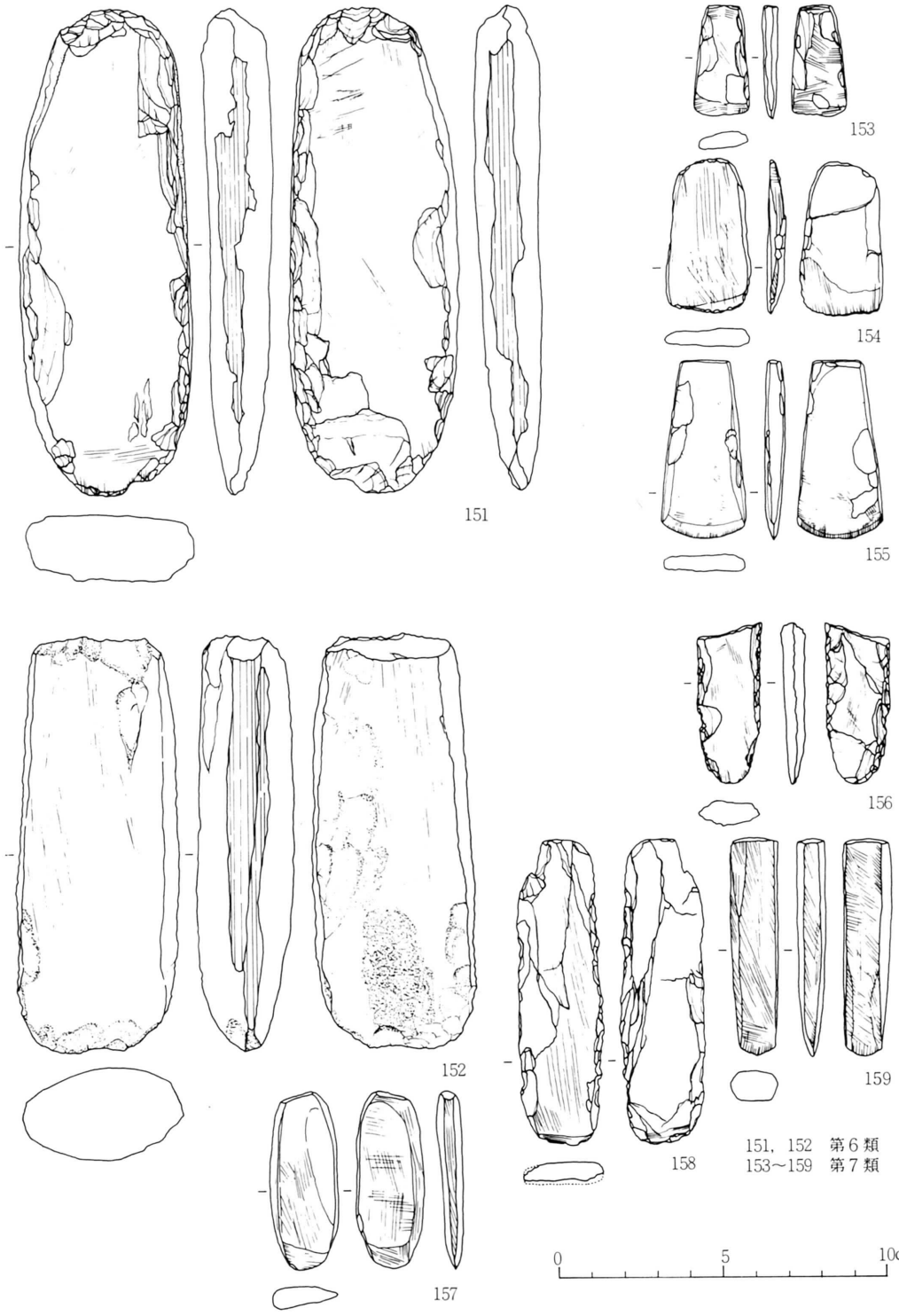
第164図 石器実測図 (第6類)



第165図 石器実測図 (第6類)

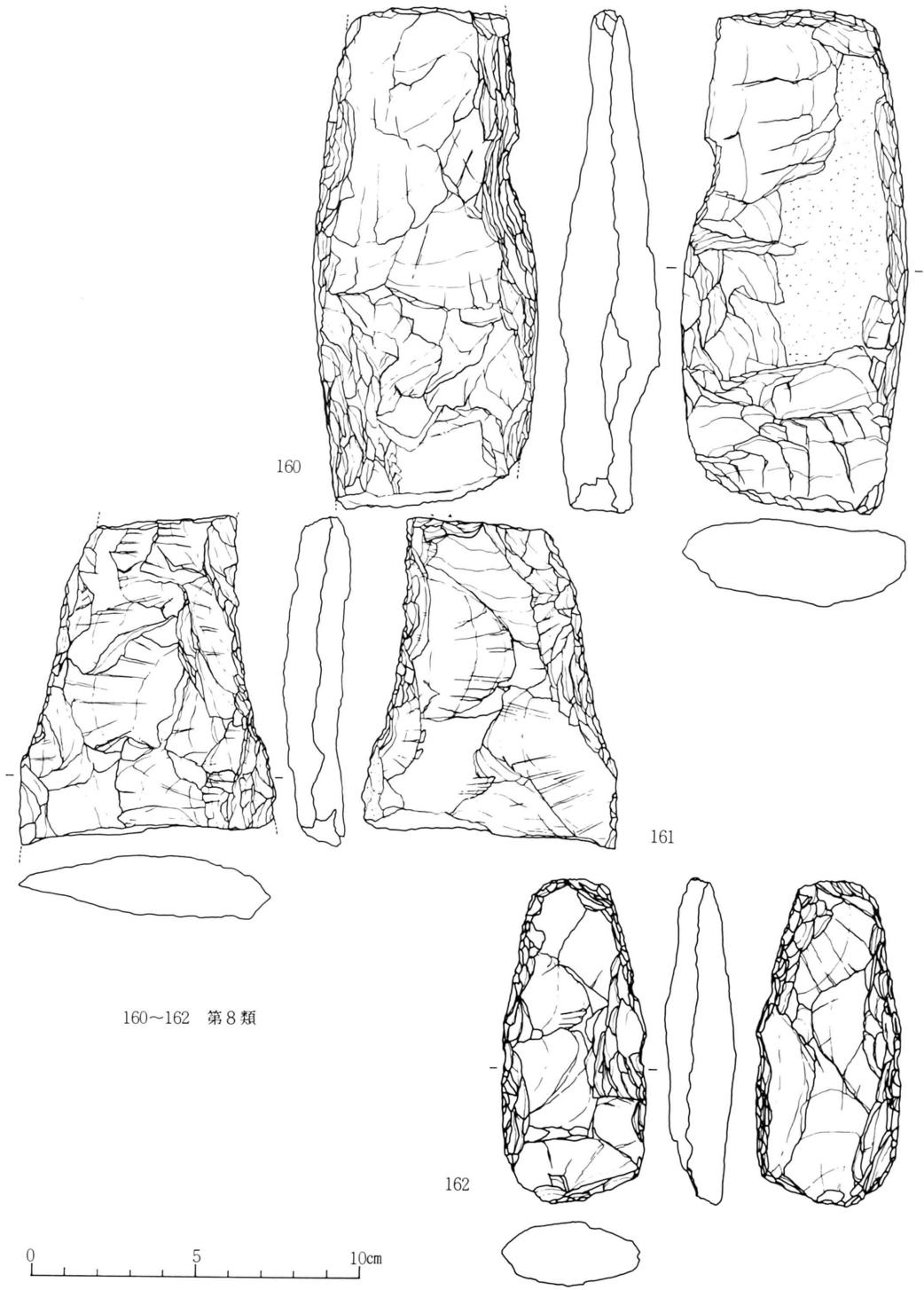


第166図 石器実測図 (第6類)

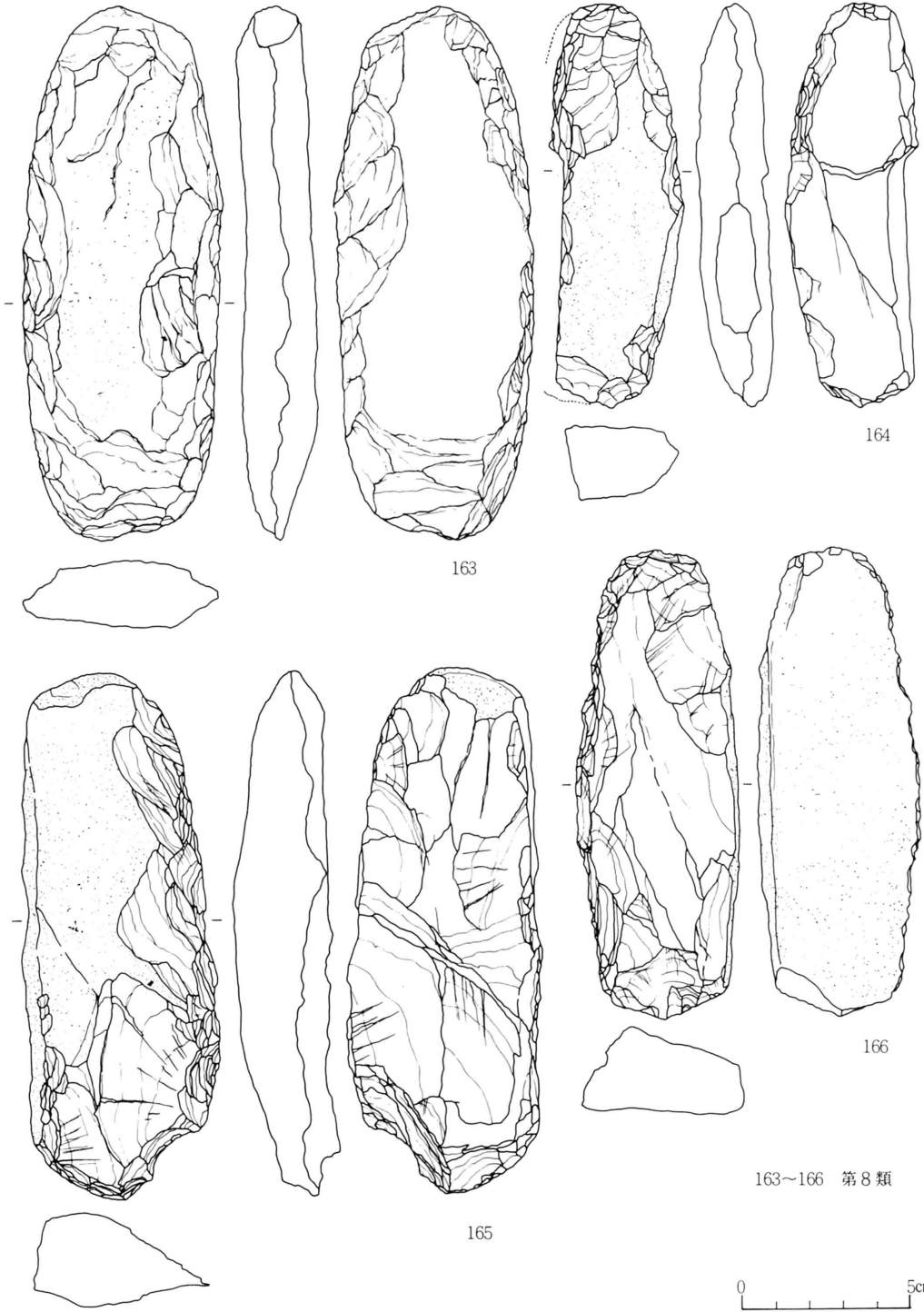


151, 152 第6類
153~159 第7類

第167図 石器実測図

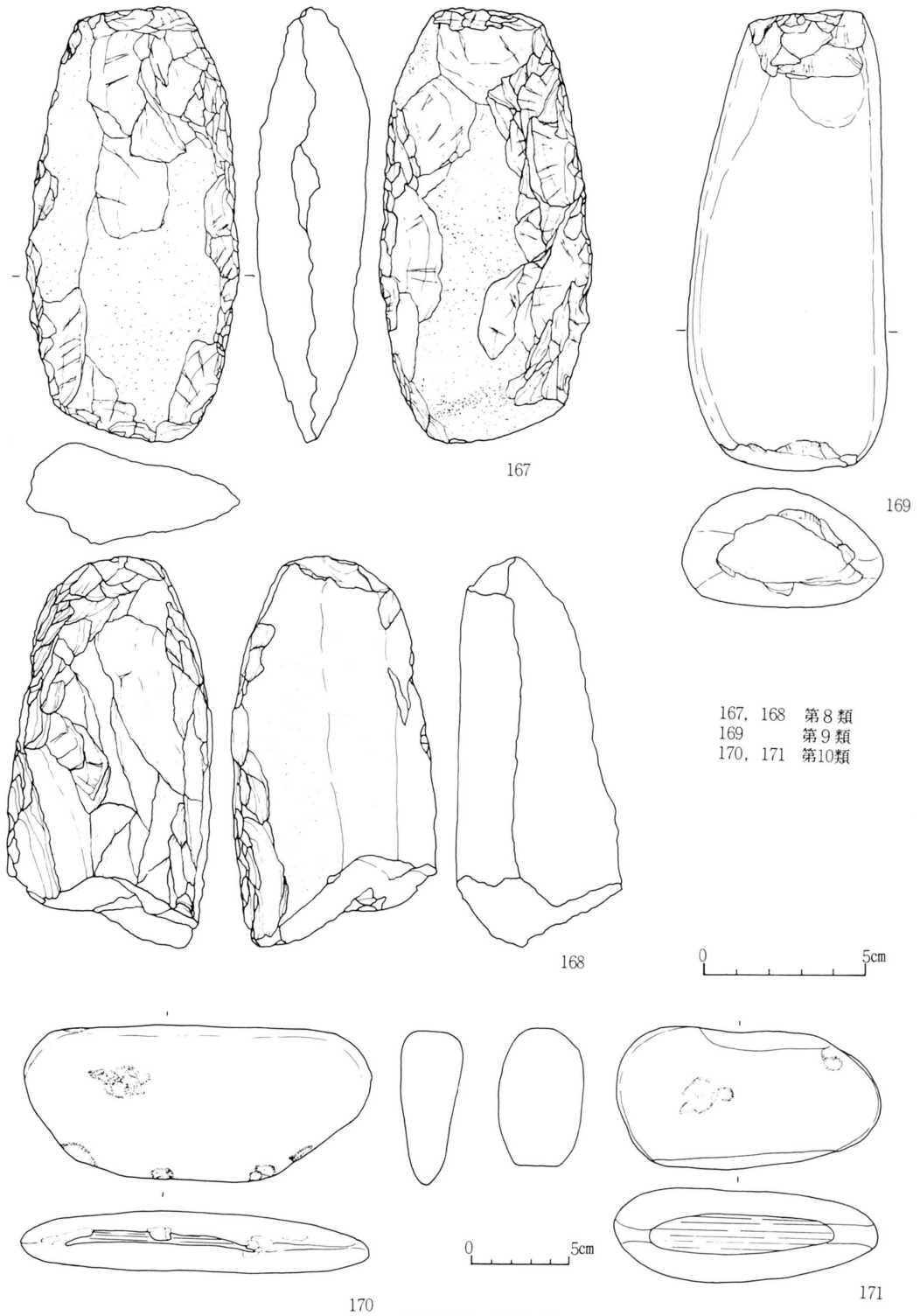


第168図 石器実測図

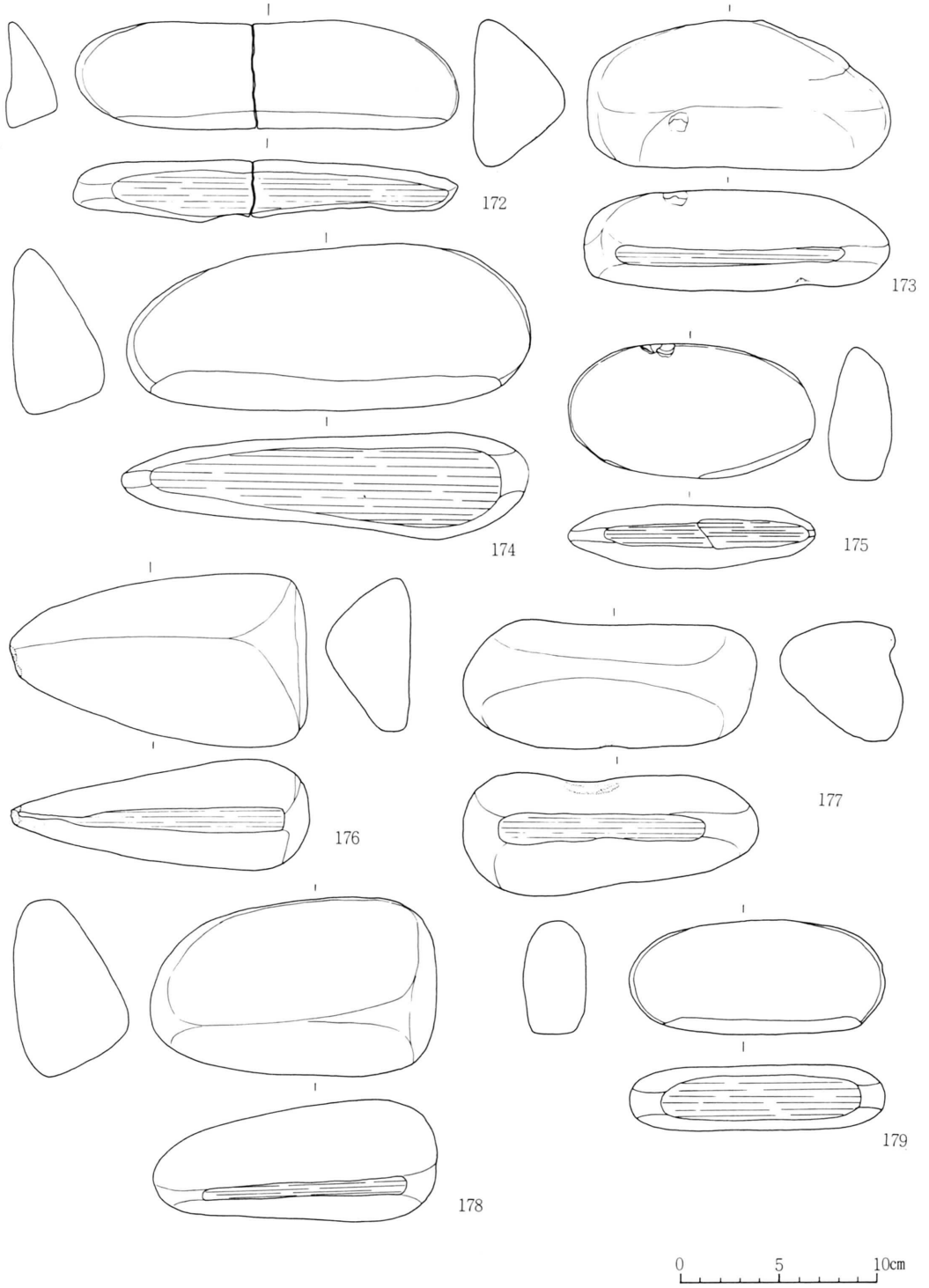


第169図 石器実測図

— 西田遺跡 —

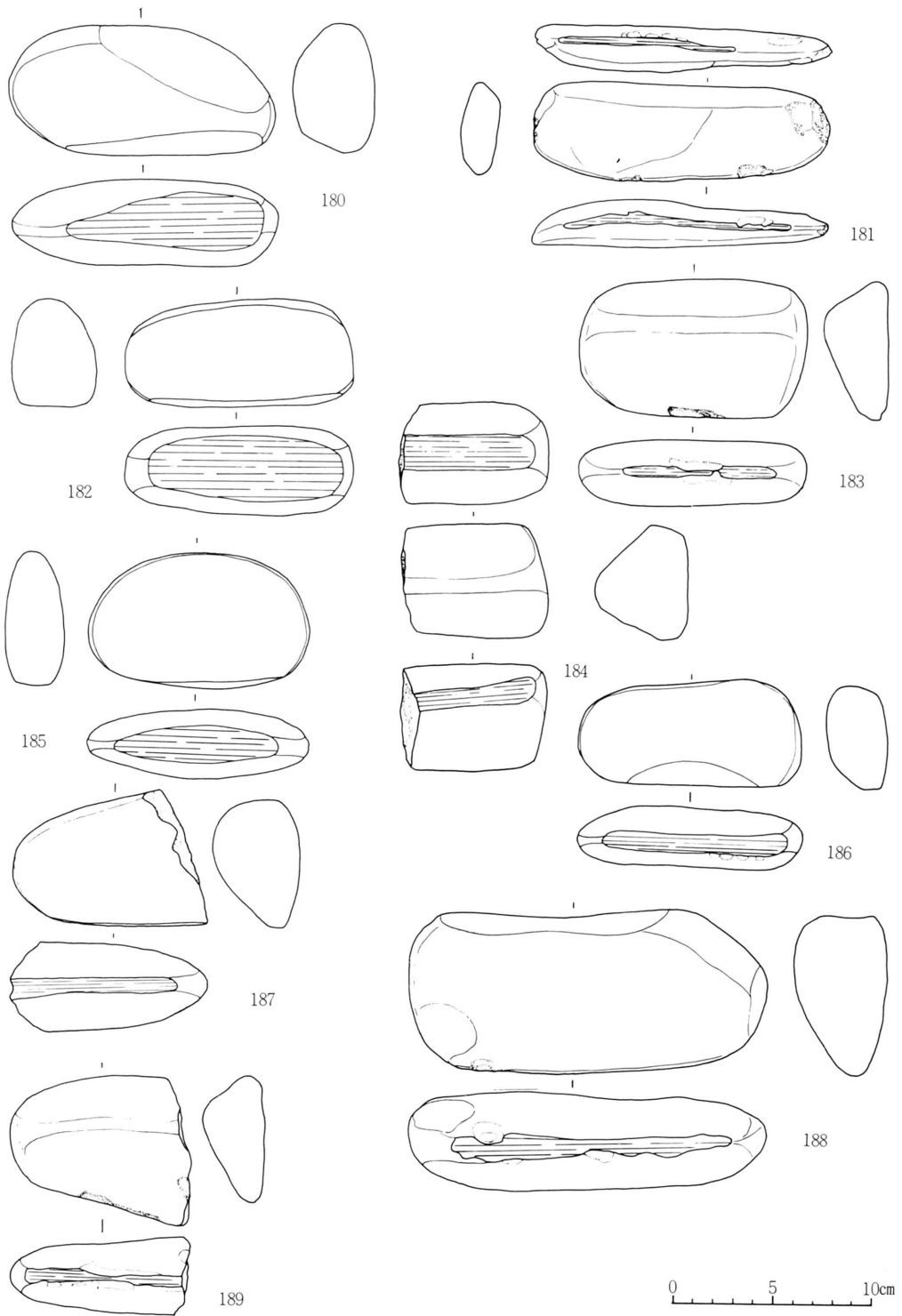


第170図 石器実測図

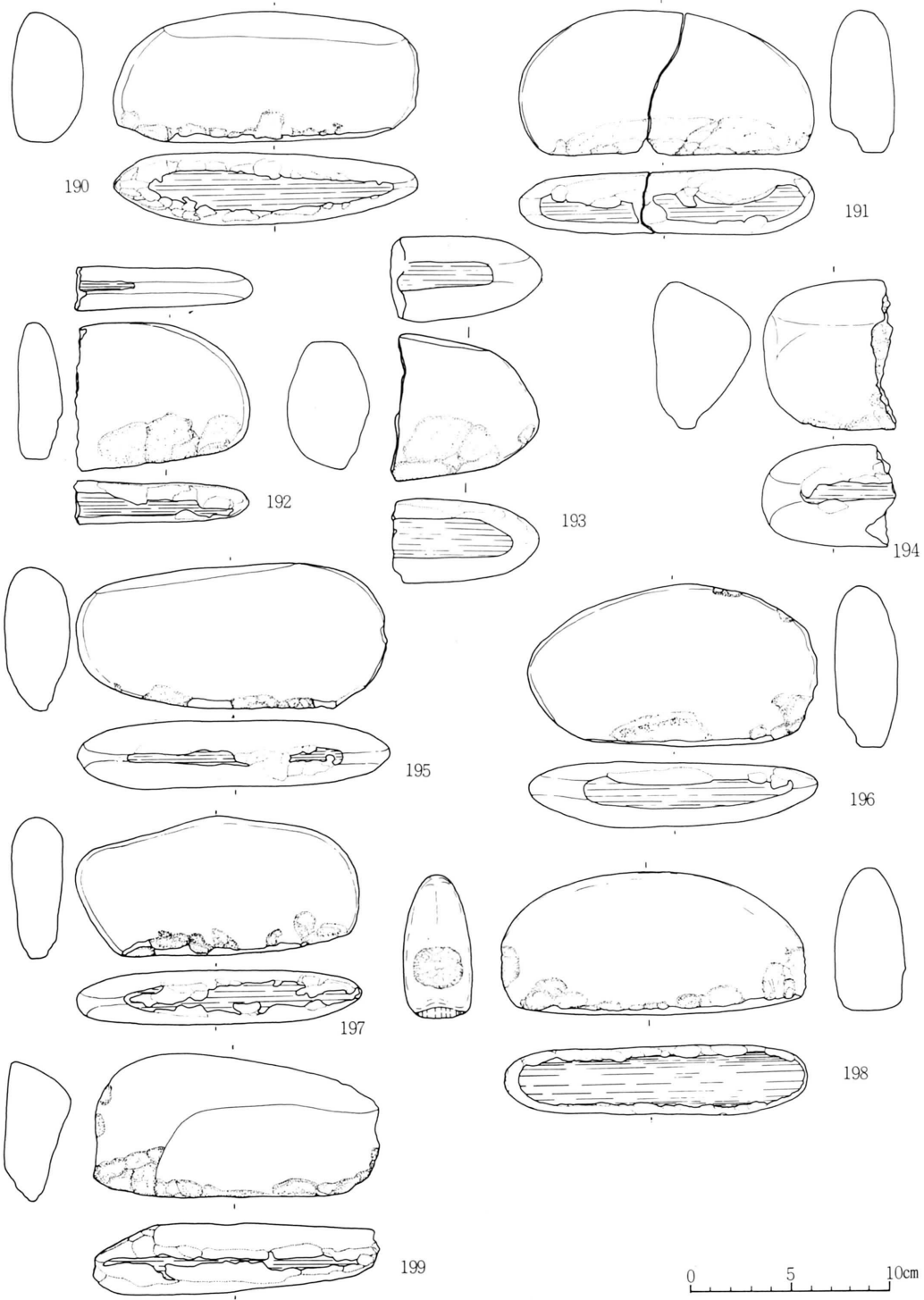


第171図 石器実測図 (10類)

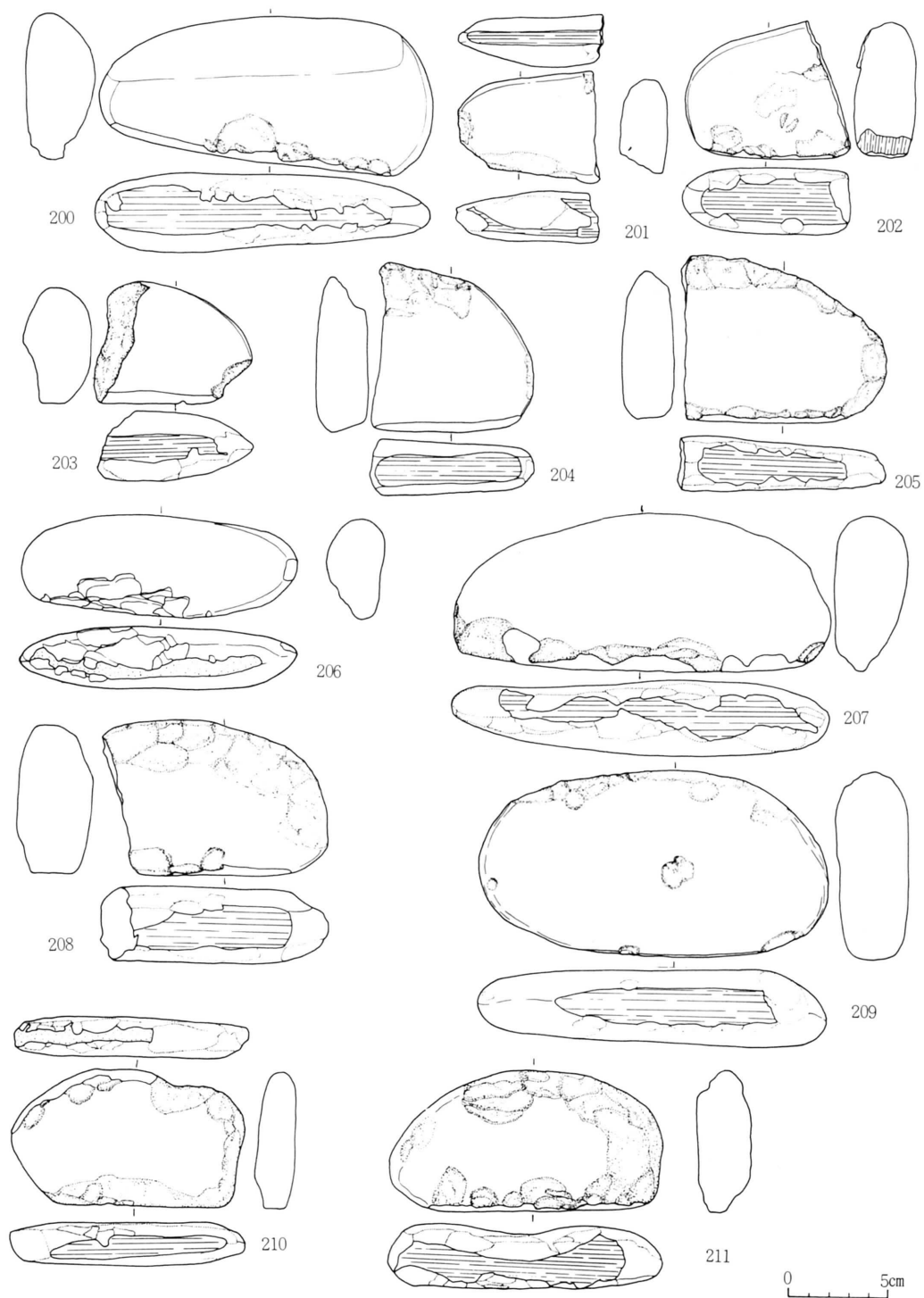
— 西田遺跡 —



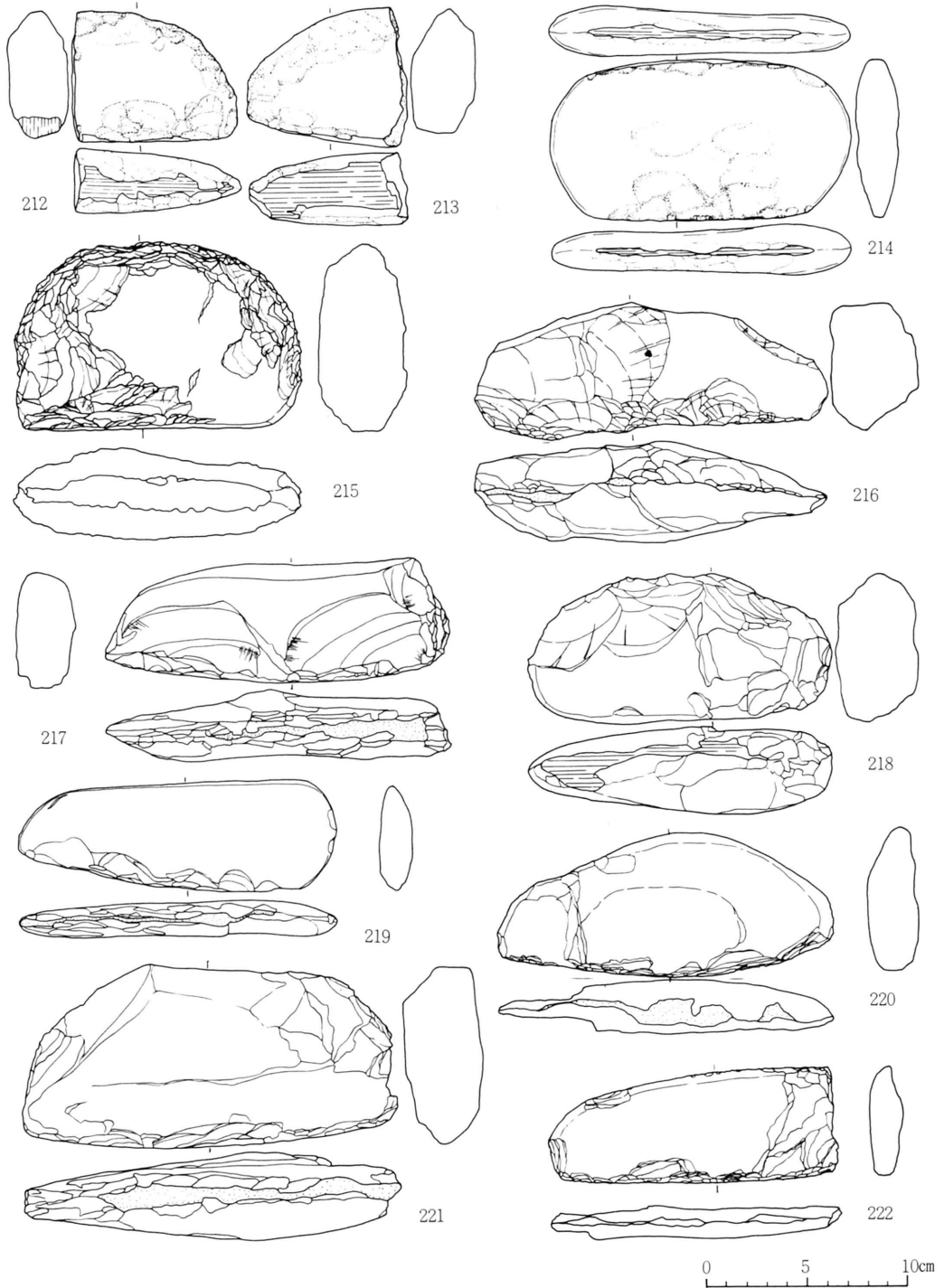
第172図 石器実測図 (第10類)



第173図 石器実測図 (第10類)



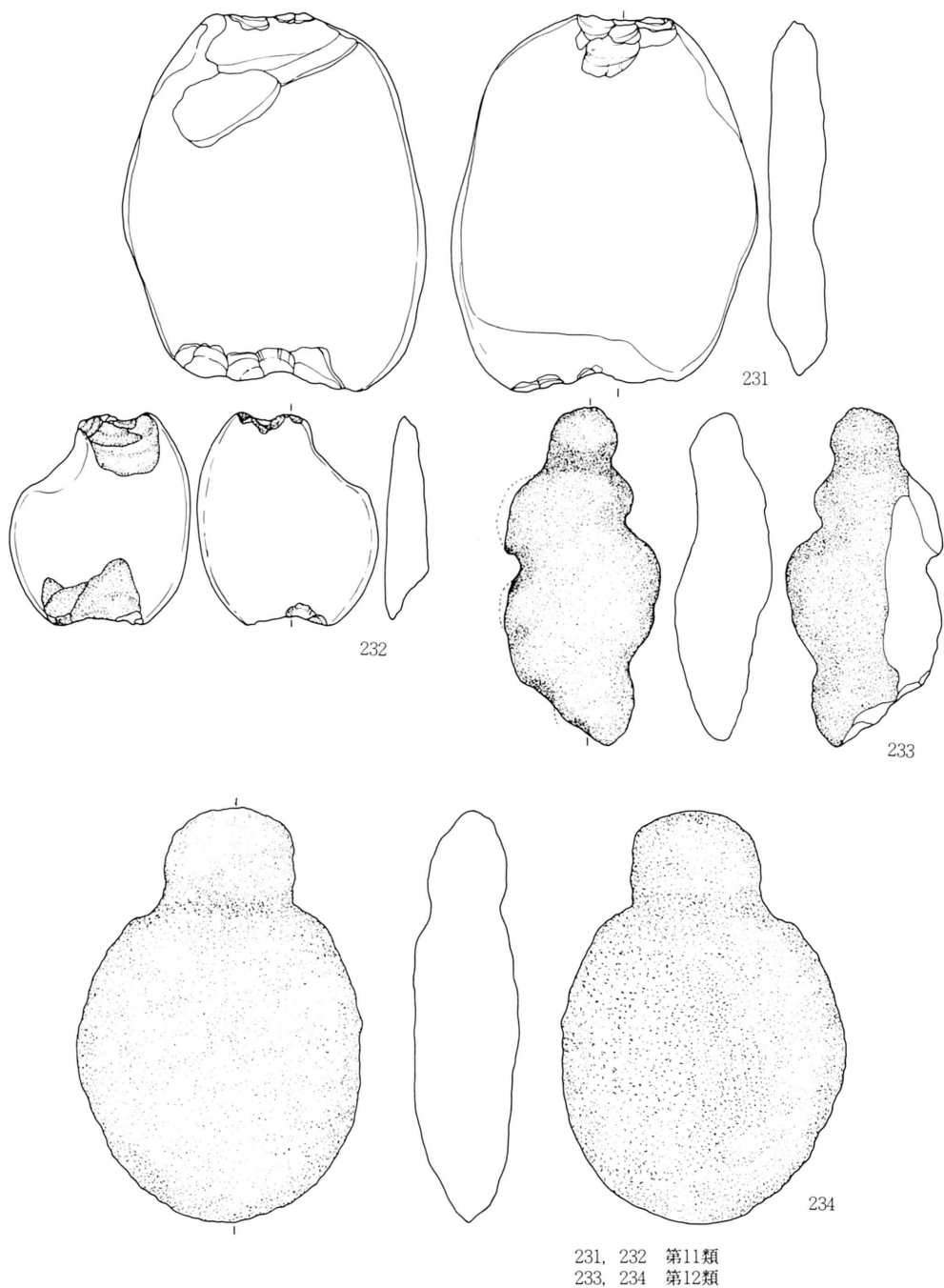
第174図 石器実測図 (第10類)



第175図 石器実測図 (第10類)

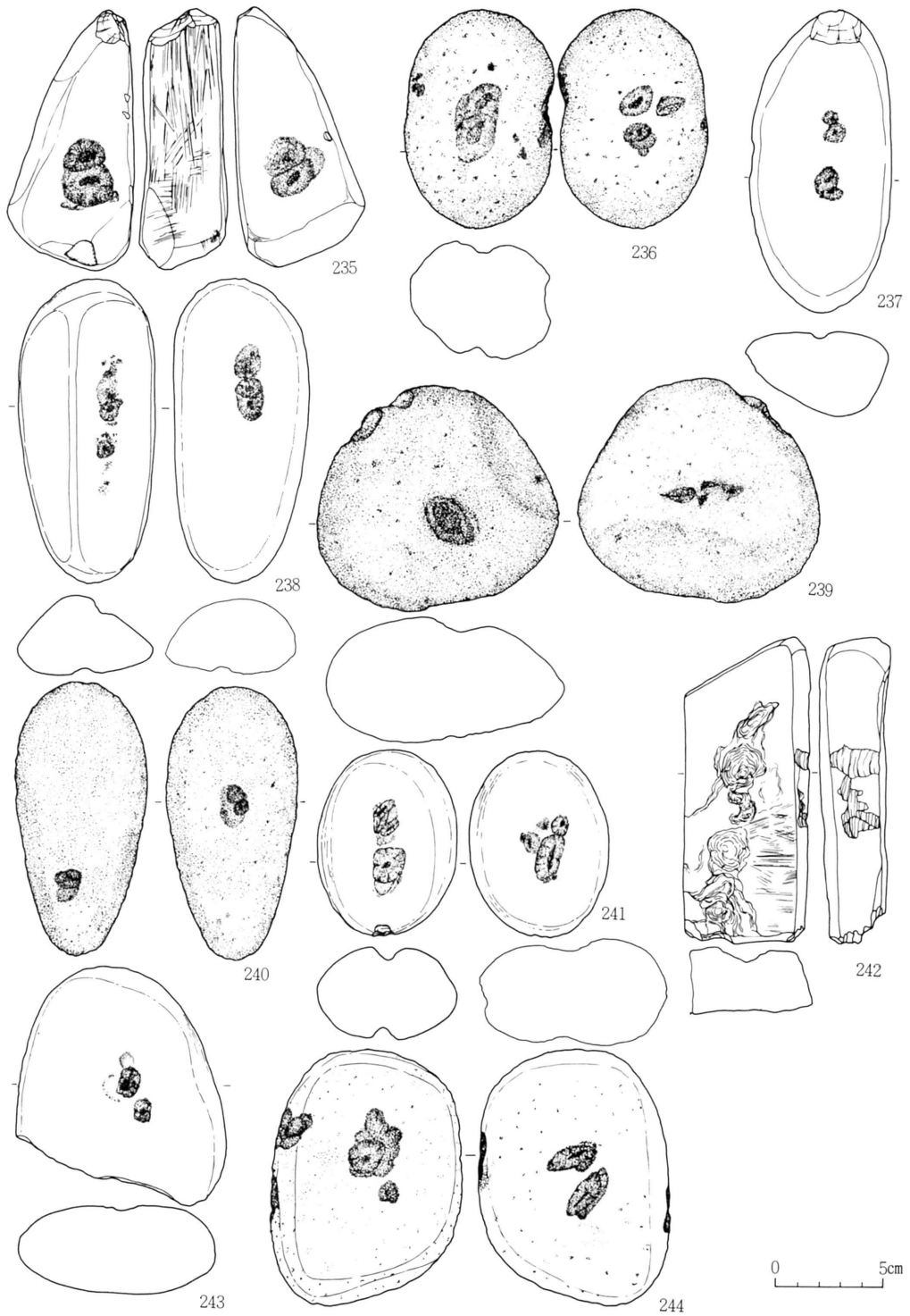


第176図 石器実測図 (第11類)

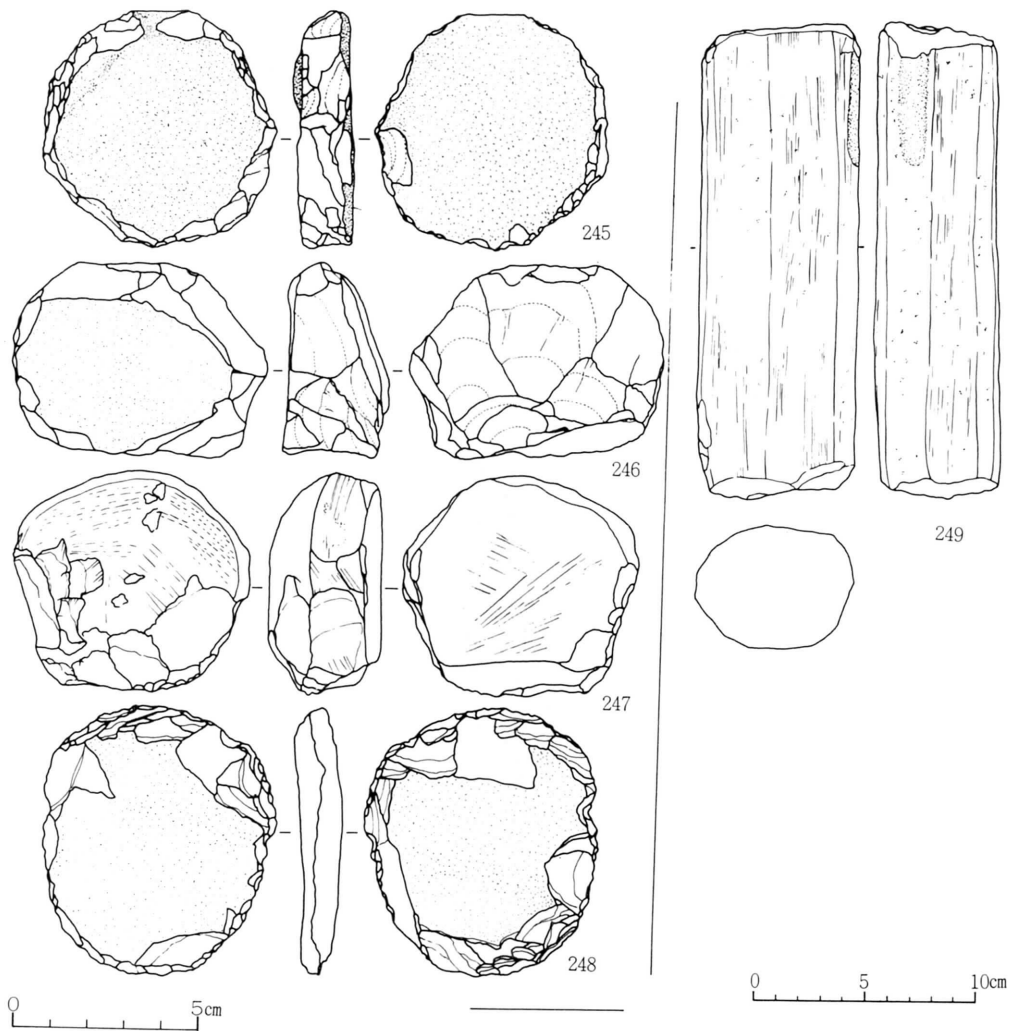


第177図 石器実測図

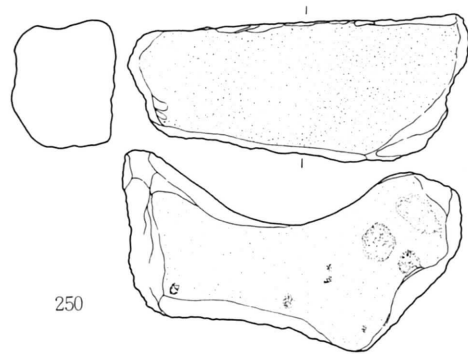
— 西田遺跡 —



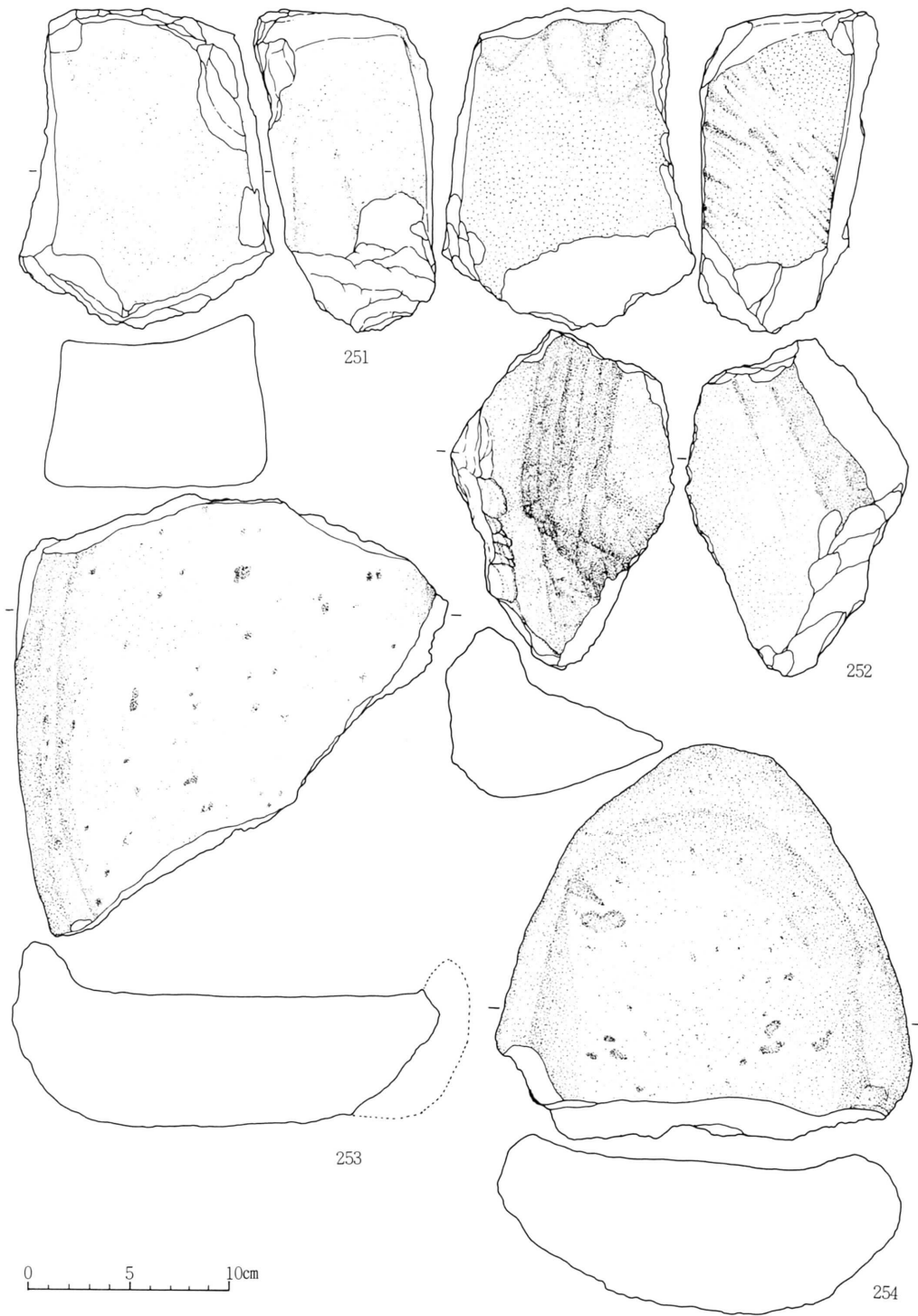
第178図 石器実測図 (第13類)



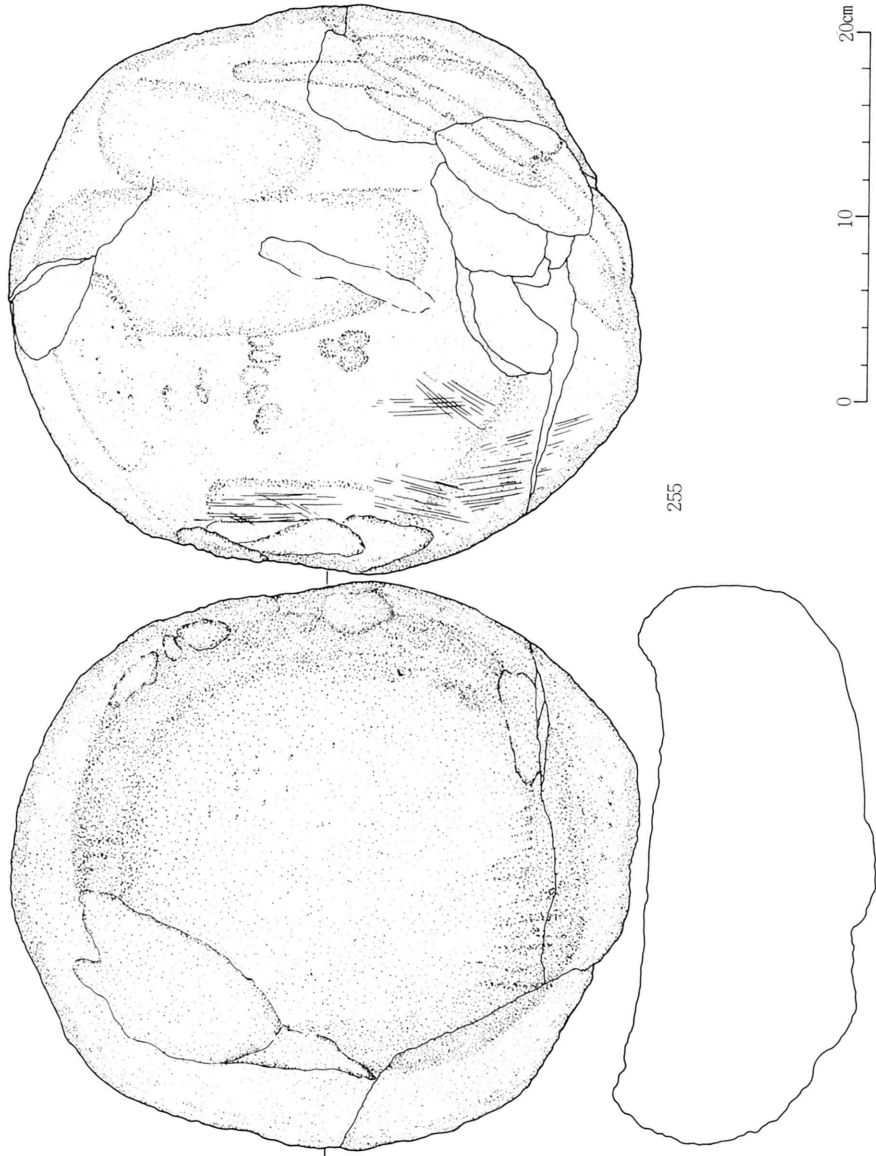
245~248 第14類
 249 第15類
 250 第16類



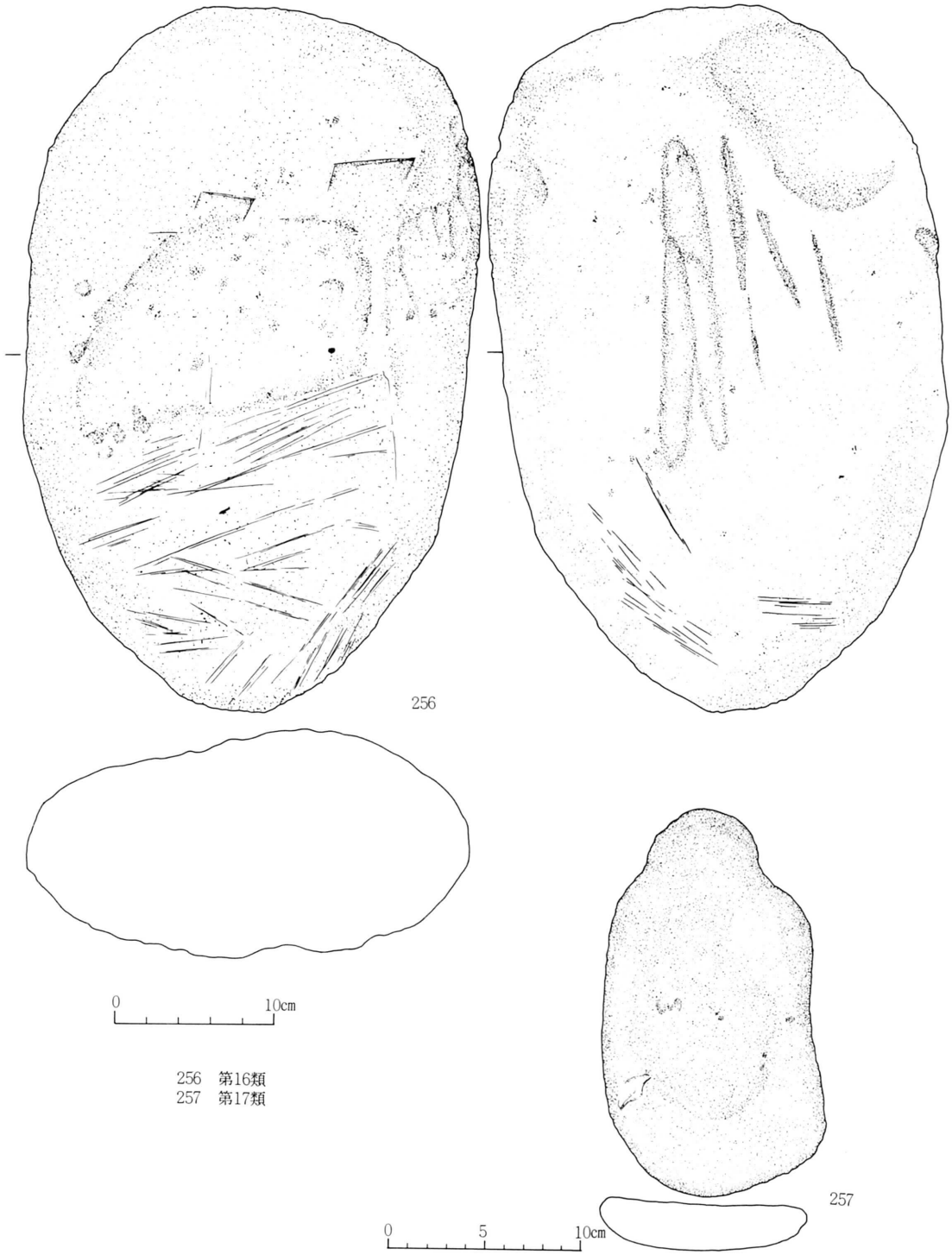
第179図 石器実測図



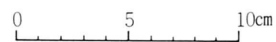
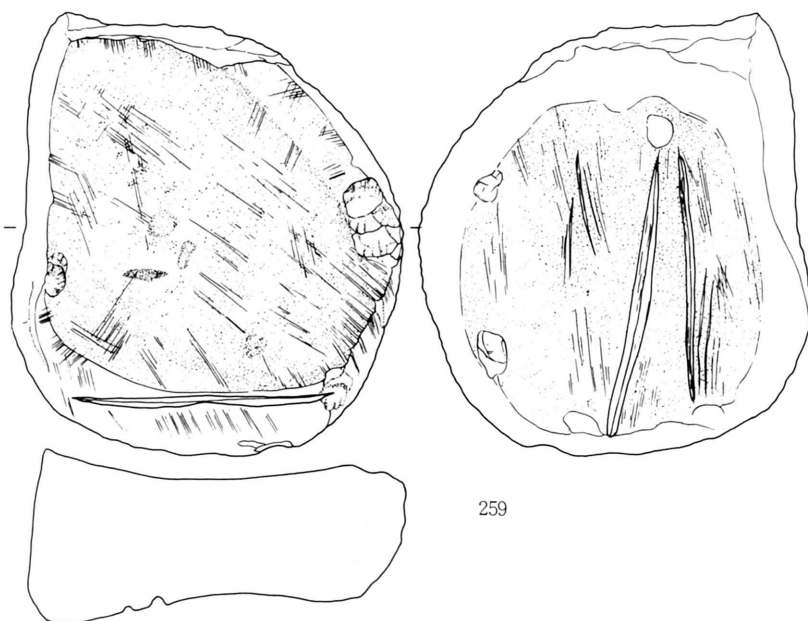
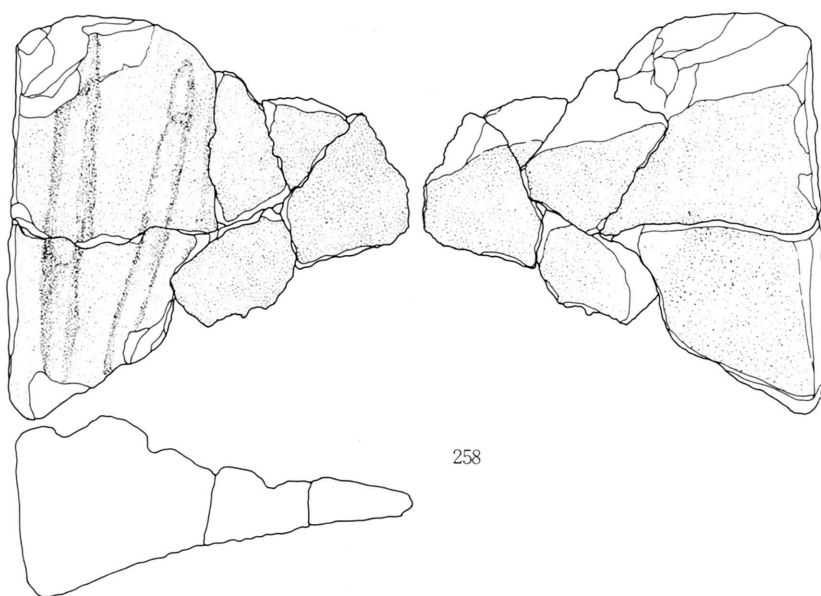
第180図 石器実測図 (第16, 17類)



第181図 石器実測図(第16.17類)

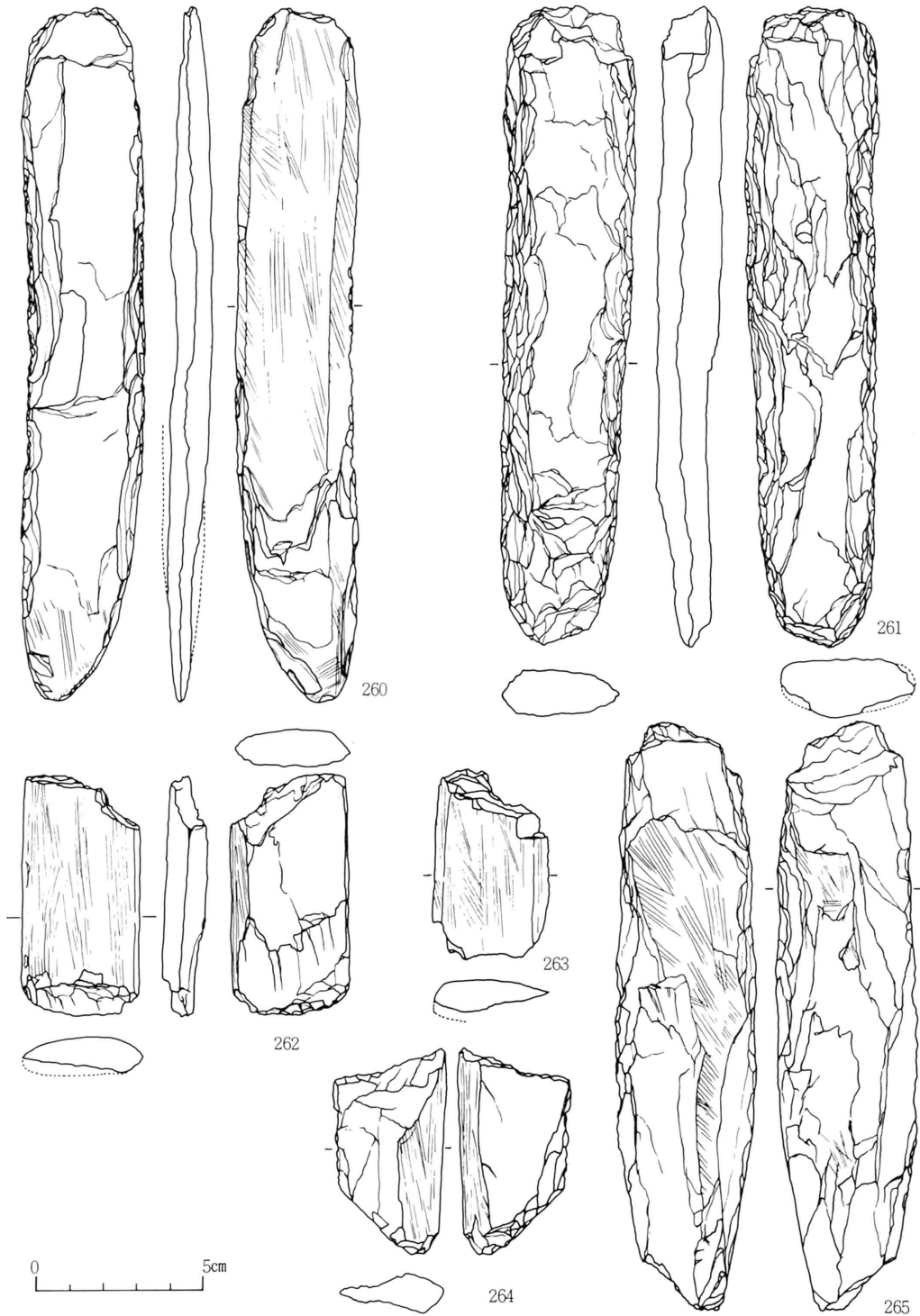


第182図 石器実測図

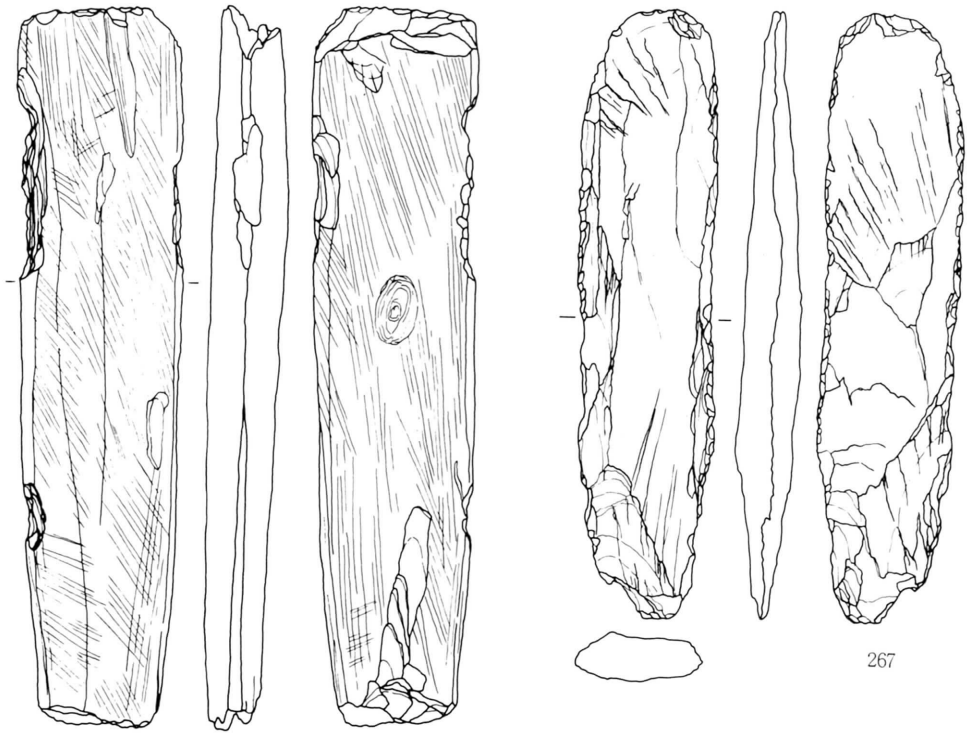


第183図 石器実測図 (第16, 17類)

— 西田遺跡 —

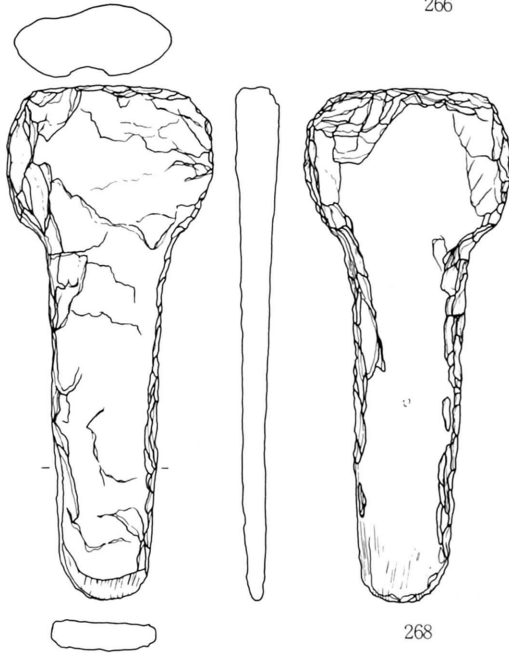


第184図 石器実測図 (第18類)



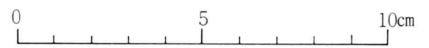
266

267

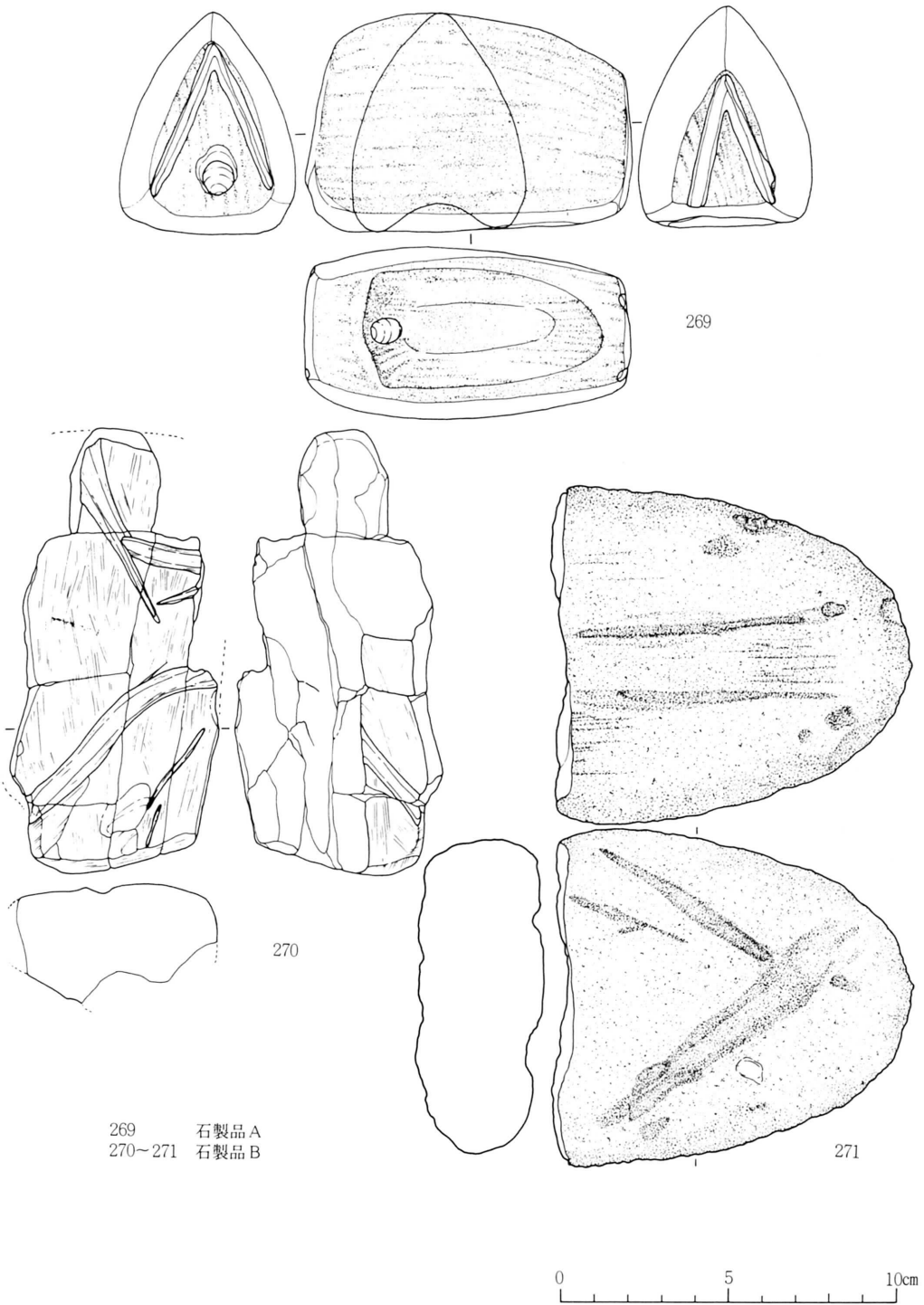


268

266~267 第18類
268 第19類

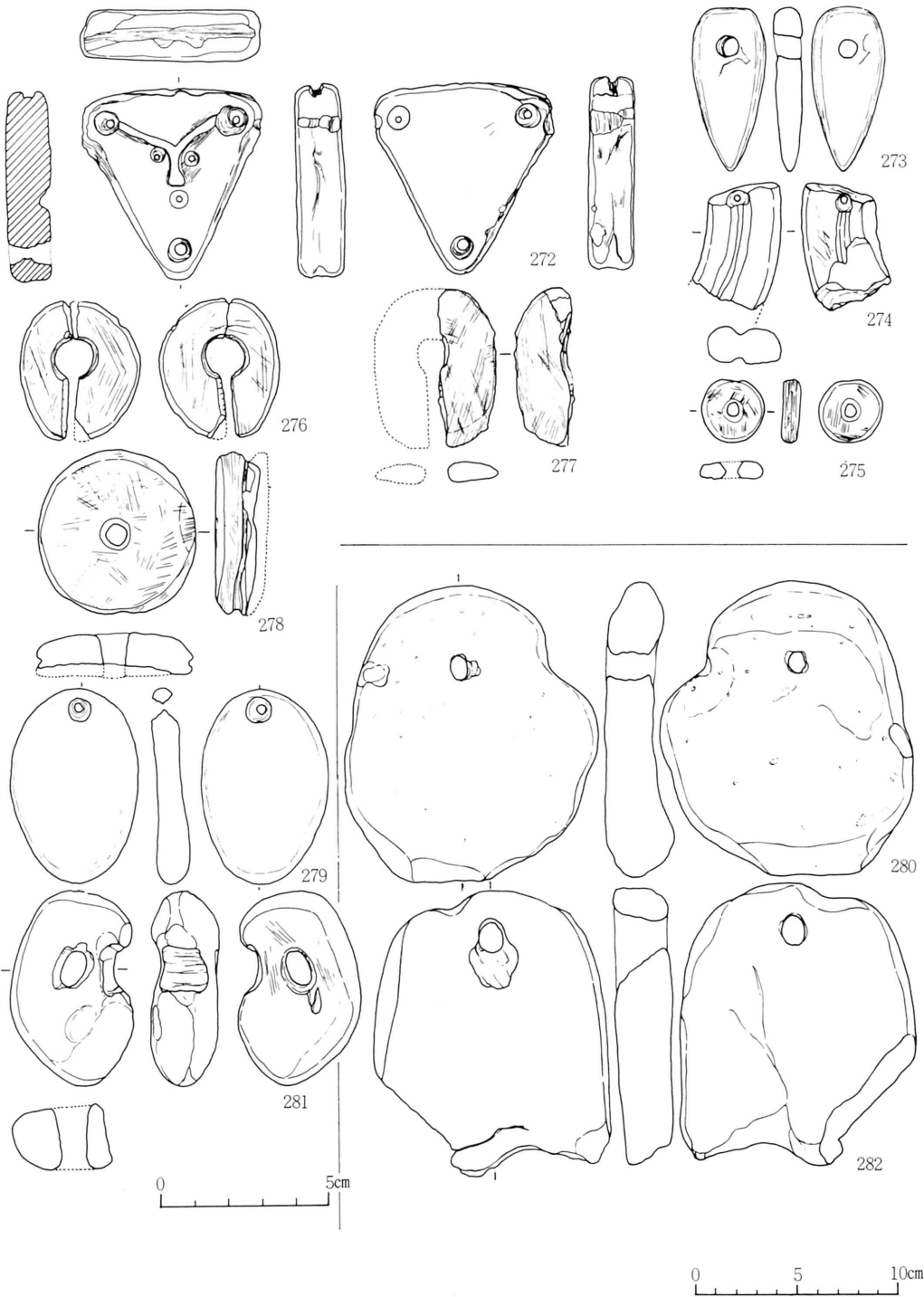


第185図 石器実測図



269 石製品A
270~271 石製品B

第186図 石製品実測図



第187図 石製品 (C) 実測図

第 10 表 土器観察表 (拓影図 117 図～)

図版	No	出土遺構・層位	器種	残存部位	色調	胎土	焼成	地文	施文技法	備考
117 図	1	FC 501p (B)	B	口縁部	明黄褐	小石多、石英少	不良		⑥ ₂ 、⑥ ₁ 上に⑥ ₁	
"	2	FC 501p (B)	"	"	"	小石、砂粒、石英多	"		⑥ ₂ 、⑥ ₁ 上に⑥、①上に⑥	
"	3	GG 03 罎穴状遺構	"	体部	にぶい橙	小石、石英	"		⑥ ₂ 、⑥ ₁ 上に⑥	
"	4	FJ 18 住	"	口縁部	にぶい黄橙	小石、石英、雲母	"	ホ (LR) 縦	⑥ ₁ 、⑥ ₂	
"	5	GA 21 住	"	"	浅黄橙	石英、雲母多、小石少	"	イ (LR) 縦	⑥ ₂	
"	6	FE 18 住p	"	"	にぶい橙	雲母、小石少	"	ホ (LR) 縦	⑥ ₂	
"	7	FC 092p (A)	"	"	にぶい黄橙	小石少、石英多	"	ホ (LR) 縦	⑥ ₂	
"	8	FC 501p (B)	"	体部	浅黄橙	小石多、石英少	"		⑥ ₂	
"	9	FC 501p (B)	"	"	"	小石少、石英、雲母多	"		⑥ ₂	
"	10	FB 53 - 1 住	"	口縁部	にぶい橙	砂、石英多	"		⑥ ₂ (波状)、⑥ ₂ 上に⑥ ₂	
"	11	EH 061p Ⅲ層 (B)	"	体部	にぶい赤褐	石英、小石多	"	イ (LR) 横	⑥ ₂	
"	12	FB 033p (A)	"	"	にぶい褐	石英、小石	"	ホ (LR) 縦		
"	13	EJ 092p (A)	"	"	"	小石、石英多	"	ホ (LR) 縦		
"	14	FB 033p (A)	"	"	"	"	"	イ (LR) 横	⑥ ₂ (波状)、⑥ ₁	
"	15	FC 092p (A)	"	"	にぶい橙	小石 (大きめの石も含む)	"	又		
"	16	FJ 18 住	"	"	"	小石、石英多	"	イ (LR) 縦	⑥ ₂	
"	17	GA 21 住	"	"	灰 褐	"	"	⑥ ₂ 、⑥		
"	18	FI 505 (C)	"	底部	にぶい橙	石英多	"	イ (LR) 横	⑥	
"	19	EF 121p (A)	"	体部	橙	石英、雲母多	"	ト		
"	20	FB 53 - 1 住	A	口縁部	にぶい橙	雲母少	"	イ (燃不明)	⑥ ₂ 上に⑥ ₂	
118 図	21	FE 18 住	"	"	明赤褐	繊維有、石英、雲母多	"	二横	④?	
"	22	FC 501p (B) Ⅱ層	"	上半部	橙	繊維有、石英、小石多	"	二縦	④ ₁	

23	FC 501 p (B)	口縁部	"	"	小石多、石英少	"	イ LR 縦	㊦ ₂	
24	" II—III層	体部	"	"	小石、石英多	"	ニ縦		
25	EJ 185 p (B) III層	口縁部	?	明赤褐	小石多、石英少		イ LR 横	口唇部は指頭圧痕により波状	
26	FD 593p (A)	"	A	灰褐	小石、石英多		"	㊦ ₂	
27	GA 21 住	体部	"	にぶい橙	小石多、石英少		"	㊦ ₂ 、㊦ ₂	
28	"	"	"	橙	石英少		ホ横		
29	"	"	"	明赤褐	小石、石英多		ル		
30	"	口縁部	"	にぶい赤褐	小石多、石英少		"	㊦ ₂	
31	"	"	"	"	小石、石英多		"	㊦ ₂	
32	FB 53—1 住	体部	"	橙	繊維有、小石、石英多		チ風燃り糸RI		
33	"	"	"	"	"		"	㊦ ₂	
34	EF 121p (A)	"	"	"	小石、石英多		ホ LR 縦		
35	FC 212p (A) I層	"	"	"	"		ル?		
36	GA 21 住	"	"	にぶい黄褐	"		ホ LR 横		
37	"	"	"	にぶい褐	小石多、石英、雲母少		チ RI		
38	"	"	"	"	小石、石英多		へLr		
39	EJ 092 (A)	"	"	明黄褐	石英多		ホ LR 横		
40	GG 03 堅穴状遺構	口縁部	"	橙	小石、石英多		トLr 縦?	㊦ ₁ の上に㊦ ₂	
41	GA 21 住	"	"	"	"		ト	㊦の上に㊦ ₁ 、口唇部は㊦ ₂	
42	FJ 503 (E)	"	?	にぶい褐	小石多、石英少		ト r 縦	口縁は㊦の両側面に㊦ ₂	
43	GA 21 住 p9 II層	体部	A	橙	"		"		
44	EH 121p (A)	口縁部	"	灰褐	"		"	口縁は㊦	
45	EE122 p(A) III—IV層	"	N ₁	灰褐、橙	小石、石英多		イ RL 斜	㊦ ₁ 、㊦ ₂	貫通孔有
46	IA 65	"	"	にぶい黄橙	"		イ LR 横	㊦ ₁ 、㊦ ₁	"

図版	No	出土遺構・層位	器種	残存部位	色	調	胎	土	焼成	地	文	施文技法	備考
119 図	47	IB 50 ~ 53 畦畔	?	口縁部	にぶい、橙	橙	小石、石英多		不良	イ LR 縦		㉑ ₁ 口縁は波状に㉑をした後㉑ ₁	貫通孔有
"	48	FD 593p (A)	N ₁	"	橙		"		普通	イ RL 横		㉑ ₁ 、㉑ ₂	
120 図	49	HH 061p (HH06住)	C?	"	にぶい、黄橙	灰黄褐	石英、雲母少		不良	イ (LR) 縦		㉑ ₁ 、㉑ ₂	貫通孔有
"	50	HH06住	"	"	灰黄褐		石英少		"	"		㉑ ₁ 、㉑ ₂	"
"	51	ED 032p (A) III 層	"	"	褐 灰		小石、石英		"	イ (LR) 横		㉑ (波状) 上に㉑ ₁ 、㉑ ₁	
"	52	EE 121p (A)	"	"	にぶい、橙		石英、雲母多		"	ロ (RLR) 縦		㉑ ₁ 上に㉑ ₁ 、㉑ ₁	
"	53	EE 121p (A)	"	"	"		"		"	"		"	
"	54	HG06住	"	"	にぶい、黄橙		石英多		"	"		㉑ ₂ 上に㉑ ₁	
"	55	EC 031p (A)	M'	"	"		石英多、小石		"	イ (LR) 縦		㉑ ₁ 、㉑ ₁	
"	56	EC 031p (A)	"	体部	灰黄褐		石英		"	イ (LR) 縦		㉑ ₁ (波状に横と縦)、㉑ ₁ 上に㉑ ₁	55、56 同一個体
121 図	57	HG 50住	E?	口縁部	明褐灰		石英、雲母		やや甘い	イ (LR) 横		㉑ ₁ 、㉑ ₁	
"	58	EH 121p (A)	?	体部	灰黄褐		小石、石英多		"	ロ RLR 横		㉑ ₂ 、㉑ ₂	
"	59	EF 12住	M ₂	口縁部	灰 褐		"		不良	イ RL 横		㉑ ₁ 、㉑ ₂	
"	60	EE 21住	"	"	にぶい、橙		"		"	イ LR 縦横		"	
"	61	"	"	"	にぶい、褐		"		"	イ LR 横		㉑ ₂	
"	62	FD 593p (A)	E	本部	灰黄褐		"		"	イ LR 縦		㉑ ₁ 、㉑ ₂	
"	63	HH06住	"	口縁部	にぶい、褐		"		"	ロ RLR 斜		"	
"	64	"	"	"	にぶい、橙		小石、石英、雲母多		"	イ RL 横		㉑ ₂	
"	65	"	"	体部	にぶい、褐		小石、石英多		"	イ RL 不整		㉑ ₁ 、㉑ ₂	
"	66	EE 531 (B)	A ₁ '	口縁部	"		"		"	イ LR 縦		㉑ ₁	
"	67	ED 123p (A) Ia 層	N ₂	"	橙		"		"	"		㉑ ₁ 、㉑ ₂	
"	68	EJ 182p (A) II 層	"	"	にぶい、赤褐		"		"	ロ RLR 縦		㉑ ₂	
"	69	ED 123p (A)	"	"	にぶい、黄褐		"		"	不明		㉑ ₁ 、㉑ ₁ 、㉑ ₂	

70	EI 12	"	"	黒 褐	小石多、石英少	"	"	"	① ₁ 、① ₂
122 図	GA 21 住	D ₁	"	にぶい橙	石英、砂粒多	"	"	"	① ₁ 、① ₂ 、② ₁
72	EB 091p(A)	D ₂	"	灰 褐	石英多、小砂	"	1 (LR) 横	"	② ₂ 、③ ₁
73	EB 121p(A)	"	"	"	石英、雲母	"	□ (RLR) 横縦	"	③ ₁ 、④ ₁
74	EE 122p(A) I 層	D ₁ ?	"	にぶい橙	石英、雲母多	"	ホ (LR) 横	"	⑤ ₁ 、⑥ ₁ 、一部① ₁ 上に⑧ ₁
75	EJ 561p(A)	A ₁ '	"	"	石英多	"	1 (LR) 縦	"	① ₁ 、② ₂ 、③ ₁ (波状、縦)
76	EB 121p(A)	L'	口縁～体部上半	褐 灰	小石、石英多	"	1 (LR) 縦	"	② ₂
77	EH 121p(A) IIIa 層	D ₂	口縁部	にぶい橙	石英若干	"	1 (LR) 横縦	"	③ ₁ 、④ ₁
78	EC 121p(B) IIa 層	"	"	灰 褐	小石若干	"	1 (LR) 横	"	⑤ ₁
79	EE 122p(A) III～IV 層	"	"	にぶい橙	石英	"	1 (LR) 横縦	"	⑥ ₁ 、⑦ ₁ 、⑧ ₂ 上に⑩ ₁
80	EE 122p(A) I 層	"	口縁～体部上半	"	石英多	"	1 (LR) 横縦	"	"
123 図	EB 091p(A) IIIa 層	D ₂	上半部	灰 褐	小石、石英多	"	1 LR 縦横	"	① ₁ 、② ₁ 、③ ₁
82	EH 21 住 II 層	I	口縁部	褐 灰	小石多、石英少	"	1 RL 縦	"	④ ₂ 、⑤ ₁
83	EI 032p(A) II 層	"	"	にぶい橙	小石、石英、雲母多	"	"	"	"
84	EF 061p(A)	"	"	橙	小石多、石英少	"	1 LR 縦	"	① ₁ 、② ₁
85	FC 091p(A)	"	"	にぶい褐	"	"	"	"	片側③ ₂ 、④ ₁ 、⑤ ₁
86	EF 501p(A)	?	"	灰黄褐	"	"	不明	"	⑥の上に⑧
87	EF 501p(A)	"	"	灰 褐	"	"	1 LR 縦	"	① ₁
88	EJ 092p(A) V 層	I	上半部	明黄褐	小石、石英、雲母多	"	"	"	② ₂ 、③ ₁ 、④ ₁
89	EJ 092p(A) IV 層	"	口縁部	にぶい橙	"	"	"	"	"
90	EG 561p(B) I 層	"	"	明赤褐	小石、石英多	"	不明	"	"
91	EE 531(B) 最下部	D ₂	"	にぶい褐	小石、石英、雲母多	"	1 LR 縦	"	② ₂ 、③ ₁
92	EJ 531p(B)	D ₁	"	黄 橙	"	"	1 RL 縦	"	④ ₁ 、⑤ ₁
124 図	EI 032p(A) I 層	E	"	にぶい黄橙	小石、石英多	"	不明	"	① ₁ 、② ₁ 、③ ₁ 、④ ₂

図版	No.	出土遺構・層位	器種	残存部位	色調	胎土	焼成	地文	施文技法	備考
124 図	94	FA 151p (A) I 層	E	口縁部	黒褐	小石、石英、雲母多	不良	イ RL 縦	㉑ ₁ 、㉑ ₁	
"	95	HH 21 住	"	"	にぶい黄褐	小石、石英多	"	イ LR 不整	㉑ ₁ 、㉑ ₂	
"	96	FA 151p (A)	"	"	灰黄褐	小石、石英、雲母多	"	イ RL 横	㉑ ₂ 、㉑ ₁	
"	97	EE 122p (A)	"	"	にぶい黄橙	"	やや甘い	ロ RLR 横	㉑ ₁ 、㉑ ₂ 、㉑ ₁ 、㉑ ₂	
"	98	EF 12 住	"	"	"	小石、石英多	不良	イ LR 縦	㉑ ₂ 、㉑ ₁	
"	99	HG 502p (D)	"	"	明黄褐	小石、石英、雲母多	"	不明	㉑ ₁ 、㉑ ₂	
"	100	EG 121p (A)	"	"	にぶい黄橙	"	"	"	㉑ ₂ 、㉑ ₁	
125 図	101	EH 21 住	"	"	にぶい橙	石英少	"	イ (LR) 縦	㉑ ₁ 、㉑ ₂	
"	102	HH 21 住	"	体部	"	小石少	"	ロ (RLR) 不整 方向	㉑ ₁ 、㉑ ₂	
"	103	"	"	口縁部	にぶい黄橙	石英、小石少	"	イ (RL) 不整方 向	㉑ ₁ 、㉑ ₂ 、㉑ ₁ 、㉑ ₂	
"	104	"	"	"	にぶい褐	石英	"	ロ (RLR) 横	"	
"	105	EC 03	"	"	"	小石、雲母	"	イ (LR) 縦	㉑ ₁ 、㉑ ₂ 、㉑ ₁ 、㉑ ₂	
"	106	HH 21 住	"	"	"	石英、雲母	"	"	㉑ ₂	
"	107	"	"	"	にぶい黄橙	石英、小石少	"	イ (LR) 横	"	
"	108	"	"	"	"	石英、小石、雲母	"	"	"	
"	109	ED 091p (A)	"	"	橙	石英	"	イ (RL) 縦横	㉑ ₁ 、㉑ ₂	
"	110	1 区	"	"	にぶい橙	小石少	"	イ (LR) 不整 方向	㉑ ₂	
"	111	EE 21 住	"	"	灰黄褐	石英少	"	イ (LR) 横	㉑ ₂ 、㉑ ₁	
126 図	112	EJ 092p (AJIV・V 層)	L	口縁～体部	橙黒褐	小石多、石英少	"	ロ RLR 縦	㉑ ₁	
"	113	GG 502p (C)	"	口縁	灰黄褐	"	"	イ RL 縦	㉑ ₁ 、㉑ ₂	
"	114	ED 091p (A)	"	"	褐灰、明黄 褐	小石、石英多	"	イ LR 縦横	㉑ ₁	
"	115	EG 121p (A)	"	"	にぶい黄褐	小石多、石英少	"	イ RL 縦	"	
127 図	116	FB53-1 住	?	体部	にぶい黄橙	"	"	イ RL 縦	"	

117	FC 152p(A)	口縁部	小石、石英多	1 RL横	Ⓒ ₁
118	FB53 — 1住	体 部	にぶい黄褐	1 RL縦	"
119	EI 12	"	"	"	Ⓐ ₁
120	FC 061p(A)	口縁部	小石多、石英少	1 RL横	"
121	FG 093p(D)	"	小石、石英多	1 LR縦	Ⓐ ₂ 、Ⓑ ₁
122	EE 531p(A) 7層	"	にぶい黄褐	"	Ⓐ ₁
123	FE 18住 p ₂	"	黄 灰	1 LR縦	Ⓒ ₁
124	EH531p(A)	"	橙	1 LR縦横	"
125	EE531p(A)II~III層	体 部	にぶい橙	Ⓐ ₁ 、Ⓐ ₂	"
126	" II C層	"	"	"	"
127	FC 152p(A)上層	"	小石多、石英少	1 RL縦	Ⓒ ₂
128	GF 21住	"	"	不明	Ⓒ ₁
129	EB 091p(A)	"	小石、石英多	"	Ⓐ ₁ 、Ⓔ ₁
130	"	"	にぶい褐	口 RLR縦	Ⓐ ₁
131	"	"	"	"	"
132	GF 21住	"	"	1 RL不整	Ⓒ ₂
133	HI 06	口縁部	石英	1 (LR)縦	Ⓑ ₁
134	ED 091p(A)	"	"	1 (LR)縦横	Ⓐ ₂
135	FC 091p(A)	"	灰黄褐	不明	Ⓐ ₁
136	FC 061p(A)	"	小石	1 (RL)	"
137	EH121p(A)	"	小石多、石英	1 (RL)縦横	Ⓒ ₂ 、Ⓑ ₁ 、Ⓐ ₂ 上にⒺ ₂
138	EH15住	"	小石、石英	1 (LR)縦	Ⓒ ₂ 、Ⓑ ₁
139	EF 501p(A)	"	石英、雲母	1 (LR)縦	Ⓐ ₁
140	EE 091p(A)	"	石英、小石	1 (LR)縦	Ⓑ ₁ 、Ⓔ ₂

129、130、
131 同一層
体

図版	No.	出土遺構・層位	器具	残存部位	色調	胎土	焼成	地文	施文技法	備考
129 図	141	EH15 住	E	口縁部	にぶい橙	石英多	不良	不 明	㉔ ₂ 、㉔ ₂	
"	142	EE091P(A)	"	"	褐 灰	石英、小石多	"	1 (LR) 縦	㉔ ₂ 、㉔ ₁ 、㉔ ₁	
"	143	ED032P(A)	"	"	灰 褐	石 英	"	1 (LR) 縦横	㉔ ₁ 、㉔ ₁ 、㉔ ₁	
"	144	EH121P(A)	"	"	にぶい橙	小石少	"	1 (LR) 縦	㉔ ₁	
"	145	"	"	"	"	石英、小石多	"	1 (RL) 縦横	㉔ ₁ 、㉔ ₂	
"	146	HH21 住	"	"	褐 灰	石英少	"	1 (LR) 縦	㉔ ₂	
"	147	EH15 住	"	"	灰 褐	石 英	"	1 (RL) 縦横	㉔ ₁ 、㉔ ₁ 、㉔ ₁	
"	148	FC091P(A)	"	"	"	小 石	"	1 (RL) 縦横	㉔ ₁	
130 図	149	EJ092P(A)	"	"	黒 褐	小石、石英多	"	1RL 横	㉔ ₁	
"	150	EE091P(A) II 層	"	"	にぶい黄橙	小石多、石英少	"	"	㉔ ₁ 、㉔ ₁	
"	151	EJ092P(A) V 層	"	"	にぶい褐	小石、石英多	"	□RLR 縦	㉔ ₁ 、㉔ ₁	
"	152	GF21 住 pt4	"	"	"	"	"	不 明	㉔ ₁	
"	153	EE21 住	"	"	にぶい橙	小石多、石英少	"	1RL 縦横	㉔ ₁	
"	154	EJ092P(A) V 層	"	"	"	小石、石英、雲母多	"	1RL 縦	㉔ ₁ 、㉔ ₁ 、㉔ ₁	
"	155	EF12 住	?	"	にぶい褐	小石、石英多	"	1LR 不整	㉔ ₁	
"	156	HH21 住	E	"	にぶい黄橙	小石、石英少	"	1RL 横	㉔ ₁	
"	157	EE531P(B)	"	"	明赤褐	小石、石英多	"	1LR 縦横	㉔ ₁	
"	158	EH121P(A)	"	上半部	浅黄橙	"	"	1LR 縦横	㉔ ₁	
"	159	EG502P(A)	"	口縁部	褐 灰	小石多	"	1LR 縦横	㉔ ₁	
"	160	"	?	体 部	にぶい褐	小石、石英多	"	"	㉔ ₂	
"	161	EF061P(A)	?	口縁部	褐 灰	"	"	"	㉔ ₁	
"	162	ED091P(A)	E	"	明黄褐	小石、石英多	"	1LR 縦	㉔ ₂	
"	163	GH18 住	"	"	にぶい黄橙	小石多、石英少	"	"	㉔ ₁	

164	EF 21 住	"	"	"	小石、石英多	"	1RL 縦横	㊦ ₁ 、㊦ ₁
165	"	"	"	"	小石多、石英少	"	㊦RLR 斜	㊦ ₁
166	FE 18 住	"	"	"	小石、石英多	"	不 明	㊦ ₂
167	FB53 - 1 住	I ₁	"	にぶい橙	小石多、石英少	"	"	㊦ ₁
168	EH 21 住	"	"	"	"	"	1RL 縦	㊦ ₁
169	FE 121 住	"	"	灰黄褐	"	"	"	㊦ ₂
170	FC061p(A)	"	"	橙	"	"	不 明	㊦ ₁
171	EC 121p(B)	"	"	明黄褐	"	"	"	㊦ ₁
172	GF 21 住	J	"	黒 褐	"	"	1RL 縦	㊦ ₁
173	EE 21 住	"	"	にぶい橙	"	"	"	㊦ ₁
174	FC 152p(A)上層 ₁	I ₁	"	明黄褐	小石、石英多	"	不 明	㊦ ₂
175	EE 21 住	"	"	灰黄褐	小石多、石英少	"	"	㊦ ₂
176	"	"	"	にぶい黄橙	"	"	1RL 縦	㊦ ₁
177	GI 18 住	"	"	橙	"	"	"	㊦ ₂
178	EF 152p 上層 ₁	J	"	明黄褐	"	"	1LR 縦	㊦ ₂ の上に㊦ ₁
179	HH 21 住	L	"	灰黄褐	小石、石英多	不良	1RL 縦	㊦ ₁
180	EE 21 住	"	"	にぶい黄橙	小石多、石英少	"	"	㊦ ₂ の上に㊦ ₁
181	EI 15 住	"	"	"	"	"	"	㊦ ₂
182	FD 211p(1)	"	"	"	"	"	1RL 横	㊦ ₁
183	HH 21 住	"	"	褐 灰	"	甘い	1LR 縦	㊦ ₁
184	ED091p(A)	"	"	にぶい黄橙	小石、石英多	不良	㊦RL 縦	㊦
185	EG 502p(A)	"	上半部	明黄褐	"	"	1RL 縦	㊦ ₂
186	EJ 121p(A) III 層	"	"	浅黄橙 灰黄褐	小石多、石英少	"	1RL 縦・へ R ㊦ 縦	㊦ ₂

第11表 土器観察表 (実測図 133 図～)

図版	No	出土遺構・層位	器種	遺存	色調	胎土	焼成	地	文	施文要素	測定値				備考
											口径	胴部径	底径	器高	
133 図	1	E C 032 p (A)	A	約60%	灰褐色	小石混入・疎	普通		無	⑥ ₁	12.8 (13.8)	—	—	—	
	2	G A 211 住	A ₁	" 30%	明赤褐色 ～灰褐色	小石多・疎	"	ニ	(Re) 縦	①	—	—	—	—	
	3	F C 501 p (B)	A ₁	" 60%	灰褐色	"	不良	イ	(LR)	①	17.4	9.9	29.8	器面磨耗	
	4	E J 151 p (B)	B	" 80%		小石・粗砂多	普通		無	② ₂	27.4	12.1	36.0		
	5	F C 561 p (A)	深針	" 20%	明赤褐色	"	やや不良	イ	(LR)	③上に④	23.4	—	—	—	
134 図	6	E J 121 p (A) III A 層 ₁	C	" 80%	灰褐色～ 黒褐色	石英・粗砂多	普通	イ	(LR) 縦	⑤、⑥上に ⑦、⑧、⑨、⑩	12.5	9.0	12.3		
	7	E D 032 p (A)	E	" 20%	黒褐色	小石・粗砂	不良		"	⑪、⑫	(37.0)	—	—	—	
	8	E H 061 p (B) III 層 ₁	E	" 20%	"	"	"	ロ	(RLR)	⑬、⑭、⑮、 ⑯、⑰、⑱	(27.0)	—	—	—	
	9	H I 15 住	E	" 90%	"	"	"		"	⑲、⑳	(7.2)	5.4	8.4		
	10	F D 652 p (A)	E	" 30%	明赤褐色	"	良		"	㉑、㉒、㉓、 ㉔、㉕、㉖、㉗	(40.0)	(28.0)	—	—	
135 図	11	E I 032 p (A) III 層 ₁	E	" 25%	"	"	不良		"	㉘、㉙、 ㉚、㉛、㉜	(59.0)	(40)	—	—	
	12	E J 531 p (A)	E ₁	" 45%	明赤褐色	"	普通	イ	(LR)	㉝、㉞、 ㉟、㊱、㊲	(41.0)	(26.0)	—	—	
136 図	13	E C 032 p (A)	E ₂	" 70%	暗灰褐色	石英等・疎	不良	イ	(LR) 口一横 体一縦	㊳、㊴	(19.6)	(14.7)	26.2	カーボン付着	
	14	E H 031 p (A)	E	" 70%	黒褐色	小石・粗砂	"	イ	(RL)	㊵、㊶	24.0	18.3	—	—	
137 図	15	E E 531 p (B)	E	" 90%	"	"	"	イ	(RL)	㊷	24.5	20.3	32.0		
	16	E F 031 p (A)	E	" 50%	黒褐色～ 灰褐色	"	"	イ	(LR)	㊸	18.3	16.25	8.0	(24.4)	

17	E H 121p (A)	"	" 30%	黒褐色	小石含・疎	不良	イ (R L)	① ₁	(24.2)	—	—	—	—
18	E J 152p (A)	"	" 20%	黒褐色～ 灰褐色	"	"	イ (L R)	① ₁ 、④ ₁ 上に	(20.6)	—	—	—	—
138 図	F C 561p (A)	"	"	灰茶色	細砂・密	普通	イ (R L) □ 体一横一縦	① ₁	(18.6)	—	—	—	カーボン付着
20	E D 091p (A)	" ₃	" 70%	暗赤褐色	"	"	イ (L R)	① ₁ 、① ₁	12.6	—	7.2	15.6	
21	G I 158p (E)	" ₁	" 90%	灰褐色～ 黒褐色	小石含・疎	不良	イ (L R)	③ ₁	11.4	8.45	6.8	15.7	
22	E J 152p (A)	" _?	" 25%	灰褐色	"	やや好	イ (L R)	① ₁ 、③ ₁	(19.0)	—	—	—	カーボン付着
23	E D 123p (A)	"	" 20%	黒褐色	"	不良	イ (L R)	① ₁ 、③ ₁	(23.0)	—	—	—	"
24	E J 152p (A)	"	" 30%	明黒褐色	"	普通	イ (L R)	③ ₁ 、① ₁	20.3	—	—	—	
25	E J 092p (A)	"	" 15%	暗灰褐色	小石含み・密	やや好	イ (L R)	③ ₁ 、① ₁	20.2	—	—	—	
26	E F 031p (A)	"	" 20%	褐色	細砂含む	普通	イ (L R)	③ ₁ 、② ₁ 、① ₁	20.2	—	—	—	
27	E D 151p (A) 5 a 層 ₁	I ₁	" 90%	茶褐色	小石含む・疎	不良	イ (L R)	① ₁ 、③ ₁ 、② ₁	13.9	9.0	7.8	17.5	
28	E C 061p (A)	"	" 80%	暗灰褐色疎	"	"	イ (L R)	① ₁ 、② ₁	7.8	5.7	2.9	8.9	
29	E E 031p (A)	"	" 50%	"	"	やや好	イ (L R)	① ₁ 、③ ₁	11.5	8.3	6.0	14.9	
30	E D 091p (A)	I ₁	" 50%	明灰褐色	細砂・普通	"	イ (L R)	① ₁ 、① ₁	99	7.2	6.0	13.5	
139 図	E G 121p (A)	E ₁	40%	灰褐色	粗砂・小石・疎	不良	ロ (R L R) 縦	① ₁ 、③ ₁ 、 ④ ₁ 、h	(41.0)	(28.0)	—	—	—
32	E B 061p (A)	"	" 50%	"	"	"	"	③ ₁ 、④ ₁ 、 ⑤ ₁ 、h	(34.6)	(15.7)	14.8	30.1	
140 図	E C 032p (A)	" ₂	" 80%	"	"	"	"	③ ₁ 、④ ₁ 、 ⑤ ₁ 、h	33.0	22.1	12.7	60.5	
34	E I 061p (A)	"	" 80%	明黒褐色	小石混・疎	普通	イ (R L) 縦	① ₁ 、① ₁ + ④ ₂	16.3	—	5.0	33.0	
141 図	E D 121p (A) 3 層 ₁	"	完形	明褐色	細砂・小石・密	良好	イ (R L) 縦	③ ₁	30.4	19.9	10.2	44.5	

図版	No.	出土遺構・層位	器種	遺存	色調	胎土	焼成	地文	施文要素	測定値			備考	
										□径	胴部径	底径		高
141 図	36	H I 15住	H	70%	明灰褐色	小石含む・疎	普通	無	㉔	14.8	18.5	8.2	26.7	
	37	E D 091P (A)	E ₁	"	灰褐色	"・疎	良好	イ (L,R) □—横 体—縦	㉔、㉕ ₁	16.7	12.5	10.1	28.2	
142 図	38	"	" ₃	"	黒褐色	"・密	普通	イ (R,L)	㉔のナデ	29.6	18.6	9.7	32.1	カーボン多量 付着
	39	E I 061P (A)	"	25%	暗灰褐色	"	"	イ (L,R) 縦	㉔のナデ	31.0	30.2	—	—	"
	40	"	L	完形	"	"	良好	イ (L,R) "	㉔、㉕上 ₁ ㉖ ₁	37.5	32.0	11.8	42.0	
143 図	41	E D 091P (A)	F	30%	"	"・疎	不良	"	㉔ ₂	14.7 (13.2)	—	—	—	カーボン付着
	42	E J 152P (A)	"	70%	暗褐色	石英等・密	普通	"	㉔ ₁	—	17.9	7.3	20.5	"
	43	"	"	"	灰褐色～ 黒褐色	小石多・疎	不良	ロ (R,L,R) 縦	㉔ ₁ 、㉕ ₁ 、㉖ ₁	22.9	22.1	—	—	"
	44	E C 092P (A)	"	30%	暗褐色	石英等・密	普通	イ (L,R) 縦	㉔、㉔、㉕ ₁	(26.2)	(22.6)	—	—	
	45	E C 032P (A)	"	完形	暗褐色	石英粒等・密	良好	イ (L,R) "	㉔ ₂ 、㉕ ₁ 、㉖ ₂	13.9	12.3	6.45	18.1	
144 図	46	E D 091P (A)	A ₂	70%	黒褐色～ 明褐色	白色礫多・"	普通	ロ (R,L,R)	㉔ ₁ 、㉔上 ₁ ㉕ ₁ +㉖ ₁	23.3	16.2	10.2	27.9	カーボン付着
	47	H I 15住	G	"	暗茶褐色	小石・粗砂・ 疎	不良	イ (R,L)	㉔	19.2	17.2	7.2	24.4	
	48	E F 031P (A)	L	80%	"	小石・粗砂・ 疎	不良	ロ (R,L,R) □—横 体—縦	㉕ ₁ or ㉖ ₁	29.0	32.8	13.2	42.8	
145 図	49	E J 122P (A)	K	50%	明灰褐色	"	"	イ (L,R)	㉔ ₁ 上 ₁ ㉔、 ㉕ ₁ 、㉖ ₁	37.3	33.2	—	—	
	50	E J 152P (A)	E?	70%	明褐色	"	"	(L,R)	㉔、㉔	—	39.8	19.3	—	カーボン付着
146 図	51	G I 15住	I ₁	30%	明褐色～ 黒褐色	石英等・疎	"	イ (L,R)	㉔、㉔	(18.3)	(11.0)	—	—	カーボン付着
	52	E C 032P (A) 2A層 ₁	"	60%	黒褐色	小石等・精	普通	イ (L,R)	㉔、㉕ ₁ 、㉖ ₁ ㉗	17.2	11.0	—	—	カーボン付着

図版	No	出土遺構・層位	器数	遺存	色調	胎土	焼成	地	文	施文要素	測文値				備考
											口径	胴部径	底径	器高	
148 図	72	E D 091p(A)	N ₂	80%	黒褐色～ 褐色	小石多量・疎	不良	イ (R L)		㊶ ₁	20.2	—	5.3	10.3	
149 図	73	E I 032p(A) 1層	"	50%	暗褐色	"	"	無		㊶ ₁	37.5	—	—	—	
	74	E C 061p(A) 床面	"	30%	黒褐色～ 褐色	"	"	イ (R L)		㊶ ₁ +㊶ ₂ 、㊶ ₁	(23.5)	—	5.6	9.8	
	75	F D 593p(A)	"	70%	"	"	"	イ (L R)		㊶ ₁	24.0	—	7.0	11.0	
	76	E C 061p(A)	"	完形	橙褐色～暗 褐色	"	"	"		㊶ ₁ +㊶ ₂ 、㊶ ₂	23.0	—	6.0	10.0	
	77	E D 091p(A)	"	"	明灰褐色	"	普通	"		㊶ ₁ 、㊶ ₁	22.0	—	7.0	11.2	
	78	E C 032p(A)	"	80%	"	"	"	"		㊶ ₂	18.0	—	7.0	8.0	
	79	E J 21住	深鉢	30%	"	"	"	"		㊶ ₂	—	—	(23.0)	—	
	80	E H 21住	E ₁	"	"	"	"	イ (R L)		㊶ ₂	(32.3)	—	—	—	

第12表 土 偶 観 察 表

(註) 計測値()数字は残存値を表わす。

図版	No	出土地点・層位	完/欠	色 調	胎 土	焼 成	計 測 値						備 考
							最大長	頭部幅	肩部幅	腰部幅	足部幅	頭部厚	
150 図	1	E G 21 住居跡	一部欠	黒褐色	小石含・疎	不良	10.4cm(3.6)cm	7.6cm	5.5cm	6.2cm	3.3cm	1.6cm	両耳に貫通孔あり。
	2	I B 03 粗掘	欠	灰褐色	"・普通	普通	(5.0)	(6.8)	-	-	-	1.4	胸部下に貫通孔あり。
	3	I A 59 ~ I B 59 粗掘一上半部	"	明灰褐色	"・"	"	(8.6)	(7.7)	-	-	-	2.4	両耳・胸部下に貫通孔あり。
	4	E I 501p(A)一下半部	"	暗灰褐色	"・"	"	(12.8)	(6.1)	7.2	5.7	-	1.7	両耳・胸部下に貫通孔あり。
	5	I B 03 表土	"	黒褐色	"・疎	不良	(5.0)	-	6.9	4.7	-	1.1	

第13表 土 製 品 観 察 表

図版	No	出土地点・層位	完/欠	色 調	胎 土	焼 成	計 測 値			備 考
							最大長	最大幅	最大厚	
151 図	1	H I 15 住	上部欠	白褐色~黒色	石英多・疎	不良	(10.5)	9.4	4.2	用途不明。
	2	E E 531p (B)	完	暗灰褐色	石英少・疎	"	4.5	4.9	12.0	2つの突起部分を結ぐ貫通孔あり。
	3	E E 122p (A)	"	明黒褐色	"	"	5.0	5.0	0.8	表面全体に刺突文。
	4	G F 219p (E)	上部欠	明黄褐色	"	"	(8.0)	3.4	1.9	いわゆる斧状土製品。上部にR<L単節縄文を施文。
	5	I B 56 粗掘	欠	黒褐色	石英・雲母等	"	(7.2)	(6.7)	5.4	三角形土製品。

第14表 石器 観察 表 計測値()数字は残存部の計測値をあらわす。

図版	No	分類	出土地点	完/欠	計 測 値				基部形状	石 材	備 考
					最大長	最大幅	最大厚	尖頭部 開き角			
152 図	1	1-A	E H 21 住 I 層	完	1.05cm	0.9cm	0.2cm	65°	0.3g	無茎、挟入あり	黒耀石
	2	"	表土	"	2.8	1.9	0.4	40°	1.2	"	珪質泥岩
	3	"	表土	"	2.9	2.1	0.3	40°	1.2	"	"
	4	"	E D 12 p	"	3.55	1.95	0.7	34°	2.8	無茎、浅い挟入	珪質流紋岩質細粒凝灰岩
	5	"	F C 21 住	尖頭部 欠	(4.2)	2.35	0.5	(33°)	(3.7)	無茎、挟入あり	泥質珪質凝灰岩
	6	"	E J 151 p (A) II 層	完	4.75	2.1	0.75	25°	4.5	"	珪質泥岩
	7	"	F E 062 p (A) IV 層	尖頭部 欠	(3.4)	2.35	0.9	(30°)	(5.2)	"	泥質珪質凝灰岩
	8	"	F C 212 p (A)	完	3.6	1.8	0.8	44°	3.7	"、浅い挟入	硬質泥質凝灰岩
	9	"	H J 69 グリット	尖 部	(2.9)	1.95	0.6	(35°)	(1.3)	"、挟入あり	泥質珪質凝灰岩
	10	"	表土	"	(2.85)	1.75	0.4	(32°)	(1.5)	"、僅かに挟入	硬質泥岩
	11	"	表土	欠	3.65	(1.4)	1.0	—	(2.4)	"、僅かに張出	泥質珪質泥岩
	12	"	G F 153 p	完	3.4	1.25	0.5	25°	1.4	"、平坦基	珪質流紋岩質細粒凝灰岩
	13	"	F G 59 グリット	尖頭部 欠	(3.5)	1.2	0.3	(30°)	(1.5)	"、浅い挟入	泥質珪質凝灰岩
	14	"	G I 561 II 層	欠	(2.5)	1.2	0.25	(45°)	(0.8)	—	珪質泥岩?
	15	"	E E 21 住	完	4.85	1.45	0.75	31°	4.0	有茎、基部挟入	泥質珪質泥岩
	16	"	F F 211 住	尖頭部 欠	(2.15)	1.2	0.4	(35°)	(0.6)	有 茎	鉄石英
	17	"	E J 122 p (A) 2 A 層	"	(3.3)	1.35	0.5	(35°)	(0.8)	無茎、平坦基	泥質珪質凝灰岩?
	18	"	E C 18 表土	完	2.6	0.85	0.5	40°	1.0	"、円基	"
	19	"	E G 56	尖頭部 欠	(3.75)	1.7	0.5	(25°)	(2.5)	"、	"
	20	1-C	H F 50	部 欠	3.5	2.2	0.95	(70°)	(6.5)	"、	"
	21	"	E H 091 p (B)	"	4.45	(2.65)	0.9	60°	—	無茎、	硬質泥質凝灰岩

未製品?

152 図	22	1-C	F I 124p (D)	部 欠	3.7 cm (2.53)cm	0.5cm	50°	3.8g (7.4)	無 茎、 円 基 僅かに張り出し	硬質泥岩	未製品 or 欠製品
	23	"	E D 091p (A)	欠	3.72 (2.3)	1.1	—	"	"	泥質珪質泥岩	
	24	"	I C 62、65グリット粗掘	一部欠	4.0 (3.1)	0.8	67°	"	担	泥質珪質凝灰岩	
	25	"	F E 062 p (A) IV層	欠	(3.3) (3.15)	(1.6)	53°	(13.7)	—	泥質珪質泥岩	
	26	1-B	I D 56、59畦畔	尖頭部 欠	(6.3) 2.5	1.0	—	(12)	無茎、浅い抉入	泥質珪質凝灰岩	

図版	No	分類	出 土 地 点	完 / 欠	計 測 値				石 材	備 考		
					最大長	最大幅	最大厚	刃部長			刃部厚	重量
152 図	27	2-a	E E 09 表土	一部欠	(5.3) cm	(1.35)cm	(0.85)cm	(3.6)cm	0.9 cm	(4.5)g	泥質珪質凝灰岩	
	28	2-b	E J 531p (A)	完	4.2	1.0	0.75	4.2	0.75	3.2	"	
	29	"	G A 211 住	"	5.68	0.9	0.8	5.68	0.8	3.5	"	

図版	No	分類	出 土 地 点	完 / 欠	計 測 値				刃部加工	石 材	備 考	
					最大長	最大幅	最大厚	刃部長				刃部長
153 図	30	3-a	G A 21 住	完	7.70 cm	2.00 cm	1.20 cm	6.30cm	9.5 g	片面	硬質泥岩	右側縁に使用による歯こぼれあり。 片刀様
	31	"	H I 15 住	"	4.60	2.18	0.65	3.60	5.2	両面	珪質泥岩	両側縁・先端部に使用痕あり。
	32	"	F C 091 p (A)	"	8.50	3.80	1.32	7.10	29.5	片面	珪質凝灰岩	側縁に使用痕あり。
	33	"	E J 151 p (B) IV層	"	8.00	2.50	1.05	6.60	16.1	片面	硬質泥岩	両側縁・先端部に使用痕あり。
	34	"	F I 039 p (C)	"	7.60	3.38	1.60	6.60	26.5	片面	硬質泥質凝灰岩	両側縁・先端部に使用痕あり。
	35	"	H F 53	一部欠	7.00	(3.70)	1.10	5.60	(18.9)	両面	フリント質凝灰岩	片刀様
	36	"	F E 121 p (A)	完	6.10	3.30	1.07	5.10	14.7	片面	硬質凝灰質泥岩	
	37	"	H I 56	"	7.10	4.15	1.10	6.00	21.8	片面	砂質凝灰岩	

図版	No	分類	出土地点	完/欠	計 測 値				刃部加工	石 材	備 考
					最大長	最大幅	最大厚	刃部長			
153 図	38	3-b	粗掘	完	4.28 cm	1.80 cm	0.95cm	2.90cm	7.65g	両 面	珪質泥岩
	39	3-a	F E 21 表土	"	4.70	3.50	0.80	3.90	8.9	片 面	フリント質凝灰岩 (新第三紀)
	40	3-b	I B 15 グリット	"	5.42	3.15	2.5	4.10	12.55	両 面	硬質泥岩
	41	"	H I 15 住	"	4.10	2.15	0.70	3.00	4.8	"	珪質泥岩
	42	"	I B 12	欠	5.30	3.60	1.28	4.20	13.2	"	珪質凝灰岩
	43	"	F E 18 住ピット	"	6.05	2.95	1.05 ~ 1.3	5.30	16.75	片面部両面	硬質凝灰岩質泥岩
	44	"	I D 62-65	完	4.60	1.80	0.68	3.80	4.0	両 面	珪質泥岩
	45	"	G B 56	欠	(5.60)	(3.80)	(1.30)	(4.40)	(18.4)	"	珪質凝灰岩
	46	3-c	E G 061 p (A)	完	6.20	5.50	1.23	4.70	31.9	片 面	硬質凝灰岩質泥岩
	47	3-d	F E 062 p (A) I 層	欠	(4.50)	(3.00)	(1.13)	(3.20)	(13.1)	片 面?	砂質粘板岩
154 図	48	"	I C 56	完	6.40	4.30	1.10	4.90	13.45	両 面	凝灰質硬質泥岩
	49	"	E J 151 p (B) III 層	一部欠	3.60	5.00	0.90	2.50	7.35	片 面	珪質泥岩
	50	"	表土	欠	6.0	(6.0)	0.70	4.20	(21.9)	"	凝灰質泥岩
	51	"	H I 15 住	完	3.80	5.60	1.20	2.60	15.4	"	珪質泥岩
	52	"	G C 15-18	"	5.70	9.10	1.70	4.50	53.4	"	硬質凝灰岩質泥岩
	53	"	F I 069 p (C)	"	4.50	6.80	1.08	3.20	16.15	"	硬質泥岩
	54	3-e	I D 53	"	4.50	7.10	1.70	2.40	33.15	両 面	珪質泥岩
	55	"	F I 15	完	4.60	5.18	2.80	3.00	15.0	"	珪質凝灰岩
	56	3	G C 091 p (C)	欠	(4.40)	3.15	0.80	4.60	(7.5)	片 面	珪質泥岩

(註) 本表では刃部長は最大長のうち、ツマミ部分を差し引いた長さを表わす。

図版	No	分類	出土地点	完/欠	計測				刃部加工	石材	備考	
					最大長	頭部幅	刃部幅	最大幅				最大厚
155 図	57	4-a	E E 12 表土	完	5.3	1.0	1.2	1.4	0.9	6.8	珪質泥岩	
	58	"	F J 50	欠	(5.4)		1.6	2.2	1.6	14.2	珪質凝灰岩	
	59	"	F J 151p (D)	完	4.93	1.63	0.98	2.1	1.2	11.7	珪質泥岩	
	60	"	E F 12 表土	"	4.6	1.6	1.78	2.2	0.9	6.85	片	
	61	4-b	H I 59	"	7.0	2.2	3.6	4.0	1.6	36.2	凝灰質泥岩	
	62	"	H I 50	"	7.7	1.6	4.1	4.2	2.0	52.2	凝灰質泥岩	
	63	"	E G 061p (A)	"	7.98	3.2	5.1	5.1	1.6	61.35	硬質泥岩	
	64	"	E E 15 表土	完	7.8	1.8	3.6	3.6	1.4	32.8	凝灰質泥岩	
	65	"	E C 061p (A)	一部欠	5.6	2.2	3.2	3.2	1.0	16.3	硬質泥岩	
	66	"	E G 061p (A)	完	6.6	2.5	3.0	3.3	1.5	31.8	"	
156 図	67	4-c	H I - I A 06 畦畔	"	10.2	2.2	3.5	3.8	1.6	77.7	両面	
	(68)	"	E E 031p (A)	欠	(4.3)		3.7	3.8	1.5	29.3	"	
	69	"	E H 21 住 II 層	"	(4.6)		3.4	3.8	1.9	32.2	"	
	70	"	H J 598p (D)	"	6.4	2.4	4.32	4.4	1.5	39.5	砂質凝灰岩	
	71	"	E I 501p(A)3 B 層	完	7.5	1.9	3.0	3.0	1.6	38.3	硬質泥岩	
	72	4-b	E E 21 住 34 pit	"	7.1	1.9	1.8	2.3	1.5	22.7	片	
	73	4	E J 092p (A)	欠	(6.2)	1.9	3.2	2.9	1.5	33.0	硬質泥岩	
	74	"	表土	完	5.0	2.6	3.2	3.23	1.48	21.9	"	
	75	"	E H 121p(A)IVa 層	欠	(4.6)	2.3	3.2	3.2	1.9	25.8	"	
	76	"	H H 21 住	"	4.1	2.0	2.3	2.4	1.3	13.8	珪質凝灰岩	
157 図	77	4-c	F B 53 - 1 住 No.8p	完	10.0	2.4	2.3	2.8	1.8	50.2	両面	
	78	"	F J 50	"	10.2	2.7	2.8	3.3	2.0	68.7	"	
	79	"	E H 21 住	"	11.0	2.0	2.2	3.0	1.0	34.7	"	ナイフ?
	80	"	H I 15 住 No.190	"	14.0	3.0	3.6	4.1	2.5	136.3	"	81a、b 接合。 未製品か?
	81a	4	D 区中段テラス	欠								
	81b		E J 151p (B) III 層									
	82	4-c	EG21、EH21 表土	完	5.1	2.2	3.9	4.0	1.1	22.2	両面	

図	No	分類	出土地点	完/欠	計 測 値				刃部加工	石 材	備 考
					最大長	最大幅	最大厚	重 量			
158 図	83	4	E C 031 p (A)	完	5.2	4.1	1.1	28.1	両 面	硬質泥岩	
	84	5	F B 061 p (A)	完	5.38	4.08	1.25	25.0			
	85	5-a	F E 123 p (D)	"	5.8	5.4	1.6	51.35	片 面	凝灰岩質砂岩	
	86	"	E C 122 p (A)	"	5.3	4.0	1.3	26.4	"	硬質泥質凝灰岩	
	87	5	表土	"	4.1	4.0	1.2	23.15		凝灰岩質砂岩	
	88	5-b	E H 15住	"	6.68	2.32	1.3	17.3	片 面	珪質泥岩	
	89	"	F E 121 p (A)	"	4.27	2.95	0.9	6.4			
	90	5-c	G C 03	"	3.55	6.08	1.78	29.9	片 面	珪質泥岩	
	91	"	H D 62	"	3.5	3.8	1.0	11.9	"		
	92	"	G A 062 p (C)	"	4.75	7.5	1.25	32.4	"		
	93	"	H J 16	欠	4.6	(3.9)	0.78	(12.05)		珪質頁岩	
	94	"	F B 53-1住II層	完	3.8	4.0	0.85	11.0	両 面	硬質泥質凝灰岩	
	159 図	95	"	H H 18	"	3.85	5.48	1.5	25.0		凝灰岩質砂岩
96		"	F I 064 p (D)	欠	2.6	(3.3)	0.88	(7.8)	片 面	珪質凝灰岩	
97		"	H F 56	完	3.5	4.6	0.8	10.2	"		
98		"	F E 09	"	4.35	5.15	1.15	24.8	"		
99		"	H G 59	"	3.1	5.5	1.55	30.3	"		
100		5-d	H H 21住	"	6.3	7.5	1.8	71.9	両 面		
101		"	H J 12	"	7.3	7.8	1.6	96.55			緑色砂質凝灰岩グリーンタフ
102		"	出土地点不明	"	5.9	6.3	1.3	44.1			
103		"	G A 18	"	5.4	6.3	0.9	28.1			

104	5	F G 15	一部欠	(4.3)	2.9	0.7	(8.7)	両 面	泥質珪質凝灰岩	
105	"	F A 21 住 II 層	欠	(3.18)	(2.5)	1.15	(6.8)	片 面	珪質泥岩	
106	5-e	H J 62	完	3.75	2.1	0.7	4.85	両 面		
107	"	E H 21 住第 3 層	"	7.2	4.0	1.25	22.75	片 面	凝灰岩質岩	
108	"	G C 152p(D)	"	8.4	4.3	1.6	47.8	"	凝灰岩質泥岩	
109	5-d	F H 18	"	5.3	6.0	1.45	39.25	"	硬質泥岩	
110	"	I B 59	"	5.3	5.5	1.25	33.6	"	流紋岩質凝灰岩	
111	"	F E 181p(D) II 層	"	6.0	5.4	1.10	32.55	"	硬質泥質凝灰岩	
112	"	G C 50	"	5.35	5.4	1.25	31.2	"	硬質泥岩	
113	5-e	I A 59, I B 59 畦畔	"	9.3	3.5	1.7	45.7		凝灰岩質泥岩	
114	"	H G 59	"	7.0	4.8	1.6	51.2	片 面	凝灰岩質泥岩	
115	5	E J 151p(B) III 層	"	7.0	3.85	1.9	41.2	"	凝灰岩質砂岩	
116	5-f	H J 53	"	6.75	4.1	2.1	43.1	"	珪質凝灰岩	
117	"	G C 152p(D)	"	8.8	5.6	1.7	88.8	"	凝灰岩質泥岩	
118	5	F G 21 住		7.4	3.3	1.75	43.6			第 4 類未製品か?
119	"	H I 06 住		8.0	3.3	1.25	36.0			"
120	"	G I 06	欠	(3.8)	(3.3)	1.1	(14.1)			"
121	"	E G 121p(A)	"	(2.12)	1.55	0.72	(2.9)			"
122	"	E E 121p(A)	"	(5.6)	3.6	1.3	(21.85)			珪質泥岩
123	5-g	H I 59~I A 59 畦畔	完	8.2	7.0	1.9	100.25	片 面	硬質泥質凝灰岩	ノッチ?

図	No	分類	出土地点	完/欠	計 測 値				石 材	備 考			
					最大長	頭部幅	刃部幅	最大幅			最大厚	重 量	
162 図	124	6-b	E E 211 住検出面	欠	(11.6)	3.1		5.3	2.7	(246.6)	凝灰質細粒硬砂岩 (北上山地)		
	125	"	H H 50	"	(9.4)	3.2				(122.5)	粘板岩ホルンフェルス		
	126	"	E H 061p (B) III層	"	(8.6)		3.8	4.0	2.5	(134.5)	淡緑色凝灰岩		
	127	"	E H 21 住小pit No 3	"	(12.8)	3.2		5.4	3.1	(355.6)	凝灰質細粒硬砂岩 (北上山地)		
	128	"	E D 091p (A)	"	(6.6)	3.3		4.9	3.1	(146.3)	硬砂岩 (北上山地)		
	129	"	F F 21	"	(13.3)	3.4		4.4	2.1	(171.5)	粘板岩 (北上山地)		
	163 図	130	6-a	G A 211p (D)	完	9.1	3.1	3.7	4.0	1.6	112.0	淡緑色細粒凝灰岩	
		131	6-b	表 土	欠	(7.6)		5.1	5.7	2.2	(165.8)	淡緑色砂質凝灰岩	
		132	"	H I 15 住	完	11.4	2.8	4.3	4.5	1.6	142.7	緑色片岩	
		133	"	丘陵北端表採	欠	(10.7)		5.5	5.5	2.9	(284.0)	淡緑色細粒凝灰岩	
164 図	134	"	E H 21 住床面上	"	(10.2)		4.9	5.1	2.4	(211.5)	淡緑色凝灰質砂岩 (北上山地古生層)		
	135	"	I C 62	"	(9.8)		4.6	4.8	2.1	(132.8)	蛇紋岩 (北上山地西縁-紫波~大迫)		
	136	"	H H 06	"	(10.6)		4.1	4.7	4.7	(178.8)	凝灰岩質細粒硬砂岩		
	137	"	E G 12 住	"	(10.8)	3.5		5.0	3.1	(278.3)	濃緑色砂質凝灰岩 (奥羽山地...下部グリントラフ層)		
	138	"	G J 06	欠	(13.9)		5.2	5.7	3.0	(413.3)	緑色砂質凝灰岩 (北上山地西縁に分布する緑色岩類と称される岩石)		
	139	6-c	E H 12 p	"	(6.6)	3.9		5.6	4.2	(177.5)	石英安山岩 (奥羽山地、中新世-稗貫~紫波)		
165 図	140	6-b	出土地点不明	"	(7.7)	3.1				(103.6)	淡緑色凝灰岩		
	141	"	E H 092p(A)IV層下部	"	(11.3)	3.5		7.4	3.9	(402.3)	石英安山岩 (奥羽山地中新世稗貫~紫波)		
	142	"	H G 122 p10 Ia層	"	(13.8)	3.9		5.2	2.7	(296.0)	緑色砂質凝灰岩 (奥羽山地第三紀中新世)		
	143	6-c	E H 502 p (A)	"	(12.9)		5.9	6.3	4.2	(521.0)	緻密質菱刈安山岩 (新第三紀中新統下部グリントラフ層)		
	144	6-b	G A 50	"	(9.0)		5.7	5.7	2.5	(202.9)	淡緑色凝灰岩		
	145	6-c	表 土	"	(12.6)		5.7	6.1	2.7	(349.0)	輝石安山岩 (新第三紀、背梁山地側)		
	146	6-b	G H 59	"	(8.9)	4.2				(148.0)			
	166 図	147	"	E区出土不明	完	15.6	3.2	2.8	3.8	3.2	265.9		
148		"	表 土	"	12.6	3.3	5.0	5.0	3.1	284.5	淡緑色砂質凝灰岩	二次的使用(?)	

149	"	F H 21 グリッド	完	13.2	5.2	5.5	6.1	2.8	420.0	緑色砂質凝灰岩 (奥羽山地新第三紀中新世)	"
150	"	H J 56	"	10.1	2.8	3.7	3.9	1.9	96.8		"
167 図	"	H I 06 検出面上	"	14.7	3.9	4.3	5.2	2.0	260.7		"
152	"	F F 623p (D)	"	12.6	4.1	4.7	5.0	2.9	272.4	淡緑色砂質凝灰岩	"
153	7	E H 21 住 II 層	"	3.4	1.1	1.7	1.7	0.5	4.6	スレート	
154	"	H J 56	"	4.7	1.9	2.3	2.6	0.6	9.4	スレート	
155	"	G I 506p (D)	完	5.4	1.8	2.5	7.6	0.6	15.2		
156	"	I B 59~62 畦畔	欠	(4.9)	1.9	1.6	1.9	0.7	8.5	粘板岩	
157	"	H F 211p (E)	完	5.4	1.5	1.9	2.1	0.8	10.8	粘板岩ホルンフェルス	
158	"	E C 06	欠	9.3	1.7	2.3	2.6		17.3	凝灰岩質粘板岩 (北上山地古生層)	
159	"	H I 15 住 No. 405	完	(6.6)		1.0	1.4	0.9	16.4	淡緑色粗粒砂質凝灰岩	
168 図	8-a	G B 536p (E)	欠	15.2	5.5	6.4	6.8	3.2	321.0	緑色凝灰岩千枚岩 (北上山地)	
161	"	表土	"	10.1	5.3	7.6	7.7	2.8	173.5	砂質千枚岩 (北上山地)	
162	8-b	I C 56	完	9.9	3.1	4.2	4.5	2.1	101.7	緑色砂質凝灰岩	
169 図	"	H I 15 住	"	15.7	4.8	5.2	5.9	2.4	279.5	緑色凝灰岩質千枚岩	
164	8-c	F E 062p (A) 4 層	"	11.9	3.1	3.2	3.4	2.3	144.5	凝灰岩 (北上山地古生層)	
165	"	H J 56	"	15.6	5.0	5.3	5.9	3.0	357.0	緑色凝灰岩質千枚岩 (北上山地)	
166	"	H F 625p (D)	"	13.9	4.1	4.2	4.8	2.9	266.7	凝灰岩 (北上山地古生層)	
170 図	"	H H 50	"	13.5	5.1	5.4	6.5	3.6	408.6	凝灰岩 (北上山地古生層)	
168	"	E E 092p(A) I・II 層	欠	12.0	4.6		6.2	5.1	457.0	凝灰岩 (北上山地古生層)	
169	9	H H 597p (D)	完	14.2	4.9	6.1	3.9	3.9	511.0	砂質凝灰岩	

図	No.	分類	出土地点	完/欠	計測値			石	材	備考
					長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)			
170 図	170	10-a	E区出土不明	完	17.2	7.65	2.9	495	石英安山岩	
	171	"	表土	"	13.1	6.9	4.5	450	安山岩溶岩 (第4紀火山)	
171 図	172	"	E J 122p(A)	"	19.0	5.3	3.0	405	両輝石安山岩 (奥羽山地)	
	173	"	表土	"	14.9	7.2	4.45	610	石英安山岩	
	174	"	E G 121p(A)	"	20	8.0	5.2	1,020	両輝石安山岩 (奥羽山地)	
	175	"	I C 62	"	12.2	6.5	3.2	375	両輝石安山岩	
	176	"	G G 03 住	"	14.7	8.4	5.4	780	石英安山岩	
	177	"	F G 562p(D)	"	14.4	6.2	6.3	825	輝石安山岩 (奥羽山地、中新世)	
	178	"	E G 121p(A)	"	14.1	8.7	5.5	945	石英安山岩	
	179	"	E D 09	"	12.7	5.5	3.2	425	閃緑岩 (北上山地)	
172 図	180	"	F C 562p(D)	"	13.1	6.3	4.0	494	輝石安山岩 (奥羽山地、中新世)	
	181	"	H R 06	"	14.5	7.75	2.3	230	淡綠色砂質凝灰岩	
	182	"	F J 02 II層	"	11.1	5.2	4.2	450	両輝石安山岩 (奥羽山地)	
	183	"	I C 62	"	11.15	6.7	3.2	365	両輝石安山岩	
	184	"	E C 12	欠	7.1	4.6	4.6	305	"	
	185	"	F C 561p(A)	完	10.7	6.6	3.2	293	輝石安山岩 (奥羽山地、中新世)	
	186	"	E J 531p(A)	"	10.9	5.2	2.9	228	"	
	187	"	表土	欠	9.0	6.6	4.4	345	両輝石安山岩 (奥羽山地)	
	188	"	H H 21 住	完	17.5	7.8	4.8	1,090	綠色砂質凝灰岩	
	189	"	F B 033p(A)	欠	8.7	7.2	3.2	275	両輝石安山岩	
173 図	190	10-b	E E 121p(A)	完	14.7	6.3	3.6	490	石英安山岩	
	191	"	E J 152p(A) II層	"	14.3	6.9	3.0	545	閃緑岩 (北上山地)	

192	"	F D 091 p	欠	8.45	6.9	2.25	190	緑色砂質軟灰岩	折損後二次的使用
193	"	G J 561 II層	"	7.7	7.0	3.9	250	両輝石安山岩	
194	"	E H 21 住	"	6.4	7.1	4.7	285	石英安山岩	
195	"	F E 18 住上面	完	15.1	6.9	3.2	535	"	
196	"	表土	"	14.0	7.8	3.0	385	安山岩溶岩 (第4紀火山)	
197	"	E D 212 p	"	13.8	6.65	2.5	365	石英安山岩	
198	"	H I 15 住	"	14.7	6.9	3.4	625	硬砂岩	
199	"	E J 531p (A)	"	13.7	6.8	3.1	417	輝石安山岩 (奥羽山地、中新世)	
200	"	H J 59 住	"	16.2	7.25	3.7	650	石英安山岩	
201	"	E E 09	欠	6.7	5.35	2.45	125	"	
202	"	E H 211 住	"	7.8	6.7	3.1	255	両輝石安山岩 (奥羽山地)	
203	10	E J 122p (A) II層	"	7.	5.9	3.5	165	"	
204	"	I C 06	"	7.6	8.0	2.5	280	"	
205	"	I C 06	"	9.8	7.9	2.6	335	輝石安山岩 (奥羽山地、中新世)	
206	"	H I 15 住	"	13.4	4.8	2.9	300	超塩基性岩 (北上山地、大迫～宮守地区)	
207	10-b	F E 122p (A)	"	18.1	7.6	3.5	681	濃緑色砂質凝灰岩 (奥羽山地、中新世グリーンタフ)	
208	10-c	H I 03	欠	9.8	7.2	3.7	455	石英安山岩質角礫岩 (奥羽山地、中新世)	
209	"	H I 15 住	"	16.9	9.1	3.8	945	石英安山岩 (花巻～雫石間の脊梁山地東縁寄りの男助層)	
210	"	F区柱状p	"	11.3	6.6	2.1	260	濃緑色砂質凝灰岩 (奥羽山地、中新世、グリーンタフ)	
211	"	I C 62-3 p	"	13.2	6.8	2.6	436	"	
212	"	E F 09 p1 ~ p5	欠	8.0	6.2	2.8	210	淡緑色砂質凝灰岩 (グリーンタフ)	折損後二次的使用
213	"	H J 62-2	完	7.6	3.4	3.4	240		
214	10	E G 12 住	"	14.5	7.7	2.0	400	濃緑色、凝灰岩	
215	"	E J 531p (A)	"	13.7	8.9	4.1	715	緑色凝灰質千枚岩 (北上)	

174 図

175 図

図	No	分類	出土地点	完/欠	計 測 値			石 材	備 考	
					長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)			重量 (g)
175 図	216	10	E J 531p (A)		16.8	6.1	4.1	635	濃緑色砂質凝灰岩(奥羽山地、中新紀、グリントフ)	
	217	10-d	F B 53 グリッド	欠	16.5	5.7	2.95	415	緑色砂質凝灰岩	
	218	10	H F 15 住	完	14.7	7.1	4.0	545	変朽安山岩 (プロピライト) (新第三紀中新世、奥羽山地)	
	219	10-d	E J 122p (A)	"	15.3	5.4	1.6	185	流紋岩質凝灰岩	
	220	"	F D 593p (A)		16.1	6.9	2.4	310	緑色凝灰質千枚岩 (北上山地)	
	221	"	表 土	欠	18.1	8.8	4.1	805	淡緑色砂質凝灰岩	
	222	"	F E 121p(A)II層		13.5	5.3	1.6	168	緑色凝灰質千枚岩 (北上山地)	
	176 図		11	H G 50	完	7.5	7.0	1.3	105	淡緑色細粒凝灰岩
		224	"	H J 06	"	7.5	6.0	0.9	50	石英安山岩
		225	"	F A 151p (A) I層	"	9.4	5.9	2.1	150	淡緑色砂質凝灰岩 (風化して褐色化)
226		"	表 土	"	9.9	4.8	2.3	90	輝石安山岩 (新第三系)	
227		"	F A 151p (A) I層	欠	10.6	8.1		160	淡緑色砂質凝灰岩 (風化して褐色化)	
228		"	表 土	完	8.6	6.1	1.3	130	淡緑色細粒凝灰岩	
229		"	F A 151p (A) I層	"	8.1	6.8	2.1	140	石英安山岩	
230		"	F D 593p (A)	"	7.4	5.5	1.0	60	"	
177 図	231	"	G A 211 住		10.2	8.6	1.8	198		
	232	"	H J 651 (E) II層	完	5.7	5.1	1.2	45	淡緑色細粒凝灰岩	
	233	12	E F 501p (A)		10.7	5.4	3.7	66	安山岩溶岩塊	
	234	"	E E 531p (B)		11.5	8.0	3.1	264	"	

図	No	分類	出土地点	完/欠	計 測 値			石 材	備 考	
					長 (cm)	高 (cm)	幅 (cm)			
178 図	235	13	F C 561p (A)	完	12.5	7.1	5.1	流紋岩質凝灰岩 (奥羽山地中新世)		
	236	"	I B 56 ~ 59	"	10.4	7.3	6.0	両輝石安山岩熔岩塊 (第4紀)		
	237	"	F B 21 大溝	"	14.7	7.9	4.8	輝石安山岩 (奥羽山地中新世)		
	238	"	G F 21 住	"	14.8	7.6	4.8	砂質凝灰岩 (奥羽山地中新世)		
	239	"	F C 561p (A)	"	17.3	13.6	9.0	1,440 両輝石安山岩熔岩塊 (第四紀)		
	240	"	E J 032p (B) IV層	"	13.2	7.5	5.7	265 両輝石安山岩熔岩塊 (第四紀)		
	241	"	E D 151p (A)	"	9.5	7.3	4.9	250 砂質凝灰岩 (奥羽山地中新世上部グリントフ)		
	242	"	I A 12	"	15.0	7.0	4.4	400 凝灰岩質粘板岩 (スレート)		
	243	"	E E 501p (B)	欠	11.0	10.9	4.8	470 両輝石安山岩熔岩塊 (第四紀)		
	244	"	H G 50 住	完	12.6	9.1	6.2	660 "		
	245	14	F J 50	"	7.8	7.4	2.6	81 凝灰岩粘板岩 北上山地 古生層		
	246	"	H J 50	"	7.5	5.5	3.8	98 流紋岩質凝灰岩 (上部グリントフ)		
	247	"	F B 18	"	8.5	7.5	2.3	66 淡緑色凝灰岩 (奥羽山地上部グリントフ)		
	248	"	H I 15 住	"	7.2	6.8	4.3	116 白色凝灰岩 (奥羽山地中新世)		
180 図	249	15	G H 183p (E)	?	(19.5)	6.9	5.3	1,230 石英安山岩 (奥羽山地中新世)		
	250	16	E E 531p (B)	完	(14.1)	5.8	4.5	320 安山岩熔岩塊		
	251	16・17	E G 121p (A)	欠	15.0	12.0	8.7	1,890 石英安山岩質角礫岩 (奥羽山地中新世)		
	252	17	F D 593p (A)	"	15.7	10.0	8.8	880 石英安山岩質角礫岩 (奥羽山地中新世)		
	253	"	E H 21 住床面溝内	"	21.5	18.8	9.4	2,500 両輝石安山岩熔岩 (第四紀火山)		
	254	"	G G 03	"	19.4	18.3	7.4	2,600 安山岩熔岩塊		
	181 図	255	16・17	H I 15 住	完	27.4	23.9	11.1	4,500 安山岩熔岩塊	
	182 図	256	16	I B 62 グリッド	"	35.3	22.5	13.5	5,300 "	
		257	17	F C 152	"	19.5	11.2	2.6	550 凝灰岩質砂岩 (奥羽山地中新世)	
	183 図	258	16・17	E E 21 住	欠	17.0	16.8	9.5	1,138 凝灰岩質砂岩 (奥羽山地中新世)	
259		"	F G 21 住 P	完	18.2	16.2	8.2	2,800 石英安山岩質角礫岩		

図版	No	分類	出土地点	完/欠	計測値				石	材	備考
					最大長	最大幅	最大厚	重量			
184 図	260	18	EJ-15p (B) IV層	完	20.65 (19.1)	3.6	1.2	126.5	輝緑凝灰岩質千枚岩 (北上山地) 凝灰岩質千枚岩 粘板岩 千枚岩 (北上山地) 粘板岩 " ホルンフェルス化したスレート 粘板岩 緑色片岩 (北上山地)		
	261	"	GA21 住	欠		3.8	1.8	181.7			
	262	"	EJ 092 (A) IV層	"	(7.2)	3.6	1.0	34.6			
	263	"	EI 501p (A)	"	(5.6)	3.5	1.0	20.2			
	264	"	FI 18 大溝出土	"	(6.1)	3.3	1.0	22.75			
	265	"	"	"	(13.55)	4.1	1.5	155.1			
185 図	266	"	表土	"	(19.3)	4.4	2.0	257.2			
	267	"	GB 186p (D)	"	(16.4)	3.7	1.3	90.85			
	268	19	HI区pit	完	13.8	5.5	1.1	80.35			

第15表 石製品観察長

図	No	分類	出土地点	完/欠	計測値				石	材	備考
					最大長	最大幅	最大厚	重量			
186 図	269	A	HI 15 住床面	完	6.7	9.8	5.3	372.5	淡緑色砂質凝灰岩 石質凝灰岩 (奥羽山地) 安山岩溶岩塊 石質凝灰岩 硬玉 石質凝灰岩 (奥羽山地) 白色細粒凝灰岩 滑石 粘板岩・ホルンフェルス 硬質泥岩 (奥羽山地) 凝灰岩 (奥羽山地) 流紋岩質角礫凝灰岩 石質凝灰岩 (奥羽山地) 流紋岩質凝灰岩	石冠? 人面様石製品。柱穴状ビット出土。 新潟産か? 墓廣副葬品 GA 067, グリッド出土品との接合。 柱穴状ビット出土 柱穴状ビット出土 柱穴状ビット出土 柱穴状ビット出土	
	270	B	"	"	13.2	6.0	4.0	214.5			
	271	"	"	欠	10.8	9.9	3.8	(280.1)			
	187 図	272	C	GJ 535p (D) II層	完	5.6	5.3	1.4			36.5
		273	"	GF 561p (C)	"	4.8	2.2	0.9			17.2
	274	"	ED 151p (A) II層	欠	3.7	2.3	1.08	(11.2)			
	275	"	FC 56	完	1.9	1.85	0.5	1.4			
	276	"	GG 035p (E)	部欠	4.1	3.6	0.6	(12.8)			
	277	"	EJ 182p (A) I層	欠	5.15	1.7	0.58	(6.9)			
	278	"	FF 564p (D)	"	4.9	4.7	(1.2)	(26.35)			
279	"	GA 21 住	完	5.7	3.8	0.9	19.6				
280	"	FH 154p (D)	"	14.2	12.3	3.3	600.1				
281	"	EG 121p (A)	"	5.8	3.0	2.05	46.5				
282	"	FH 154p (D)	"	13.6	11.2	2.5	520.2				

〔Ⅲ〕平安時代の遺構と遺物

1 竪穴住居跡

F G 21住居跡 (第 188 図)

〔遺構確認面〕 表土下の砂質埴土(黄褐色)上面で検出、北東コーナー付近は攪乱を受けて消滅、西側約 $\frac{1}{2}$ は調査区外に伸びていた。

〔平面形〕 隅丸長方形のプランを呈するものと想定。

〔規模〕 南北長で約 3.5 m を測る。

〔堆積土〕 堆積土は基本的に3層から構成され、1層は黒褐色土を主体とし2層は褐色土、3層は黄褐色土がベースとなっている。いずれも層相は自然堆積で少量の粉状パミスが検出されている。

〔壁、床面〕 壁高は南壁で約20cm内外を測り一般に浅い。床面はほぼ平坦であるが貼床の痕跡は認められなかった。

〔柱穴〕 柱穴と想定できるものはP₁とP₂の2個である。

〔その他〕 周溝、カマド、煙道などの付帯施設は認められなかった。また遺構に共伴する遺物の発見もできなかった。

F I 21住居跡 (第 189 図、写真48)

〔遺構確認面〕 表土A群(腐植土)の下層B群(砂質埴土)の上面で検出された。

〔保存状態〕 カマド付近及び南壁付近に攪乱を受けている他は大きな破壊はみられない。

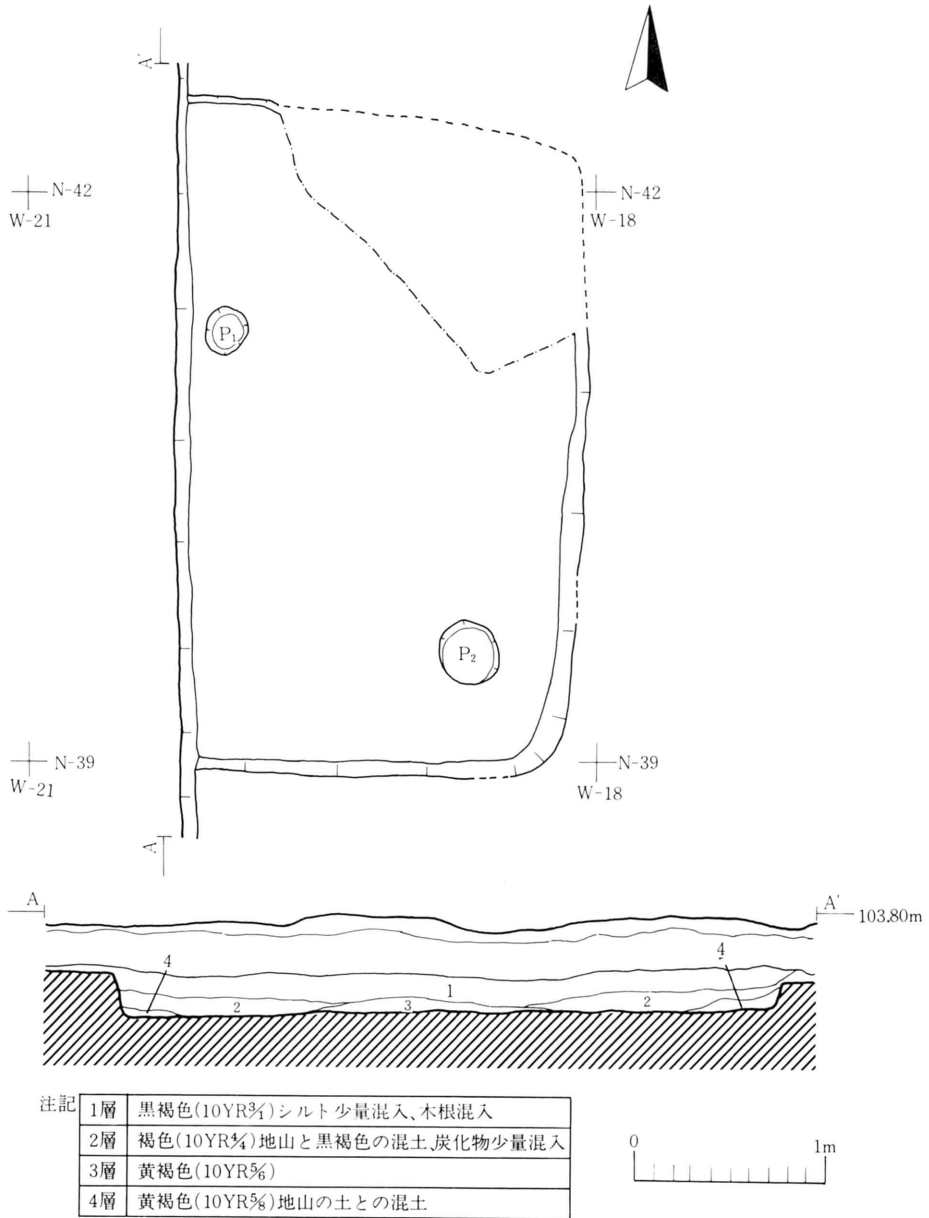
〔平面形、長軸方向〕 住居跡の西側約 $\frac{1}{2}$ 強が調査区外のため全容は不明である。検出部分からの想定では隅丸長方形を呈するものと思われる。

〔規模〕 南北長は約 4.5 m 内外を測るが東西は測定できず不明。

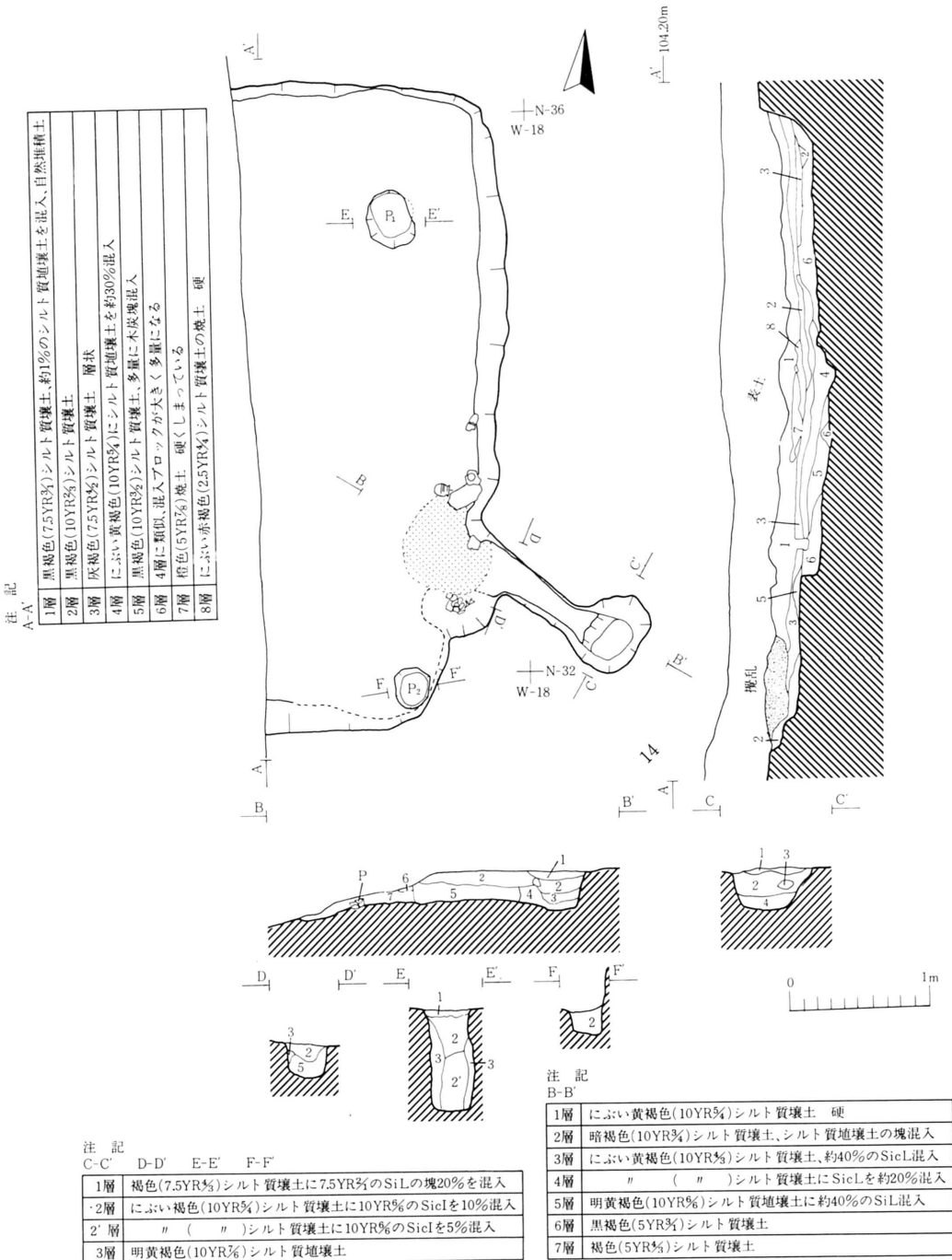
〔堆積土〕 埴土はほぼ6層に分層され、黒色の自然埋没土層中から少量の粉状パミスが検出されている。また7~8層は焼土層で橙もしくははぶい赤褐色の色調を帯び固くしまっている。

〔壁、床面〕 北壁と東壁は保存がよく、南壁は木根その他によって攪乱を受けている。北壁の残存壁高は約35cm内外を測りやや深い。傾斜角は垂線に対し20°の傾きをもって外傾する。床面の南側約1mは地山シルト上に構築され、それより北はさらに深く掘り込まれているため貼り床がなされていた。貼り床は黒色土と掘り返された地山シルトのブロックとの混合土によって形成され少量の平安時代の土器片を包含している。貼り床下の掘り込みは、貼り床面より深さ10cmで底面に至る。底面は硬いが平坦ではなく中央部に向けて緩く傾斜している。

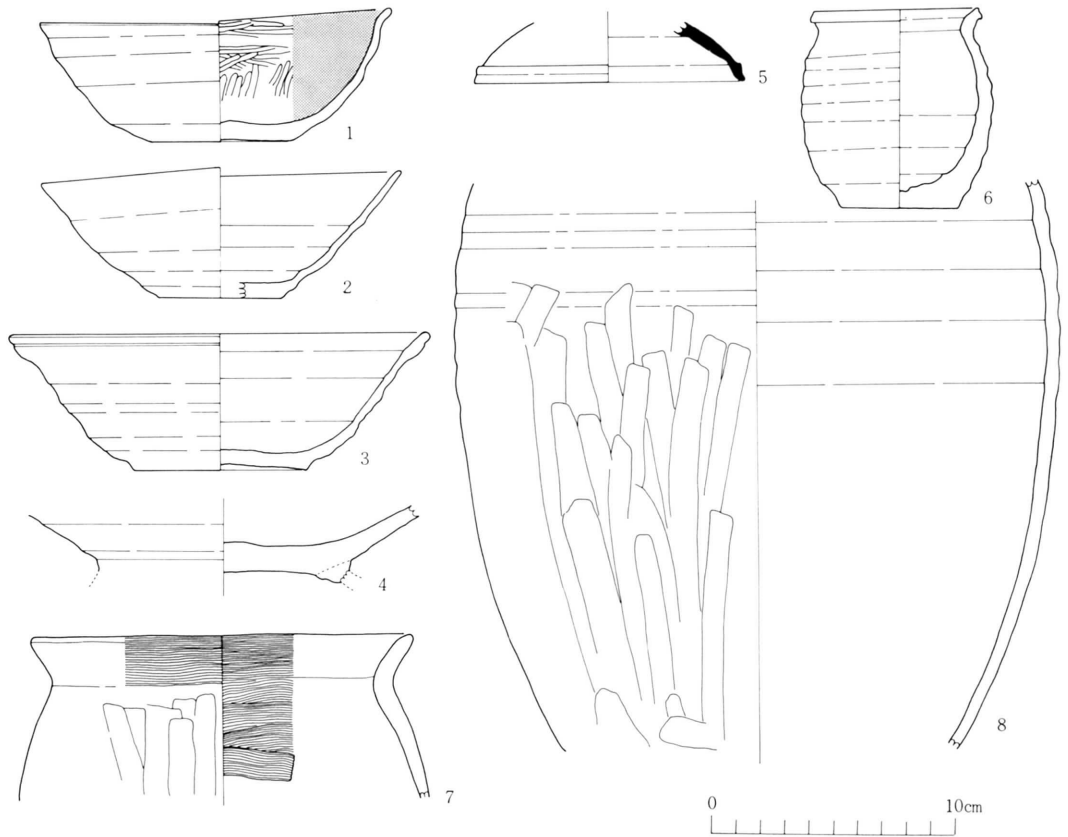
〔柱穴〕 柱穴は貼床上から1個、南端の攪乱部分から1個検出された。P₁は深さ70cmと深く



第188図 FG21住居跡平断面図



第189図 F121住居跡平衡断面図



第190図 F121住居跡出土土器実測図

中心部に「柱あたり」を残している。P₂は深さ25cmで前者に比べ約 $\frac{1}{3}$ と浅い。埋土の状況もP₁と異なるが配列と形状から柱穴と判断した。

〔カマド〕 カマド付近は木根による攪乱が著しく保存状態は良好と云えない。カマドは縄文期のピット上に構築されたものでピット埋土上に若干の黄白色シルトを固めカマドの袖を形成したものである。右袖には黄白色シルトによる袖は認められず、黒褐色のピット埋土上面で割石や、縄文土器などがつき固められた状態で出土した。この部分はあるいは袖として使用されたともみられる。煙道は南東方向に約1mのびており煙出しを伴っている。

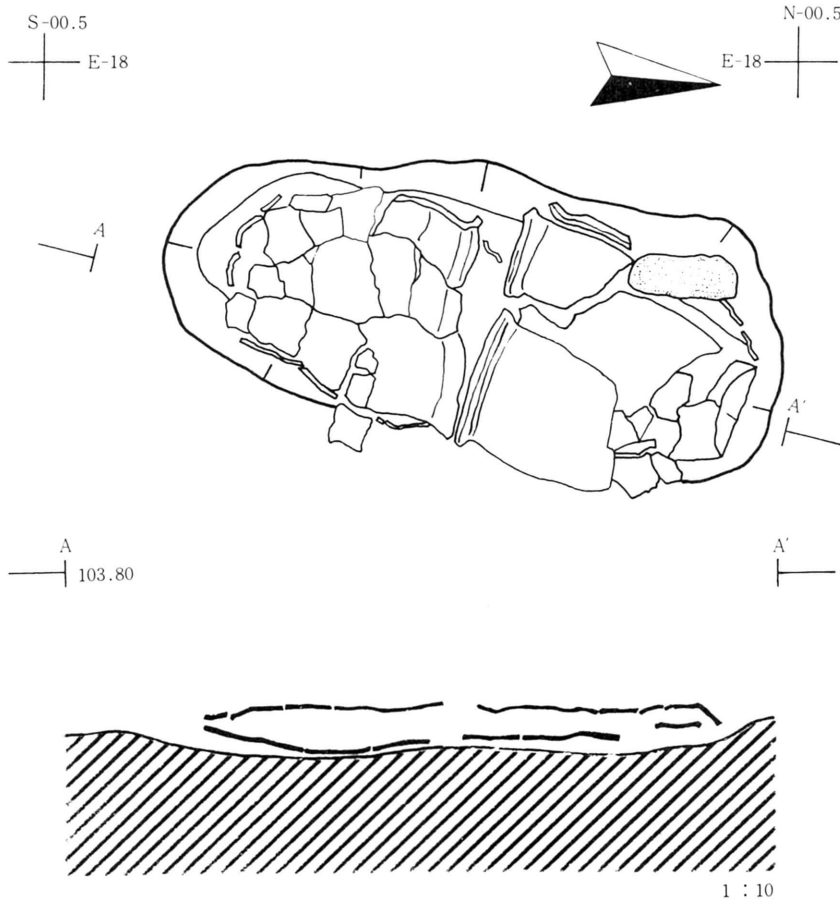
〔出土遺物〕 (第190図、写真49) 遺物は土器を主体とし他に若干のチップ、割石がある。土器は土師器、須恵器、赤焼き土器で器種は破片も含めた観察で、坏、甕類だけである。破片からみ

ると赤焼きの坏が多く土師器の坏は6点にとどまる。

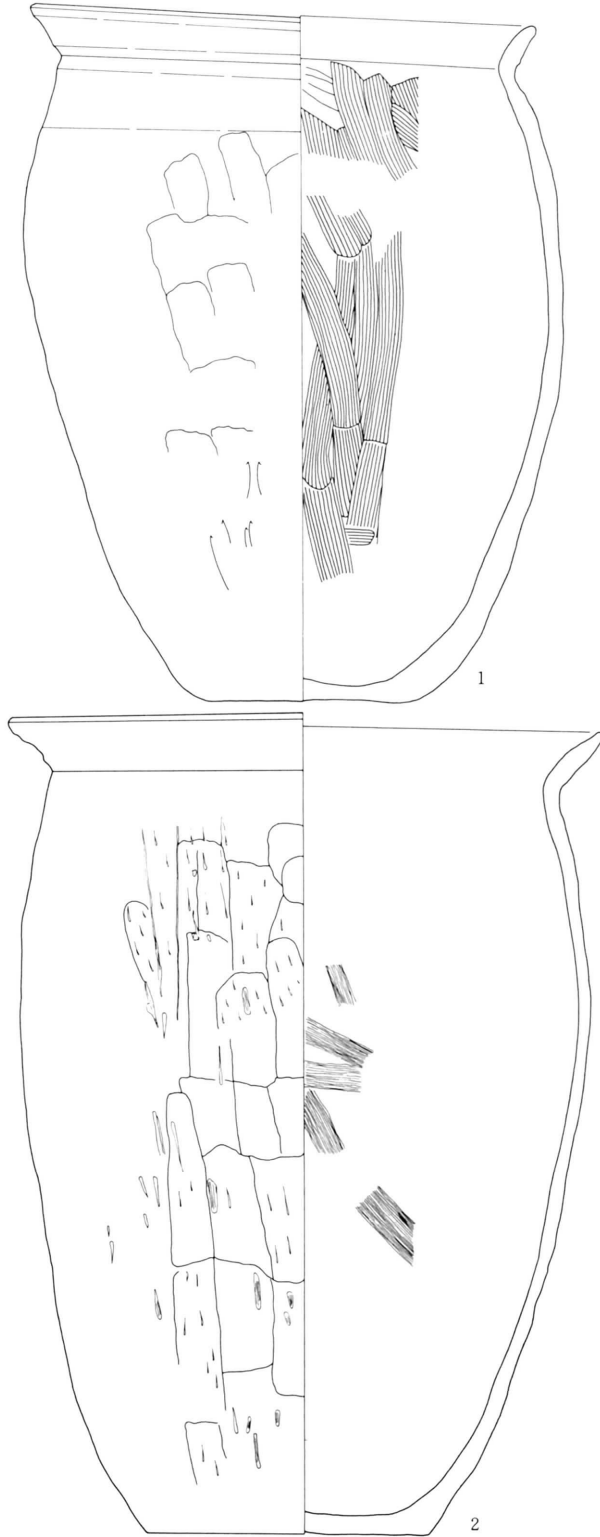
坏、1は土師器の内黒坏である。底部は回転糸切り無調整で口縁部に若干の歪みをもつ。底部から丸味をもって立ち上がり体中央部でやや強く張り出し、口縁部は外反する。調整は口縁部に横方向のヘラミガキを施し底部付近は放射状のヘラミガキに変わる。焼成はやや軟質で胎土に石英、細砂をわずかに混入する。2、3は赤焼き土器でロクロ成形になり底部は回転糸切りの切り離しである。調整は内外面ともにみられず、いずれも焼成はあまく脆弱である。色調は黄白色～橙色を呈している。4は赤焼きの高台坏盤の破片と思われる。成形にロクロを用い焼成は良好で硬い。また内面にロクロの回転痕を明瞭に残している。色調は暗褐色をおびている。5は須恵器の蓋の破片である。色調は青灰色を呈し硬質である。6、小形の土師器壺の完形品である。ロクロ成形で内外面への調整は全くない、出土地点はカマド左袖付近である。7、8は土師器の甕である。

2 甕棺墓 (第191図)

G J 68グリッド中に浅い小土壌を伴う土師器の甕二個体を検出した。土壌は上部を粗掘り時に



第191図 G J 68甕棺墓



第192図 甕実測図

1 : 3

削平されており、検出面からの深さは約4cmとなっている。規模は南北長約84cm、東西幅36cmを測り、平面形は不整長楕円形を呈する。長軸方向N-11°-Eをとる。土壌の壁はなだらかに傾斜し、底面はほぼ平坦だが中央部分（甕の口縁部分下）が幾分高まっている。二個体の甕はこの小土壌中に口縁部を接続させ、横倒しの状態で埋設されていた。二個体ともに土圧により押しつぶれた形で破損し、甕の内部には黒褐色土が混入していた。黒褐色土中には骨片等の混入物は発見されなかった。

埋設状況から見て、二個体の甕はいわゆる『合せ口甕棺』として使用されたもので、小土壌は甕棺を埋設するための掘り方と判断した。しかし、土壌の掘り込み面はすでに削平されており、埋設された甕棺の上方がどのような在り方をしたか（例えばマウンドを形成したか否かなど）は全く明らかでない。

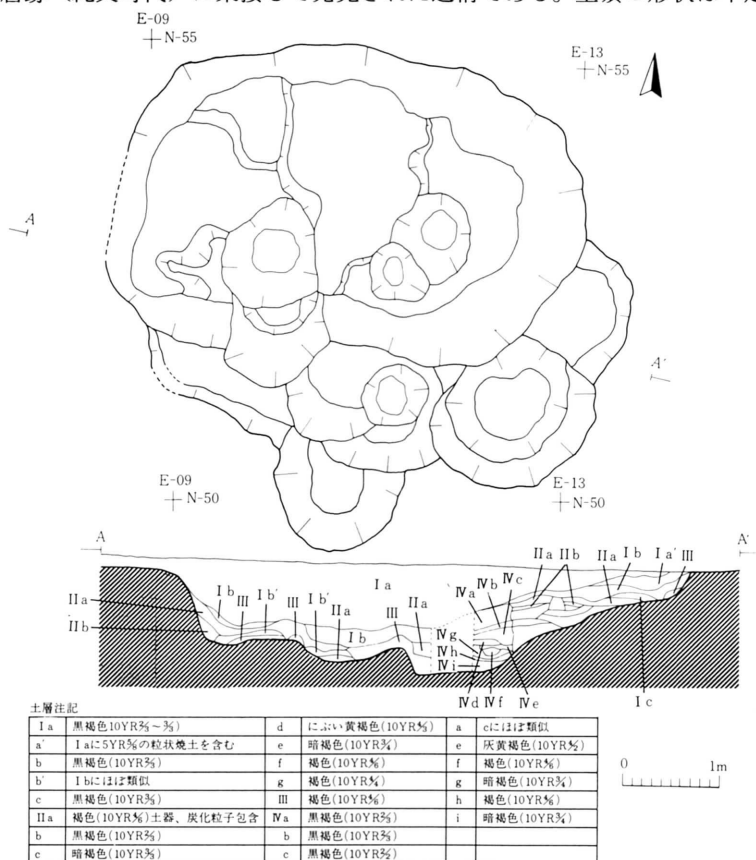
192図1は二個体の甕のう

ち南側に位置するもので、器高約29cm、口径22cm、胴部径23cm、底径8.7cmを測る。胴脹らみのした器形で最大径は胴部にある。口縁部は短かく外反し、口唇は丸む。粘土紐の巻き上げ後ロクロ整形を受け、その際頸部はロクロ痕が沈線状に入りこんでいる。体部外面は主として縦方向にヘラケズリされ、内面は縦、横、斜方向に粗いヘラナデが行われている。色調は白褐色を呈し、胎土中には石英等の礫細粒を含む。焼成は比較的良好である。体部外面には極く多量のカーボンが付着する。2は北側に位置する甕である。1よりやや大型で、器高約35cm、口径25cm、胴部径24cm、底径12cmを測る。器形は胴部が幾分張り出し、頸部で屈曲し外傾、口唇はやや上方を向く。1同様に成形は粘土紐巻き上げ後、ロクロナデを受けたもので、体部外面は縦方向（主として頸部から底部方向に向けて）のヘラケズリ、内面は不整方向のヘラナデが行われている。色調は明黄褐色を呈し、胎土中に多量の小石を混入、焼成は普通である。体部外面は一部にカーボンが付着している。

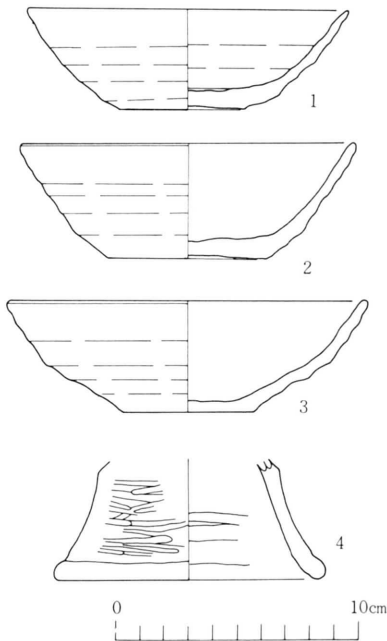
3 土 壌

F B 56土壌 (第 193 図、写真48)

F B 53住居跡(縄文時代)に東接して発見された遺構である。土壌の形状は不定形でピットの



第193図 FB56土壌平断面図



第194図 FB56土壇出土土器実測図

処理も施こされない。色調は褐色乃至赤褐色を呈している。4は高台付坏の高台部の破片である。成形にロクロを用い、器形は脚高が高く「ハ」の字状に開脚し脚部端で外方にふくらみをもたせている。調整は内外面とも行われ細かいヘラミガキが横方向になされている。色調は黒褐色で部分的にカーボンの付着が認められる。

4 土塁、溝

E J 21土塁、F B 21大溝 (第196図、図版)

本遺構は調査区の北辺付近を南西～北東方向に走る土塁と大溝である。

土塁 土塁は東西両端が先細りの形状を呈するが中央部での計測では下巾約3m、高さ1m内外を測る。この土塁は縄文時代から平安時代の遺構を広く覆い、黒色土層(10YR $\frac{1}{2}$)の上に地山の土を主体とする黒褐色～黄褐色系の土を幾枚か積み上げて構築したものである。層相を観察すると南から北へ傾斜する様子がみられる。また土塁の構築に当り版築はみられなかった。

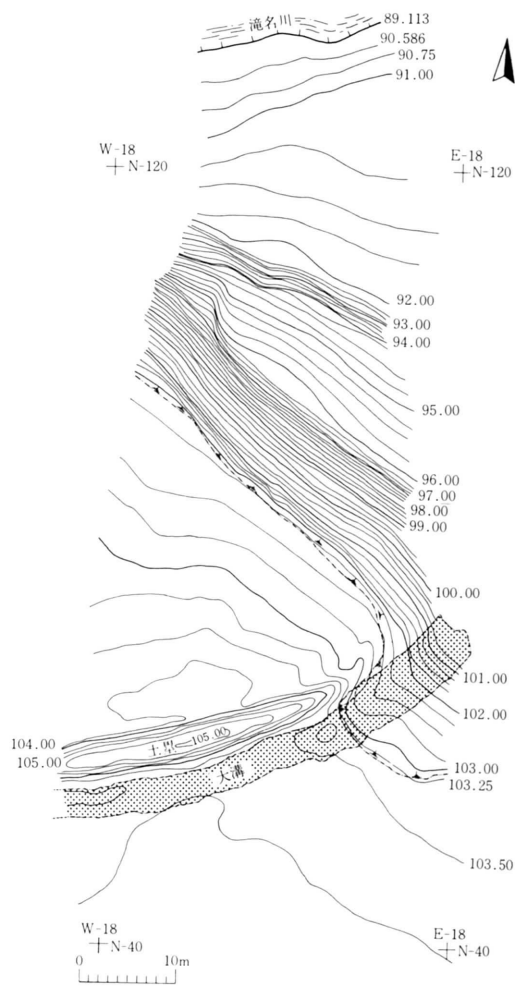
大溝 土塁の南側に平行する形で溝遺構が検出された。遺構確認面は表土層の下、黄褐色の地山面である。遺構は検出面上で上巾3.5m内外、深さ1～2m、下巾1.5m内外を測る。また断面は逆台形状を呈し、ほぼ土塁の南辺に沿って南西から北東方向に伸びている。西側は調査区外のため全容はとらえられないが検出された全長は約45mを測る。一方堆積土は大きく3層に分層され、これらは更に細分される。また層相は自然堆積である。土層断面の観察から土塁と大溝は

集合体の感を呈している。また本土壇はその下に埋没する縄文期のフラスコ状ピットをこわしていた。土壇自体の時期は遺構に直接かかわる資料に欠け年代決定を困難にしている。ただ若干の土師器坏及び赤焼き土器の破片をもってすると広く平安時代後半期かそれに若干遅れる時期と考えて大過ないものと思われる。一方土壇の性格については不明である。今後他の遺跡の類例を待って検討する必要がある。

〔出土遺物〕 (第194図)

土器片は土師器の坏及び赤焼き土器の破片が主体である。

1～3は赤焼き土器の坏でいずれもロクロ成形になり底部は回転糸切りの切り離しである。器内外面とも調整はなくまた内黒



第195図 西田北部地区地形図

同時期の遺構であり、土塁の積土が大溝から掘り上げられた土であることが確認された。土塁の積土や大溝の埋土中からは縄文土器片やフレーク、土師器片やフレーク、土師器片などが少量出土しているがこれらは両遺構に直接かかわる遺物ではない。

小結 土塁、大溝遺構は「西田館」に伴う遺構である。台地北端部は西辺と北辺を滝名川が洗い、東部は滝名川の沖積平地を利用した水田となっている。滝名川と遺跡の比高は11～12mを測り急崖をなしている。大溝は本遺跡の北辺を区画することによって防御施設となる。また、断面は「諸薬研」の形状に近く保存度も良好であった。土塁と大溝の境界線上に巾約30cm内外の「犬走り」が付帯していた。以前から大溝を「空掘」と想定した。土塁の北側はほぼ平坦な平場を形成し、西側に至り一段の段差をみせている。つまりこれは郭に相当する平場ともみられる。

遺構が小規模であることと確実に共伴する遺物のなかったこと、また付随する他の遺構が発見できなかったことなどから推測し一時的な防御施設、つまり陣場の機能をもった館と想定されそうである。本遺構の北西方向には紫波町最古の館と云われる「善知鳥館」が滝名川を隔てて位置している。「西田館」は「善知鳥館」と何らかのかかわりをもつのではないかと考えられるが即断は避けたい。

5 まとめ

北部地区から2棟の平安時代の竪穴住居跡を発見した。以下これら住居跡遺構と出土遺物について若干の考察とまとめを行う。

〔遺構〕

両住居跡のプランは隅丸長方形を呈すものと思われる。特にF G 21住にあっては西半分が未調査、さらに北東コーナー付近に大きな攪乱を受け全容を把握できずあくまで推測に過ぎない。一方F I 21住も西側は調査区外に伸びて不明である。埋土はいずれも自然堆積により薄層の粉状パミスを混入している。柱穴は夫々2本ずつ確認されており、主柱穴が4個であることを想定させる。次に柱穴位置はF G 21住の場合対角線に位置するものだけが残りやや中央寄りの感を受ける。F I 21住では東壁寄りの2個が検出され南東陽のものはコーナーの壁に喰い込む形で構築され、北東隅のものはコーナーの対角線上にのる形で設けられていた。

カマドはF I 21住のみで東壁の南コーナー付近に構築されていた。ここで注意をひくのは壁に対し煙道が極端に南に傾くことである。南部地区のT H 68住ではほぼ壁に垂直に伸びていたことと対比し様相を異にするものである。床面の構築に当り貼床を行ったものは4住居跡のうち本遺構だけにみられるもので層厚は北に薄く南に厚い傾向をみせている。ただ縄文時代のピットの自然埋没の上に住居跡の構築を行ったためピット上面への貼床の必要性に迫られたものとも考えられる。以上の事実をもとに本遺構は次のように云えるものと思われる。住居跡は西田の残丘西辺部にはほぼ南北線を結ぶ形で構築され、プラン、柱穴数と床面上の位置、カマド位置等から見る限りでは本地域内へ土器製作技法としてのロクロの定着期に該当するものと思われる。本地区内、または県内での類例は年次を追って増加の傾向にあり、これらの遺構例をもってより確かな時期決定がなされるものと思われる。

〔出土遺物〕

遺物は土器類が主体で土師器、須恵器、赤焼き土器等である。

坏は全てロクロ成形で底部の二次調整はいずれもみられない。土師器は内面のみへラミガキ調整が行われている。赤焼き土器はロクロ成形だけで他の一切の調整及び黒色処理は認められない。これを破片層でみると赤焼き土器が最高で以下須恵器、土師器の順となる。これは高橋信雄氏が指摘するロクロ使用土師器の第二段階に相当するものである。

一方小片でただ1点の出土をみた須恵器の蓋がある。本遺跡の中で蓋の出土はこの住居跡だけで貴重な資料と云える。これは土師器生産を上回る須恵器の生産を示唆しているものと思われ律令体制に支えられた須恵器の地方窯の隆盛を証明するものと思われる。

土器破片数

F I 21住居跡

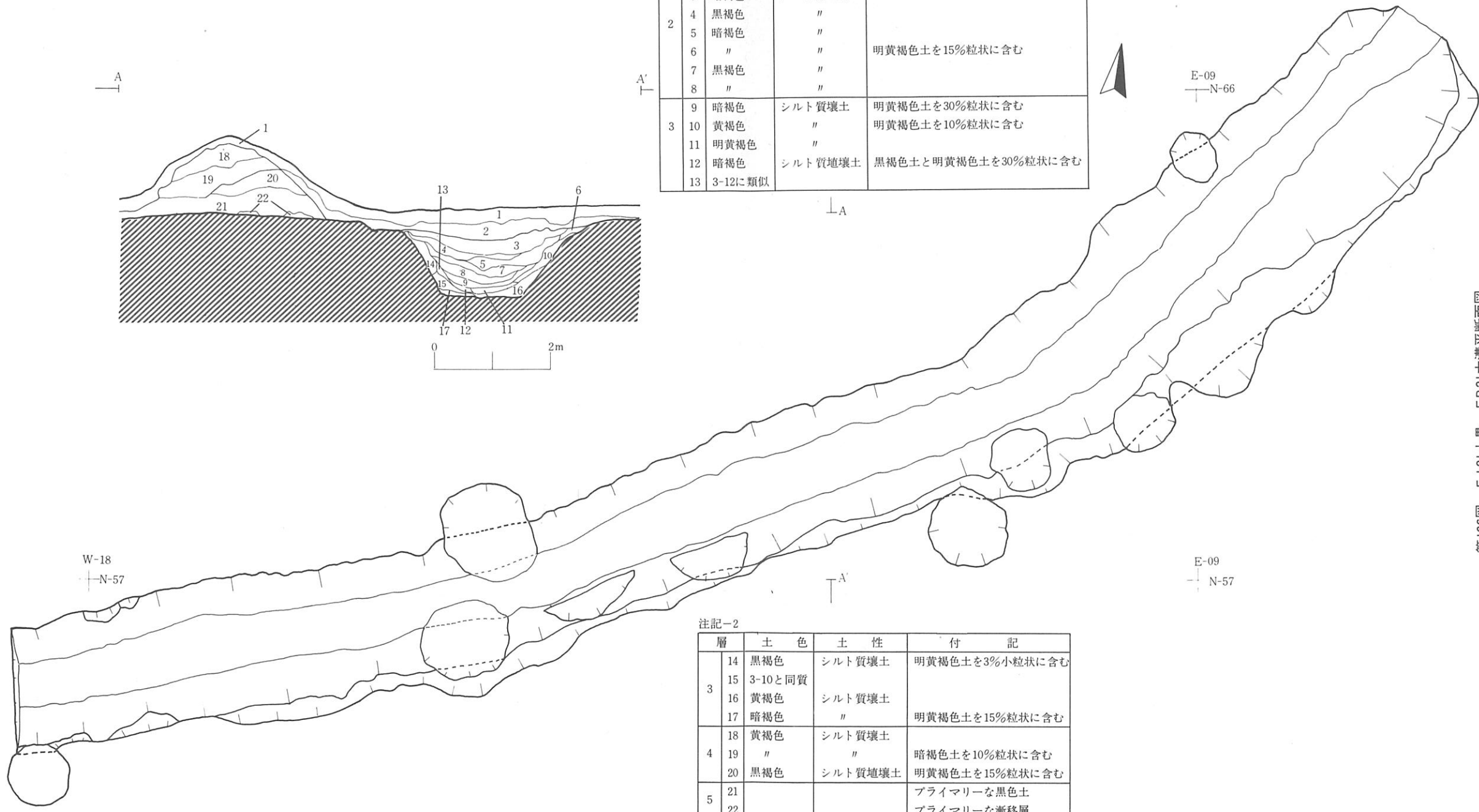
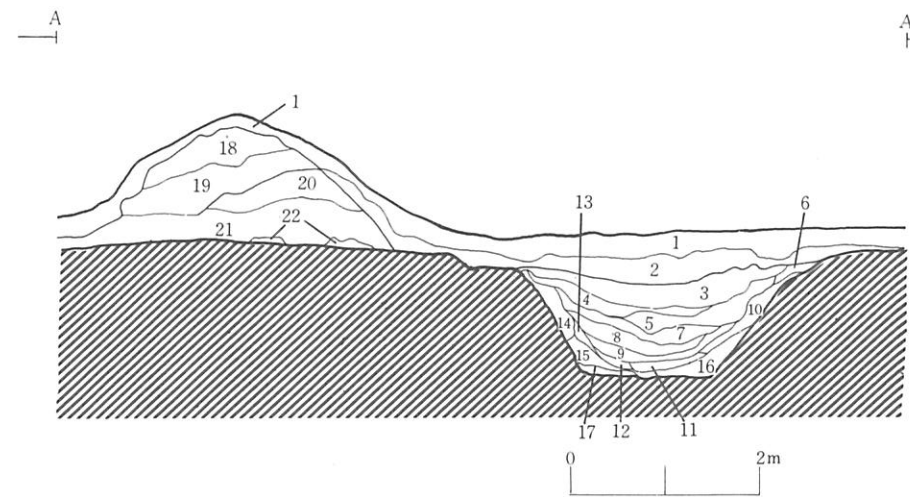
種類	器種	破片数
土師器	坏	6
	甕(小形)	1
	甕(大形)	8
須恵器	坏	20
	甕(大形)	1
赤焼き土器	坏	65

甕は小形と大形に分けられるがいずれも土師器でロクロに成形のもの、巻き上げ技法によるものなどがあり古手のものは見当らない。他に須恵器の大形甕の破片(胴部付近)が1点出土している。

以上の遺物から本遺構の時期はロクロ技法の定着から赤焼き土器の量産体制の時期に位置づけられほぼ9世紀後葉から10世紀代前葉に所属する遺構と考えられる。

注記-1

層	土色	土性	付記
1	1 褐色		盛土が表土化したもの
	2 暗褐色	シルト質埴土	明黄褐色の細粒含む
2	3 暗褐色	シルト質埴土	明黄褐色土を15%粒状に含む
	4 黒褐色	"	
	5 暗褐色	"	
	6 "	"	
	7 黒褐色	"	
	8 "	"	
3	9 暗褐色	シルト質埴土	明黄褐色土を30%粒状に含む
	10 黄褐色	"	明黄褐色土を10%粒状に含む
	11 明黄褐色	"	
	12 暗褐色	シルト質埴土	黒褐色土と明黄褐色土を30%粒状に含む
	13 3-12に類似		



注記-2

層	土色	土性	付記
3	14 黒褐色	シルト質埴土	明黄褐色土を3%小粒状に含む
	15 3-10と同質		
	16 黄褐色	シルト質埴土	
	17 暗褐色	"	明黄褐色土を15%粒状に含む
4	18 黄褐色	シルト質埴土	暗褐色土を10%粒状に含む
	19 "	"	
5	20 黒褐色	シルト質埴土	明黄褐色土を15%粒状に含む
	21		プライマリーな黒色土
	22		プライマリーな漸移層

第196図 E J 21土塁 FB21大溝平面断面図

取付道路（町道西田線）地区

新幹線西田ルートのはぼ中央、新幹線ルートに直交するかたちで東西に横断する幅7mの道路（町道西田線）の取付け計画に伴って、その用地内の調査を北側の集落跡の調査に伴行して実施した。この道路用地は杉と雑木の混交林であり、北側の縄文集落地とは距離的に離れているので重機を導入して抜根、表土の除去を行った。

その結果堅穴状遺構8基、溝状土壙1基が検出された。

1 小堅穴状遺構

K D 36ピット—I b 類—

開口部径約80cm、底部径約50cmの円形プランを持ち、深さは約40cmを測る。壁は底部より開口部に向けて直線的に立ち上がり、逆台形の断面を持つ。底面は平坦で、小穴を有さないものである（I b 類）。遺物の出土は見られない。

K E 45ピット—I b 類—

開口部径約150cm、底部径70~80cmのほぼ円形プランを呈し、深さは約70cmを測る。壁は底部より開口部に向けて開き気味に直線的に立ち上がり、逆台形の断面を呈する。埋土は5層に大別され、下層は壁の崩落土を含む混土層で、若干の礫の混入も見られる。遺物は皆無。

K J 48ピット—I b 類—

開口部径約130cm、底部径約90cmの円形プランを持ち、深さは約70cmを測る。壁は底部より開口部に向けてやや開き気味に直線的に立ち上がり、逆台形の断面を呈する。埋土は3層に大別され自然堆積を示す。遺物の出土は見られない。

K E 30ピット—I a 類—

開口部径約130cm、底部径約80cmの円形のプランを持ち、深さは約100cmを測る。底面のはぼ中央に径約15cm、深さ20cm程の小穴を持つ。壁は底部より開口部に向けてやや開き気味に直線的に立ち上がり、逆台形の断面を呈する。埋土は自然堆積の様相を示し、遺物の出土ない。

K G 48ピット—I a 類—

開口部径約120cm、底部径約80cmの円形のプランを呈し、深さは約80cmを測る。底面には径約15cm、深さ10cm程の小穴を持つ。壁は底部より開口部に向けてやや開き気味に直線的に立ち上がり、逆台形の断面を呈する。埋土の大半は自然堆積の様相を呈するが、上層（1・2層）には炭化物粒、焼土がかなり混入しており、針型土器が底部を上を斜位の形で検出された。土器ほかかなりの加熱、風化を受け、著しく脆弱化していた。ほぼ完形と思われるが、極めて脆く復原、実測

— 西田遺跡 —

は不可能であったが、器形の特徴より第Ⅱ群Ⅰa類土器に至る（前項『北部地区〔Ⅱ〕出土遺物』の項参照）。これらのことから上層（1・2層）は廃棄物を含む人為的堆積層の可能性が考えられる。

K H 39ピット—Ⅰa類—

開口部径約 170 cm、底部径約 110 cm、深さは約 110 cmを測る。底面のほぼ中央には径約20 cm、深さ30 cm程の小穴をもつ。壁は底部より開口部に向け½程まではほぼ垂直に立ち上がり、以後は約 250 の角度で開口部に至る。埋土は自然堆積を示すが上部は木根の損乱が著しい。置物は皆無。

K H 48ピット—Ⅰa類—

開口部径約 140 × 110 cm、底部径約90 × 80 cmのやや楕円形のプランを呈し、深さは約70 cmを測る。底面には径約20 cm、深さ15 cm程の小穴をもつ。壁は底部より開き気味に直線立ち上がる。断面は逆台円形を呈する。遺物の出土はない。

K I 45ピット—Ⅱb類—

口径約 120 × 100 cmの不整の円形を呈し、深さは約30 cmを測る。壁はほぼ垂直に立つ。遺物は皆無。

2 溝状土壙

K F 36土壙

長軸約 320 cm、短軸約60 cmの長楕円形の平面プランを呈し、深さは約 130 cmを測る。底面は短軸約20 cm弱と狭まるが、大概平坦である。断面形状は「V」字状を呈する溝状土壙で、長幅方向はN-69°-Eをとる。埋土は総じて褐色味を帯びた粘土質シルトで構成され、遺物の出土は見られない。

埋土註記一覧表

K E 45 ピット

	層No.	土 色	土 性	そ の 他
	1			木根の攪乱
第1層	2	褐色 (7.5 Y R 4/4)	シルト	
第2層	3	暗褐色 (7.5 Y R 3/4)	〃	炭化粒若干含む
第3層	4	褐色 (7.5 Y R 4/6)	〃	炭化粒・焼土粒若干含む。明褐色土の小塊若干混入
第4層	5	〃	〃	炭化粒含む。明褐色土の混入No.4より多い
〃	6	明褐色 (7.5 Y R 5/8)	〃	ブロック
第5層	7	黄褐色 (10 Y R 5/8)	〃	明黄褐色土の小塊を若干混入

K J 48 ピット

第1層	1	褐色 (7.5 Y R 4/6)	シルト	
第2層	2	暗褐色 (7.5 Y R 3/4)	〃	炭化物若干含む
〃	3	〃	〃	炭化粒・焼土粒若干含む
〃	4	明褐色 (7.5 Y R 5/6)	〃	暗褐色土の小塊若干混入
第3層	5	暗褐色 (7.5 Y R 3/3)	〃	炭化粒若干含む。明黄褐色土の小塊を若干混入

KE 30 ビット

	層No	土 色	土 性	そ の 他
第1層	1	褐色 (7.5 YR 4/4)	シルト	その他
第2層	2	" (7.5 YR 4/6)	"	
"	3	"	"	明褐色土の小塊混入
第3層	4	明褐色 (7.5 YR 5/8)	"	炭化粒若干含む、褐色土の小塊かなり混入
第4層	5	明黄褐色 (10 YR 7/6)	粘土質シルト	褐色の小塊を混入
第5層	6		"	黄褐色土と淡褐色のブロック状混合土
第6層	7		"	褐色土・明黄褐色土としぶい橙色の混合土
	8		"	木根の攪乱

KG 48 ビット

第1層	1	黄褐色 (10 YR 5/6)	シルト	木根の攪乱が著しい
第2層	2	明褐色 (7.5 YR 5/6)	"	炭化物・焼土塊状にかなり含む
"	3	"	"	炭化粒かなり含む
第3層	4	褐色 (7.5 YR 4/6)	"	橙色土の小塊若干混入
第4層	5	"	"	
第5層	6	明褐色 (7.5 YR 5/8)	"	褐色土の小塊若干混入
第6層	7	明黄褐色 (10 YR 8/6)	粘土質シルト	暗褐色土の粒子含む
第7層	8		"	橙色土・褐色土の混合土
第8層	9		"	よごれ土

KH 39 ビット

第1層	1			木根の攪乱
第2層	2	褐色 (7.5 YR 4/4)	シルト	
第3層	3	" (7.5 YR 4/6)	"	炭化粒・焼土粒若干含む
第4層	4	明褐色 (7.5 YR 5/8)	"	橙色土の粒子若干混入、炭化粒若干含む
第5層	5	橙色 (7.5 YR 6/8)	粘土質シルト	明黄褐色土の粒子若干混入
第6層	6	明黄褐色 (10 YR 7/6)	"	橙色土の小塊を若干混入
第7層	7		"	暗褐色土・明黄褐色土の混合土
第8層	8	褐色 (10 YR 4/6)	"	暗褐色土・にぶい黄褐色土の混合土

KH 48 ビット

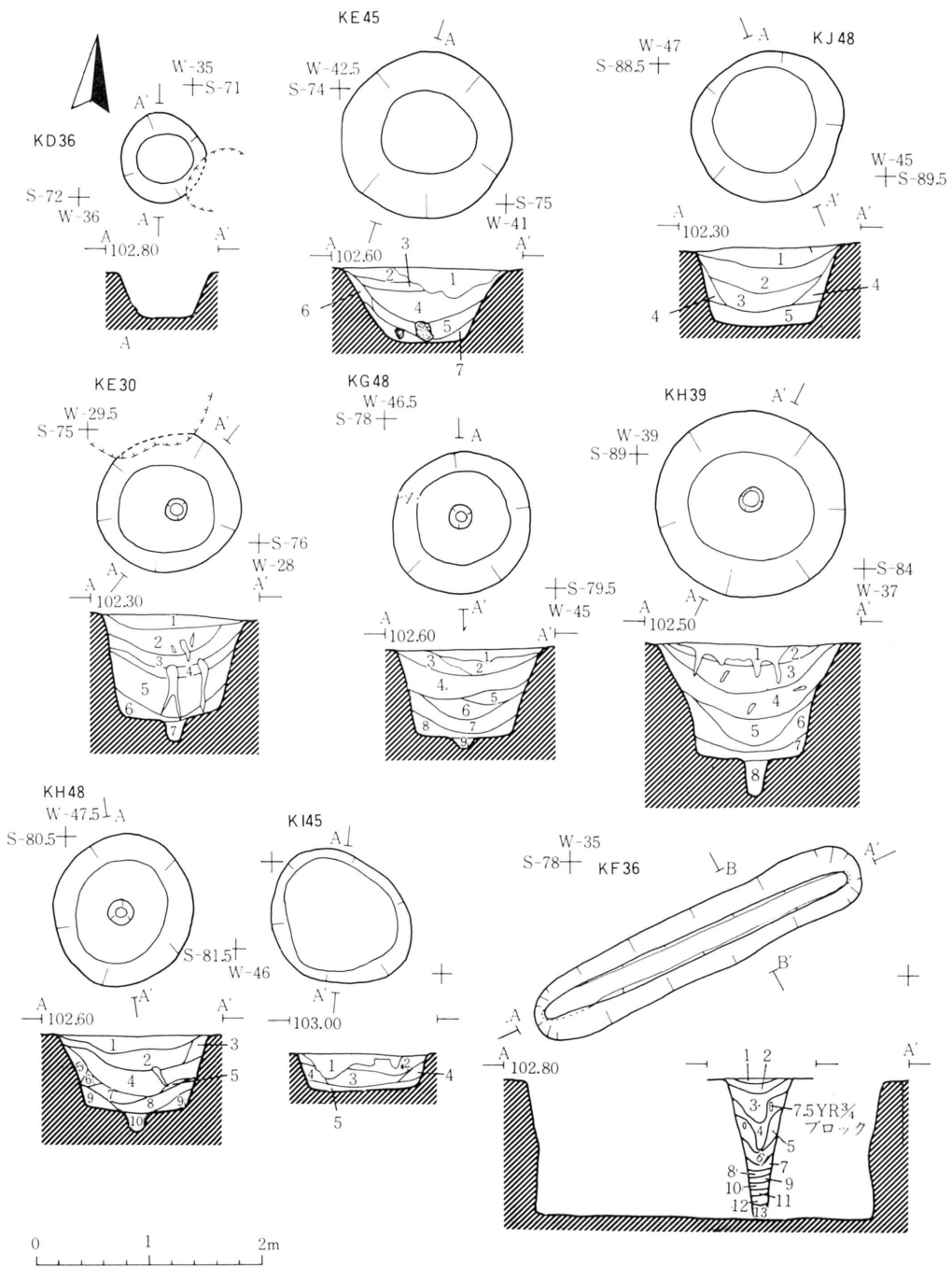
第1層	1	褐色 (7.5 YR 4/4)	シルト	炭化粒・焼土粒若干含む
第2層	2	明褐色 (7.5 YR 5/8)	"	"
"	3	"	"	黄褐色土の小塊を混入したブロック
第3層	4	褐色 (7.5 YR 4/6)	"	炭化粒を若干含む
"	5	"	"	黄褐色土の粒子を若干混入
"	6	"	"	黄褐色土の小塊を混入したブロック
"	7	黄褐色 (7.5 YR 7/8)	"	褐色土の小塊を混入したブロック
第4層	8	暗褐色 (7.5 YR 3/4)	粘土質シルト	黄褐色土の粒子を若干混入、炭化粒若干含む
"	9	明黄褐色 (10 YR 4/6)	"	褐色土の小塊との混合土
第5層	10	褐色 (10 YR 4/6)	"	暗褐色土・にぶい黄褐色土の混合土

KI 45 ビット

	1			木根の攪乱
	2	褐色 (7.5 YR 4/6)	シルト	
	3	"	"	橙色土の粒子若干混入
	4	橙色 (7.5 YR 6/8)	"	褐色土の粒子若干混入
	5	褐色 (7.5 YR 4/6)	"	褐色土の小塊を若干混入

KF 36 ビット

	1	暗褐色 (7.5 YR 3/4)		
	2	褐色 (7.5 YR 4/4)		
	3	" (7.5 YR 4/6)		明褐色土が粒状に若干混入している。炭化粒若干含む
	4	" "		3より明褐色土の混入多い。炭化粒若干含む
	5	明黄褐色 (7.5 YR 5/6)		褐色土が粒状に若干混入している。
	6	明黄褐色 (10 YR 8/6)		褐色土の小ブロックが混入している
	7	黄褐色 (10 YR 8/6)		明褐色土の小ブロックが混入している
	8			明褐色土・褐色土・明黄褐色土の混入土
	9			褐色土と明黄褐色土の混入土
	10			7に同じ
	11			9に同じ
	12			7に同じ
	13			汚れ土で、ベトベトする。



第197図 竪穴状遺構(その他ピット類)、溝状遺構平断面図

V 遺構とその出土遺物に関する
問題点（北部地区）

〔1〕 住居跡の構造

本遺跡では35棟の住居跡が検出されているが、それらは一様なものではなく個々の構成要素からみればかなりの相違点が認められる。以下、平面形・規模・方向・周溝・床面・柱穴・炉などの構成要素の検討を通して住居跡の構造を考えてみたい。

〔平面形〕 各住居跡の平面形には、円形を基調とするものと方形を基調とするものがある。円形を基調とするものは、円形に近いものと楕円形を呈するものとに大別され、後者は一般的な楕円形のものとは長楕円形（小判形）のものとは細分される。方形を基調とするものは、長方形を基本とするが隅丸長方形に近い形を呈するもの、長辺がかなり長くなる長方形を呈するもの、一般的な長方形を呈するもの、正方形に近い長方形を呈するものなどに分けられる。

平面形	円形基調	円形…………… F J 18 住居跡		
		楕円形 <table border="0" style="margin-left: 20px;"> <tr> <td>(長)楕円形…………… EH15・FB53-2・HG50・(HH21-1) 住居跡</td> </tr> <tr> <td>楕円形…………… EE21・EI21-1・FD62・HI15 住居跡</td> </tr> <tr> <td>不明…………… EG21・EI15・(FC12)・FC21・FE21 住居跡</td> </tr> </table>	(長)楕円形…………… EH15・FB53-2・HG50・(HH21-1) 住居跡	楕円形…………… EE21・EI21-1・FD62・HI15 住居跡
	(長)楕円形…………… EH15・FB53-2・HG50・(HH21-1) 住居跡			
	楕円形…………… EE21・EI21-1・FD62・HI15 住居跡			
不明…………… EG21・EI15・(FC12)・FC21・FE21 住居跡				
方形基調-長方形	隅丸長方形… FB53-1・GH18・GI18 住居跡			
	(長)長方形…………… (HH06)・(HG06) 住居跡			
	長方形…………… EH21・EJ21・FE18・(FG21)・GF21-1 住居跡			
不明…………… GA21 住居跡				
不明…………… EE12・EF03・EI21-2・GF21-2・HF56・HF06・HG09・HH21-2 住居跡				

〔規模〕 住居跡の平面プランを完全に復原できる住居はごく少数に限られるため、その規模が明確に把握されるものは数例にすぎない。以下、推定で計測できたものを含め16棟の住居跡の規模について検討する。

単純に住居内の床面積のみを問題とすれば、次の7類に分けられる。

- | | |
|--------------------|--------------------|
| a 類：住居跡内面積が57㎡±のもの | e 類：住居跡内面積が12㎡±のもの |
| b 類：住居跡内面積が27㎡±のもの | f 類：住居跡内面積が8㎡±のもの |
| c 類：住居跡内面積が22㎡±のもの | g 類：住居跡内面積が6㎡±のもの |
| d 類：住居跡内面積が17㎡±のもの | |

こうした床面積は、住居跡の平面形や住居跡の対称軸（長軸・短軸）の長さなどと有機的な関連をもつものであり、平面形との対応関係から規模のあり方をみてる。

平面形が楕円形を呈するもの（長軸長と短軸長との比が1：2前後のもの）には a・b・g 類があり、とくに a 類とした大規模な住居跡が含まれる。また、長楕円形を呈するもの（長軸長

と短軸長との比が1：4前後のもの)にはb・c・f類があり、円形のものにはf類に限られる。以上の円形を基調とする各住居跡の規模は、大規模なもの和小規模なものに分散する傾向が窺え、とくに、方形を基調とする住居にはみられない大規模なものが眼につく。平面形が長方形を呈するものにはd・e類があり、隅丸長方形のものにはe・f類がある。方形を基調とする住居跡の規模は、d類とした中規模のものに集中しており、極端なばらつきは認められない。

住居跡の規模

住居跡	平面形	規 模		
		長 軸 長	短 軸 長	面 積 (分類記号)
EE21	楕円形	9.90 m	7.54 m	57.6 m ² (a類)
HI15	〃	6.38	5.38	27.6 (b類)
FD62	〃	3.21	2.27	6.3 (g類)
EI21-1	〃	3.07	2.67	6.2 (g類)
FB53-2	(短)楕円形	6.69	4.93	26.2 (b類)
EH15	〃	6.46	4.41	21.8 (c類)
HG50	〃	4.11	2.72	8.4 (f類)
FJ18	円形	3.40	3.37	8.2 (f類)
GA21	(短)長方形	5.16	4.69	22.4 (c類)
HF18	長方形	5.82	3.87	18.8 (d類)
FE18	〃	5.23	3.21	16.8 (d類)
EJ21	〃	4.45	3.67	15.3 (d類)
HE15	〃	4.72	3.83	15.2 (d類)
GF21-1	〃	4.41	3.21	13.3 (e類)
FB53-1	隅丸長方形	4.51	3.30	11.9 (e類)
GH18	〃	3.42	2.71	8.3 (f類)

〔方向〕 住居跡における主軸方位は住居の長軸方向をもって代用したが、この長軸方向にはかなりのばらつきがみられ、完全に一致するものは皆無といってよい。しかし、住居の長軸方向ないし短軸方向を選択するに際しては、集落の中央、いわば墓域の中心部に対して強い規制が働いていたことが窺われ、集落の中心部の関係で以下のように分類した。

A類：住居跡の長軸方向、ないしは短軸方向が集落の中央に対して放射状に向くもの

B類：住居跡の長軸方向、ないしは短軸方向が集落の中央に対し不規則な方向に向くもの
 数量的な関係から両者を比較すればA類が圧倒的に多くB類は1例を数えるにすぎない。

- 住居跡の軸方向
- A類**：EE21・EG21・EH21・EH15・EI15・EI21-1・EJ21・FJ18・FB53-2・FC12・FD62・FE18・FG21・GA21・GF21-1・(GF21-2)・GI18・HG50・HI15・(HF06)・(HH06)・(HG06)・(HG09)・HE15・HF18・(HH21-1)・(HH21-2)住居跡
 - B類**：GH18住居跡
 - 不明：EE12・EF03・EI21-2・FC21・FE21・HF56住居跡

— 西 田 遺 跡 —

〔周溝〕 住居跡には周溝をもつものともたないものがある。前者は数量的に少く10棟の住居跡で検出されているにすぎない。しかも、周溝を伴う住居跡にしてもごく一部にしか検出されなかったものも含まれており、全周するものはあまりみられない。周溝の断面は浅い「U」字形を呈するもので、その機能を示す痕跡は見当らなかった。なお、住居跡における周溝の有無と平面プランとの対応関係は認められない。

周溝をもつ 住居跡 (10棟)	{	全周するもの……………GH18・HE15住居跡
		ほぼ全周するもの……………EE21・EG21・EH21・HF18住居跡
		一部分で検出されたもの……………EJ21・FC12住居跡
		ごく一部分で検出されたもの……………HI15・HH06住居跡

〔床面〕 床面下に掘り方をもつ住居跡は1例も検出されておらず、掘り方底面と床面とが一致するものに限られる。その床面は地山をそのまま床とするもので、EI21-2住居跡のみが腐食土中(Ic層上面?)に床面をもつ。

〔柱穴〕 主柱穴を構成するピット数は4～8個まで各種みられ多様性に富んでいるものの、そのなかでは配置のあり方に一定の規則性が看取されうるものである。以下、柱穴の数とその配置形を中心に分類を試みる。

I類：柱穴が8個のもの—8棟—

I a 類：住居跡の長軸に対して3個づつ対称に配され、中央長軸線上に乗る2個が短辺側柱より張り出して位置するもの……………EE21住居跡

I b 類：住居跡の長・短軸に対称に3個づつ配され、I a 類のように中央長軸線上に乗る2個が張り出さないもの……………FB53-1・FE18・HG21・HE15・HF06・HF18住居跡

I c 類：住居跡の長軸に対して4個づつ対称に配されるが、短辺側柱の間隔が徐々に狭まるもの……………HH06・HG06住居跡

II類：柱穴が7個のもの—1棟—

住居跡の長軸に対して一方が3個、他方が2個で構成され、中央長軸線上に乗る2個が短辺側柱より張り出して位置するもの……………HI15住居跡

III類：柱穴が6個のもの—11棟—

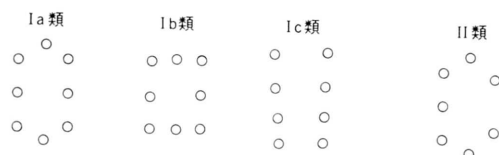
III a 類：住居跡の長軸に対して2個づつ対称に配され、中央長軸線上に乗る2個が短辺側柱より張り出して位置するもの……………EH15・EI15・FB53-2・FC12住居跡

III b 類：住居跡の長軸に対してほぼ直線的に3個づつ対称に配されるもの……………GF21-1・GF21-2・HF56・HG09住居跡

III c 類：住居跡の長軸に対してほぼ直線的に3個づつ対称に配されるが、長軸中央の2個がどちらか一方に寄って位置するもの……………EJ21住居跡

Ⅲd 類：住居跡の長軸に対して3個づつ配

されるが、中央短軸線上の2個が
長辺側柱より張り出して位置する
もの……HH21-1住居跡



IV類：柱穴が5個のもの—2棟—

IVa 類：住居跡の長軸に対して2個づつ対

称に配され、長軸中央線上に1個
が張り出して位置するもの……G
A21住居跡



IVb 類：住居跡の壁に沿ってほぼ正五角

状に配されるもの……F J 18住居
跡



第198図 柱穴配置模式図

V類：柱穴が4個のもの—4棟—

Va 類：住居跡の長・短軸に対称に4個配されるが、短辺長に比べて長辺長がかなり長くな
るもの……F D 62・H G 50住居跡

Vb 類：住居跡の長・短軸に対称に4個配されるが、Va 類に比べて配置形が正方形に近い
形を呈するもの……E H 21・H H 21-2住居跡

VI類：床面上から柱穴状のピットが一切検出されなかったもの……G H 18・G I 18住居跡

VII類：柱穴状のピットは検出されているが、配置の規則性がみられないもの……E E 12・E F
03・E G 21・F C 21・F E 21住居跡

住居跡の平面形と柱穴の配置形との関連は次のようになる。住居の平面プランが楕円形を呈するものは、柱穴の配置形がIa類・II類・IIIa類・IIIc類・Va類となり、円形のものIVb類となる。また、隅丸長方形を呈するものにはIb類とVI類、長方形のものにはIb類・IIIb類・IIIc類とがあり、長方形のものはIc類、正方形に近い長方形のものはIVa類となる。

〔炉〕 炉は竪穴住居跡という限られた空間内での人間活動を象徴する主要な場とも言え、その構造や作られた位置は住居の平面形や柱穴配置とも大きな係わりをもつものと考えられる。以下、炉の構造と配置位置を中心に検討してみる。

<構造> 個々の住居跡に伴う炉には、ただの焼面を示すもの・石組みからなるもの・土器でつくられるものなどがあり、これらを主な基準にして分類した。

A類：住居跡底面が焼けているだけの地床炉である。窪み等はみられず、焼面下の堀り込みも認められない。平面的には不整形ないしは不整形楕円形の広がりを示し、規模は一定しない。本遺跡で検出された住居跡のほとんどがこの類に含まれる。

B類：石を横位の状態に据えた石囲い炉である。円形に石を配したものを B₁類、方形に石を配したものを B₂類とした。B₁類の石囲い炉は、炉縁に10～20cmの川原石を利用しており、大半はすき間なく並べられている。炉底下には浅い掘り込みが認められるが、石を据えるため以上の深さはもたない。B₂類の石囲い炉は、炉縁に20～25cmを計る長大で扁平な石を横置しており、ほとんどすき間はみられない。B₁類と同様に炉底下に浅い掘り込みをもつ。

C類：住居内の床面を掘り窪めた小竪穴状の炉である。平面形が円形、断面形が皿状を呈する。小竪穴の底部を炉面としており、何らの施設も伴わない。

D類：住居跡の床面に土器の口径にあわせて掘り込みをつくり、一個体の土器を埋設した単体埋設炉である。底部を欠いた土器を使用し、直立に据えている。土器の下部には土を埋め戻しており、上部が炉面として利用されている。

C D類：C類とした小竪穴炉とD類の単体埋設炉を組み合わせたものである。小竪穴の底面にさらに凹みをつくって土器を埋設しており、竪穴の規模はかなり大きい。

<位置> 住居跡内における炉の設置位置は、各住居跡によって異なるものもみられ、平面プランとの対応関係から次のように分類される。

I類：住居跡のほぼ中央に位置するもの

II類：住居跡の中央からずれるが、住居跡の中央長軸線上にあるもの

II a類：集落の中央、墓域中心部に近い方にずれるもの

II b類：集落の中央、墓域中心部に遠い方にずれるもの

III類：住居跡の中央からかたより、しかも長軸線上からもやや離れるもの

III a類：集落の中央・墓域中心部に近い方にずれるもの

炉の分類

- A類(地床炉) — A—I類……E I 15・E I 21—1・F B 53—1・F E 21・F D 62・G A 21
・G F 21—2・G H 18住居跡
A—II a類……E E 21・(E G 21)・F J 18・F E 18・(H F 56)・H F 06
H G 50・(H H 06)
A—II b類……F G 21住居跡
A—III a類……H E 15・H F 18・(H G 06)・(H H 21—1)住居跡
A—〔不明〕……E E 12・E F 03・H H 21—2住居跡
- B類(石組炉) — B₁—I類……F B 53—2住居跡
B₁—II b類……G F 21—1住居跡
B₁—〔不明〕……E I 21—2住居跡
B₂—II a類……H I 15住居跡
- C類(小竪穴炉) — C—I類……E H 15住居跡(第1次)
- D類(土器埋設炉) — D—I類……G I 18住居跡
- C D類(小竪穴式土器埋設炉) — C D—I類……E H 15住居跡(第2次)

第16表 住居跡一覽表

	住居跡	平面形	規 模		方 向		周 溝		主 柱 穴		炉		時 期
			床面積 (㎡)	分類番号	分類番号	長軸方位	有 無	範 囲	本 数	分類記号	構 造	分類記号	
1	EE 12	不 明	不 明			不 明	無		不 明		地 床 炉	A-不明	大木 8b 式期
2	EE 21	橢 円 形	57.6 (推)	a 類	A 類	N-41°-W	有	ほぼ全周	9	Ia 類	地 床 炉	A-IIa 類	大木 8a 式期
3	EF 03	不 明	不 明			不 明	無		不 明		地 床 炉	A-不明	大木 8b 式期(?)
4	EG 21	橢 円 形	不 明		A 類	不 明	有	ほぼ全周	不 明		地 床 炉	A-IIa 類(?)	大木 8a 式期
5	EH 21	長 方 形	不 明		A 類	不 明	有	ほぼ全周	4(?)	Vb 類			大木 8b 式期
6	EH 15	(長)橢 円 形	21.8	c 類	A 類	N-50.5°-W	無		6	IIIa 類	小 豎 穴 炉 小 豎 穴 式 土 器 埋 設 炉	C-I 類 (第1次) CD-I 類 (第2次)	大木 8b 式期
7	EI 15	橢 円 形	不 明		A 類	N-38.5°-W	無		6	IIIa 類	地 床 炉	A-I 類	大木 8b 式期
8	EI 21-1	橢 円 形	6.2	g 類	A 類	N-49.5°-W	無		不 明		地 床 炉	A-I 類	大木 8b 式期
9	EI 21-2	不 明	不 明	d 類		不 明	無		不 明		石 組 炉	B ₁ -不明	大木 8b 式期
10	EJ 21	長 方 形	15.3 (推)	f 類	A 類	N-31°-W	有	一 部 分	4(+2?)	IIIc 類			大木 8b 式期
11	FJ 18	円 形	8.2	e 類	A 類	N-97°-E	無		5	IVb 類	地 床 炉	A-IIa 類	大木 8b 式期
12	FB 53-1	隅丸長方形	11.9	b 類	A 類	N-72.5°-W	無		9	Ib 類	地 床 炉	A-I 類	大木 8b 式期
13	FB 53-2	(長)橢 円 形	26.2		A 類	N-6.5°-E	無		6(?)	IIIa 類	石 組 炉	B ₁ -不明	大木 8a 式期
14	FC 12	橢 円 形	不 明		A 類	N-32°-W(?)	有	一 部 分	6	IIIa 類			大木 8b 式期
15	FC 21	橢 円 形	不 明			不 明	無		不 明				大木 8b 式期
16	FD 62	橢 円 形	6.3	g 類	A 類	N-24°-E	無		4	Va 類	地 床 炉	A-I 類	大木 8a 式期
17	FE 18	長 方 形	16.8 (推)	d 類	A 類	N-39.5°-W	無		8	Ib 類	地 床 炉	A-IIa 類	大木 8b 式期
18	FE 21	橢 円 形	不 明			不 明	無		不 明		地 床 炉	A-I 類	大木 8b 式期
19	FG 21	長 方 形 ?	不 明		A 類	N-66°-W(?)	無		8	Ib 類	地 床 炉	A-IIb 類	大木 8b 式期
20	GA 21	(短)長 方 形	22.4 (推)	c 類	A 類	N-16°-E	無		5(?)	IVa 類	地 床 炉	A-I 類	大木 6 式期
21	GF 21-1	長 方 形	13.3 (推)	e 類	A 類	N-32°-W	無		6	IIIb 類	石 組 炉	B ₁ -IIb 類(?)	大木 8b 式期
22	GF 21-2	不 明	不 明		A 類(?)	不 明	無		6	IIIb 類	地 床 炉	A-I 類	不 明
23	GH 18	隅丸長方形	8.3	f 類	B 類	N-1.5°-W	有	全 周	無 し	VI 類	地 床 炉	A-I 類	大木 8b 式期
24	GI 18	隅丸長方形	不 明		A 類	N-38°-W	無		無 し(?)	VI 類			大木 8b 式期
25	HF 56	不 明	不 明			不 明	無		6(?)	IIIb 類	地 床 炉	A-IIa 類(?)	大木 8a 式期
26	HG 50	(長)橢 円 形	8.4	f 類	A 類	N-6°-W	無		4	Va 類	地 床 炉	A-IIa 類	大木 8a 式期
27	HI 15	橢 円 形	27.6 (推)	b 類	A 類	N-17°-E	有	こゝ一部	7	II 類	石 組 炉	B ₁ -IIa 類	大木 8a 式期
28	HF 06	不 明	不 明		A 類(?)	不 明	無		8	Ib 類	地 床 炉	A-IIa 類	大木 8a 式期
29	HH 06	(長)長 方 形 ?	不 明		A 類(?)	不 明	有	こゝ一部	8	Ic 類	地 床 炉	A-IIa 類(?)	大木 8a 式期
30	HG 06	(長)長 方 形 ?	不 明		A 類(?)	不 明	無		8	Ic 類	地 床 炉	A-IIIa 類(?)	大木 8a 式期
31	HG 09	不 明	不 明		A 類(?)	不 明	有		6	IIIb 類			不 明
32	HE 15	長 方 形	15.2	d 類	A 類	N-14.5°-E	有	全 周	8	Ib 類	地 床 炉	A-IIIa 類	大木 8a 式期
33	HF 18	長 方 形	18.8 (推)	d 類	A 類	N-7.5°-W	有	ほぼ全周	8	Ib 類	地 床 炉	A-IIIa 類	大木 8a 式期
34	HH 21-1	(長)橢 円 形 ?	不 明		A 類(?)	不 明	無		6	III d 類	地 床 炉	A-IIIa 類(?)	大木 8a 式期
35	HH 21-2	不 明	不 明		A 類(?)	不 明	無		4(?)	Vb 類	地 床 炉	A-不明	大木 8a 式期

炉の構造と住居跡内における設置位置とを対象にして分類を試みた。それらの特徴を要約すれば次のようになる。炉の構造からみれば、地床炉が圧倒的に多くて23例に数え、以下石組炉が4例、土器埋設炉・小竪穴炉・小竪穴式土器埋設炉が各1例となっている。住居跡内における炉の位置は、地床炉・石組炉の場合ではほとんどが住居の中央に位置するものと中央からはややずれるが長軸線上に位置するものとで占められており、後者のものが大半を数える。住居跡の中央から離れるものは、長軸上からややずれるものも含めて集落(台地)の中心部に近い方にずれるという顕著な特徴をもっており、逆の場合は1例を数えるにすぎない。小竪穴炉・土器埋設炉・小竪穴式埋設炉としたものはすべて床面の中央に位置する。

〔2〕 貯蔵穴状ピット

貯蔵穴状ピット、いわゆる小竪穴状土壌は、台地の北端に集中して検出されており、その総数は129基を数える。生産活動にかかわる機能をもつものという想定にもとづき、一応貯蔵穴状ピットとして一括してある。

〔形態分類〕 貯蔵穴状ピットの形状は、断面形・規模・内部施設などを基準にしていくつかに分けられる。ここでは、断面形によって大きく2分し、その細部の形状・規模・内部施設などで細分した。

A類：断面形が上小下大のフラスコ状を呈するもので、フラスコ形ピットとして分類した。

B類：断面形が上下ほぼ同値の円筒状を呈するもので、ビーカー形ピットとして分類した。

A類のフラスコ形ピットは、くびれをもつ位置、開口部・底部の大きさと深さとの比率などからAⅠ類からAⅥ類までの6つに分類される。

AⅠ類：開口部よりかなり下位のくびれ(頸部)までほぼ垂直に移行し、底部が大きく広がるものである。開口部径に比べて底部径が極端に大きくなる。

AⅡ類：開口部が大きく開き、開口部と底部のほぼ中央付近に大きくくびれた頸部が形成されているものである。開口部径・底部径に比べて深さがやや大きくなる。

AⅢ類：開口部が大きく開き、開口部がかなり下位にくびれ(頸部)が形成されているものである。開口部径・底部径はほぼ同数値を示すが、深さがそれよりもやや小さくなる。

AⅣ類：開口部はあまり開かず、開口部のやや下位にくびれ(頸部)が形成されているものである、開口部径・底部径に比べて深さがかなり小さくなる。

AⅤ類：底部より開口部にかけて直線的に内傾し、くびれ(頸部)をもたないものである。

AⅥ類：底部より開口部にかけて直線的に内傾し、くびれ(頸部)をもたないものであるが、

A V類とは異なり深さに比べて開口部・底部が広がるものである。

A I～A VI類に分類されたフラスコ形ピットは、さらに大きさによって分けられる。

A I 1類：深さが 155 cmを超えるもの — 2基—

2類：深さが 130 cm±を計るもの — 4基—

A II 1類：深さが 170 cm±を計るもの — 5基—

A III 1類：深さが 150 cm±を計るもの — 9基—

2類：深さが 125 cm±を計るもの — 10基—

A IV 1類：深さが 150 cm±を計るもの — 8基—

2類：深さが 100 cm±を計るもの — 3基—

3類：深さが 70 cm±を計るもの — 2基—

A V 1類：深さが 150 cm±を計るもの — 11基—

2類：深さが 120 cm±を計るもの — 19基—

3類：深さが 80 cm±を計るもの — 9基—

A VI 1類：深さが 120 cm±を計るもの — 4基—

2類：深さが 90 cm±を計るもの — 6基—

3類：深さが 50 cm±を計るもの — 5基—

以上のようにA類の土壌群は14類に分類された。これらの土壌は内部施設の有無によって、さらに下記のように細分することが可能である。

a類：塙底に何らの施設も伴わないもの。

b類：塙底のほぼ中央に小穴を有するもの。

c類：塙底のほぼ中央に小穴を有し、それを中心に放射状の溝を走らすもの。

上記のa・b・c各類は先に分類した記号と組み合わせ、A I a類、A II 2 b類などと呼称する。数量的にはa類が最も多く、b・c類の検出個体数は少ない。とくにc類はフラスコ形ピット全体を通じてわずかに7例が数えられるのみである。

B類のビーカー形ピットは、深さと底径の比率によってB I類からB V類までの5類に大別される。

B I類：底径に比べて深さが極端に深くなるもので、深さが底径よりも大きくなるものをこの類に分類した。

B II類：底径に比べて深さがやや深くなるもので、深さと底径の比が約1：1.3を計る。

B III類：底径に比べて深さがやや浅くなるもので、深さと底径の比が約1：1.7を計る。

B IV類：底径に比べて深さがかなり浅くなるもので、深さと底径の比が約1：2.1を計る。

B V類：底径に比べて深さが極端に浅くなるもので、深さと底径の比が約1：2.5を計る。

B I 類からB V 類まで分類されたピーカー形ピットはさらにその大きさによって以下のように分類される。

- B I 1 類：深さが 130 cm±を計るもの — 2 基—
- 2 類：深さが 80 cm±を計るもの — 1 基—
- B II 1 類：深さが 130 cm±を計るもの — 2 基—
- 2 類：深さが 90 cm±を計るもの — 2 基—
- 3 類：深さが 65 cm±を計るもの — 1 基—
- B III 1 類：深さが 100 cm±を計るもの — 2 基—
- 2 類：深さが 80 cm±を計るもの — 4 基—
- 3 類：深さが 65 cm±を計るもの — 2 基—
- B IV 1 類：深さが 90 cm±を計るもの — 3 基—
- 2 類：深さが 75 cm±を計るもの — 2 基—
- 3 類：深さが 60 cm±を計るもの — 2 基—
- B V 1 類：深さが 75 cm±で、内径が 200 cmを超えるもの — 3 基—
- 2 類：深さが 70 cm±で、底径が 180 cm±を計るもの — 3 基—

以上のように、B 類のピーカー形土壇群は12類に分類された。これらの土壇はその内部施設の有無によって、さらに下記のように分類することが可能である。

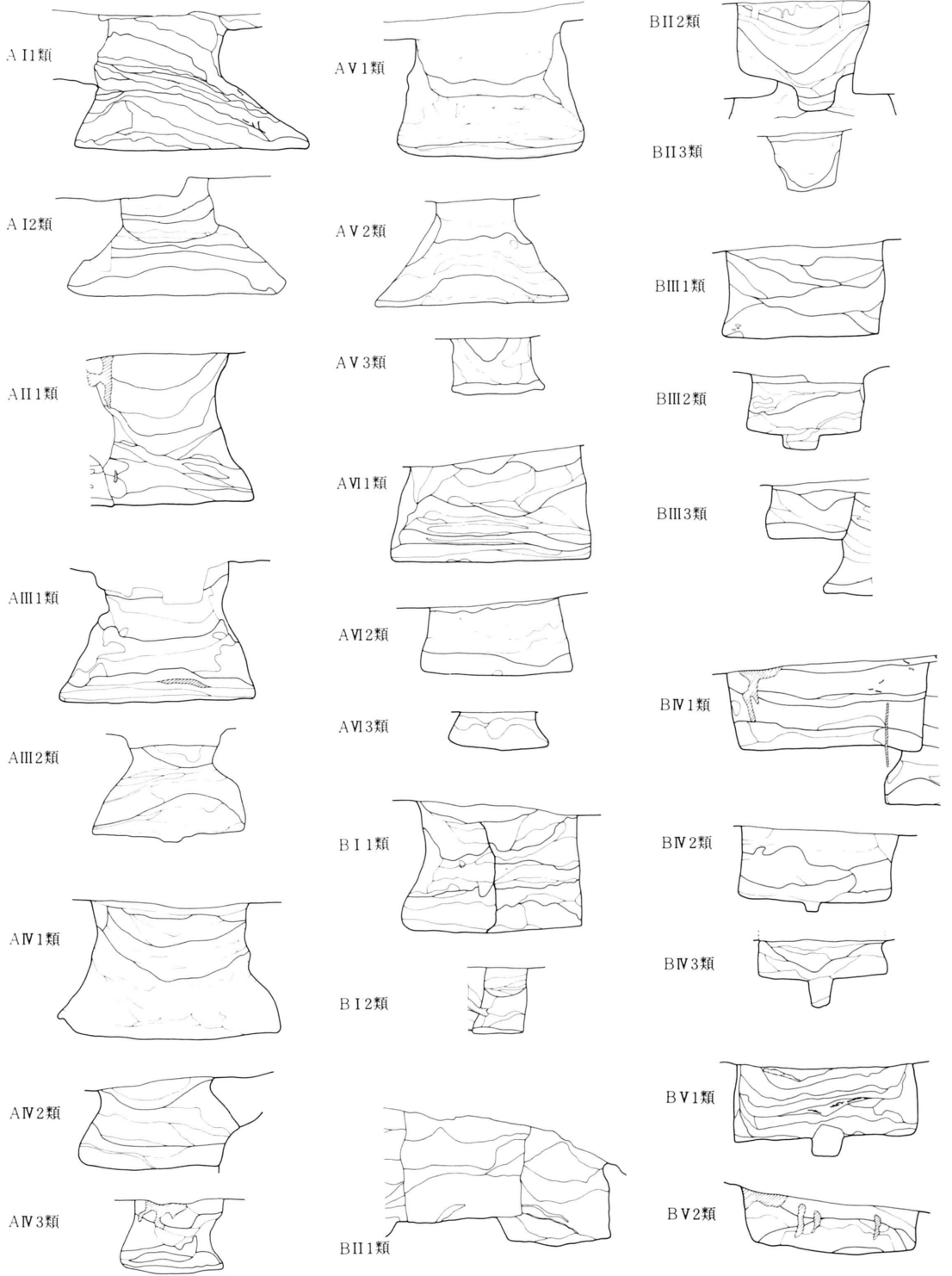
- a 類**：壇底に何らの施設も伴わないもの。
- b 類**：壇底のほぼ中央に小穴を有するもの。
- c 類**：壇底のほぼ中央に小穴を有し、それを中心に放射状の溝を走らすもの。
- d 類**：壇底のほぼ中央に小穴を有し、壁に沿って溝を全周させるもの。

以上の a ~ d 各類は先に分類した記号と組み合わせ、B I 1 a 類、B II 2 b 類などと呼称する。全体的には a・b 類が多く、c・d 類の検出数は少ない。特に d 類は 1 例を数えるのみである。

類型別検出数

分類記号			検出数	分類記号			検出数
A	I	1a	2	B	I	1a	1
		2a	4			b	1
	II	1a	2		2a	1	
		b	2		II	1a	1
		(不明)	1			2b	2
	III	1a	8		3b	1	
		b	1		III	1a	1
		2a	7			b	1
		b	2			2a	1
	IV	c	1		b	3	
			1		3a	1	
		2a	3		b	1	
		3a	2		IV	1a	1
	V	1a	8			b	1
		b	2		c	1	
		c	1		2b	1	
		2a	14		c	1	
		b	2		3a	1	
	VI	c	3		b	1	
			3a		6	V	1a
		b	3		c		1
VII		1a	2	2a	2		
		b	2	d	1		
	2a	4	計	27			
	b	2	総計 (A+B)	129			
c	2						
3a	4						
b	1						
不明		3					
計		102					

— 西田遺跡 —



第199図 貯蔵穴状ピット分類図

〔遺物の出土状況〕 本遺跡で発見された遺物（とくに土器）の大部分は、こうした小竪穴状土構より発見されたものである。この遺物は、祭礼に持ち込まれた土器が忌棄されたものと考えられ、堆積土の上層から出土したものが大半を占めている。ただ、埋土そのものは自然的な営力による堆積状況を示す場合が多く、土器だけが投げこまれたものと思われる。発見された土器はほとんどが復元可能のものであるが、完全な形をとどめるものは少なく、縦ないし横に半載されたかたちで出土するものが眼につく。この場合、異なるピットに分散して投棄するものとは言えず、少なくとも調査区内で検出されたピット間での接合資料はみられない。土器を投棄するに際してそこに何らかの意志が働いていたものであろう。

出土した土器は、その土器型式からみれば大木 8 a 式に分類されるものがほとんどを占めており、貯蔵穴状ピットが集中して占地する台地北縁に位置するものは大部分が該期に属すものと思われる。ただ集落の内側に張り出すものや、台地北縁からはなれて位置するものには、明らかに大木 6 式期ないしは大木 8 b 式期に属すものが認められる。また、少数ではあるが、これらの時期（とくに大木 8 b 式期）に属すものが台地北縁の密集区にもみられることから、竪穴住居跡の出土遺物から分析された時期的様相と完全に一致するものといえる。

〔3〕 墓 壙 群

1 墓壙の分布形態

192 基を数える墓壙群は遺跡の中心部に占地しており、その分布形状は東西にやや長い環状を呈する。外径で約 28～31（+7？）m、内径で約 23～29 m の“環”の中にそのほとんどの土壙が集中して配され、ごく少数のものが内径内側の墓域中心部に位置する。

墓域におけるこれらの墓壙群の分布形態は、あらかじめ分割された区画の複合体となるものと思われ、墓壙全体が一様な分布を示すものではなく、10数体ないしは30数体を単位とした一定のかたまりを成している。

墓壙の平面形は完全な円形を呈するものは1例もなく、小判形・隅丸長方形・楕円形を呈するもので占められ、その長軸方向はごく少数の例外を除いて墓域（環）の中心を向いている。この長軸方向は一定のかたまりをもっており、その方位によって全墓域を8つの構成単位に大別することが可能である。この構成単位を“群”と呼称し、次下全墓壙を群別に列記する。なお、東位の墓壙群をA群、北東位のそれをB群、北位をC群、北西位をD群、西位をE群、南西位をF群、南位をG群、南東位の墓壙群をH群として分類した。

〔A群〕 A群のピットは東位に占地し、次の7基のピットがあてられる。大半のピットが調査

区外東側に延びるため実体は不明である。

A₂ 群 : GB 655、GB 656、GB 657、GB 681、GB 682、GC 681、GD 681

A 群のピットは、長軸方位をN-69°-EからN-79°-Eの間にもつものである。この群のピットがいくつかの小群に分けられるものかは不明であり、すべて一括した。

A 群のピットと隣接する北東位のB群との切り合いがみられ、A群のGB 657ピットがB群のGA 683ピットを切って構築されている。A群内のピット相互の重複は認められない。

〔**B群**〕 B群のピットは北東位に占地し、次の29基のピットが含まれる。

B₁ 群 : GA 654、GA 656、GA 681、GA 682、GA 683、GB 621、GB 651、GB 652
GB 653、GB 654、GB 658

B₂ 群 : FI 658、FJ 621、EJ 622、EJ 624、FJ 651、EJ 652、FJ 653、FJ 654、FJ 655
FJ 657、FJ 681、GA 621、GA 622、GA 651、GA 652、GA 653、GA 655、GB 622

B群のピットは、長軸方位をN-36°-EからN-51°-Eの間にもつが占地の平面的な間隙性と長軸方位の類似性によって上記の2小群に分けられる。少数の例外を除いて、B₁群はN-40°-EからN-56°-Eの間に長軸方位をもち、B₂群はN-36°-EからN-45°-Eの間に長軸方位をもち、B群のピットは隣接する東位のA群・北位のC群の相方と重複関係がみられる。B群のFI 658ピットはC群のFI 657ピットによって切られ、GA 683ピットはA群のGB 657ピットによって切られており、両群から侵食されている。この群のGB 658ピットがA群の2ピットを破壊しているが、形状・規模ともやや異なるピットであり、時間差が想定されるものである。また、B群のピット相互間ではかなりの重複関係がみられる。

〔**C群**〕 C群のピットは北位に占地し、次の24基のピットが含まれる。

C₁ 群 : FI 621、FI 622、FI 623、FI 624、FI 656、FI 567、FJ 592、FJ 593
GA 561、GA 591、GA 592

C₂ 群 : FH 651、FH 566、FI 562、FI 563、FI 564、FI 565、FI 591、FI 625
FJ 591、FJ 594、FJ 561、FJ 562、FJ 563

以上のピットは、長軸方位をN-6°-WからN-25°-Eの間にもつものであるが、長軸方位の類似性によって上記の2小群に分類した。C₁群はN-18°-EからN-25°-Eの間に長軸方位をもち、C₂群はN-6°-WからN-14°-Eの間にもつ。占地の平面的な間隙性を強調すれば、FI 591、FI 625の2ピットがC₁群に含まれる。

C群のピットは、北東位のB群との重複がみられ、FI 657ピットがFI 658ピットを破壊しており、B群に張り出してつくられる。また、D群内に占地するFI 534ピットはその長軸方位からみれば、この群(C₂群)に含まれる可能性をもち、C群内での切り合いは数が少なく、1例を数えるのみである。